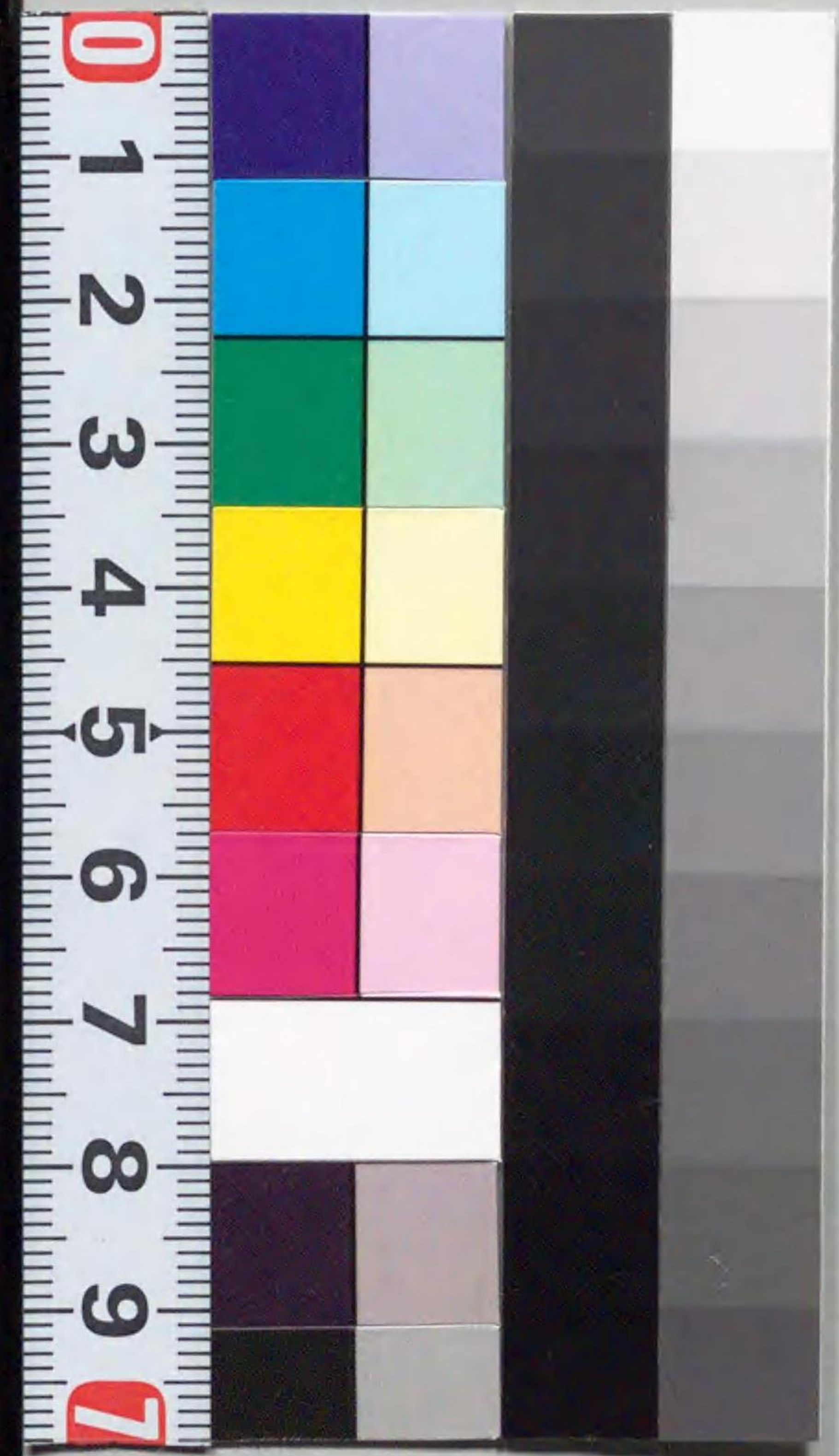
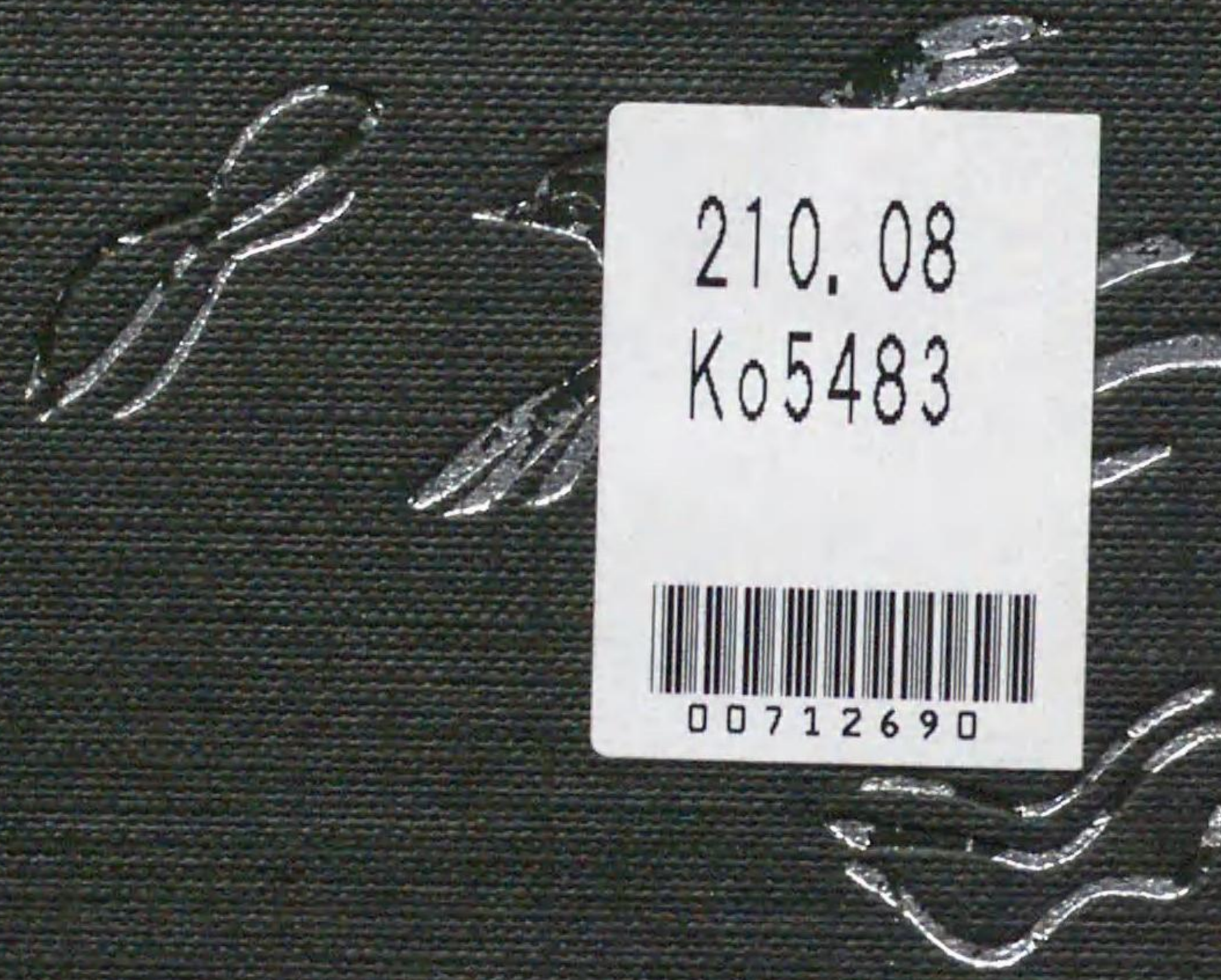


210.08  
Ko5483



00712690



2  
K







文學

矢野太郎編

國史叢書

藝侯三家誌

一

國史研究會藏版





文學士 矢野太郎編

國史叢書

藝侯三家誌

一

國史研究會藏版



210.08  
K05483



712690

三家誌七卷、毛利・吉川・小早川三家の發展史なり。筆を武田と吉川・毛利の牟盾に起し、武田の滅亡となり、陶氏を襲撃して義名を博し、尼子氏を破りて武威大に振ひ、是より毛利氏の中國に於ける勢力牢として抜く可からず、遂に織田氏の將たる豊臣氏との攻戦となり、和睦を経、朝鮮再度の從軍、太閤の薨去によりて振旅歸陣に至る。卷頭三章、大内氏と三好氏と互に將軍を擁して覇を中央に争へる趣を敘し、當初に於ける天下の大勢を示し、以て本書の發題とせり。本書三家の發展史として見るべく、又足利幕末より織豊氏時代に及べる中國史として見るべし。吉田物語と記事互に出入し、以て相發するに足る。著者は未だ之を詳にするを得ず、蓋し三家の臣の文筆あるものゝ所爲歟。或は云ふ、陰徳太平記著者一派の手に出づと。未だ其當否を知らず。

大正六年十二月

難鳴記

解題

一



例言

- 一、本編には藝侯三家誌卷一より卷四迄を採收す。
- 一、一般讀誦の便を計れること、及び其他の凡例は既刊の諸書に同じ。

目次



藝侯三家誌

卷一

- 大内義興義尹卿を扶助し奉る事附  
義尹上洛の事……………一頁
- 三好長輝入道父子自害の事并義尹  
再び將軍に補し給ふ事……………四
- 義澄薨去并船岡山合戦の事……………六
- 武田元繁安藝探題として下向の事……………九
- 元繁諸處發向の事……………一〇
- 吉川高橋有田城を論ずる事附武田  
有田城を攻むる事……………二二

目次

- 多治比元就武田勢と合戦の事……………二四
- 元就再び中井手有田合戦の事……………二七
- 武田元繁最期の事……………三二
- 大内義興防州下向の事……………三五
- 吉川慶本并毛利興元卒去の事……………三六
- 青屋城攻附高橋大九郎最期の事……………三七
- 大内義興藝州發向附元就鏡山城を  
陥るゝ事……………三九
- 毛利元就本家相續の事附相合就勝  
の事……………三三
- 大内藝州佐東金山櫻尾の兩城を圍  
む事……………四〇
- 尼子勢金山後詰……………四三
- 元就夜討の事……………四四
- 大内櫻尾より歸陣の事……………四七



大内龍藏寺和平 附石州濱田合戦の事……………四  
 元就上洛 井武田熊谷不和の事……………五  
 尼子經久三男鹽冶興久と不和の事……………五  
 佐田城没落の事……………五  
 末次城軍の事 附興久備後沈落の事……………六  
 元就備後安藝所々城攻の事……………七  
 元就尼子と不和になる事 附晴久藝州吉田發向の事……………七  
 九月九日十二日合戦の事……………八  
 九月二十三日合戦の事……………八  
 尼子紀伊守國久と南條宗勝合戦の事……………八  
 土採場の合戦の事……………八  
 吉川興經等宮崎に寄せらるゝ事……………九

大内勢吉田後詰の事……………九  
 尼子晴久敗軍の事……………九  
 藝州佐東金山 井廿日市櫻尾落城の事……………一〇

卷二

大内義隆雲州發向の事……………一〇  
 熊谷平三討死 附赤穴城明渡す事……………一〇  
 富田菅谷の蓮池合戦の事……………一〇  
 金尾の洞光寺合戦の事……………一一  
 富田河合戦の事……………一二  
 大内敗軍 附周防介溺死の事……………一五  
 小早川又太郎正平討死の事……………一八  
 備後國府野鬪の事……………二二  
 元春隆景他家相續の事……………二五

備後國神邊軍の事……………二九  
 毛利元就山口下向の事……………三一  
 神邊の城没落 附目黒自殺の事……………三一  
 陶隆房相良遠江守と不快の事……………三五  
 陶隆房隱謀の事……………三七  
 義隆山口没落 附大寧寺に於て自害の事……………四〇  
 大内新介及び公家人々最期 附相良武任自害の事……………四四  
 杉伯耆守自害 附左京大夫山口に入る事……………四四  
 藝州西條槌山城没落の事……………四六  
 備後國泉合戦の事……………五〇  
 祝の城没落の事……………五五  
 備中國猿懸城軍の事……………五七

尼子晴久播州發向 附高田合戦の事……………五九  
 尼子晴久新宮黨を殺す事……………六〇  
 毛利元就陶晴賢入道全薑と不和の事……………六一  
 元就神領發向の事……………六三  
 宮川甲斐守藝州に向ふ事 附折敷畑合戦の事……………六五  
 長安城明退く事 井大田懸の橋合戦の事……………七一  
 野間隆實降參の事……………七二  
 諸處在番 井陶入道江良丹後守を殺す事……………七五  
 元就嚴島城を築く事……………七七  
 仁保島合戦の事……………七九  
 陶入道嚴島渡海 井合戦の事……………八〇



弘中參河守同中務最期の事……………一九三  
 陶入道全薑最期の事……………一九四  
 陶長房自害附防州鞍懸城没落の事……………一九七  
 山内隆道元就に與す井元春石州發向の事……………二〇二  
 防州若山城明退く事……………二〇五  
 須々萬城度々合戰の事……………二〇五  
 毛利元就山口發向附大内義長滅亡の事……………二二一  
 所々一揆蜂起井益田越中守降參の事……………二二七

卷三

石見國出羽合戰の事……………二二〇  
 元就父子石州發向附尼子後詰井小笠

降參諸侍再び毛利家に背く事井尼子晴久卒去の事……………二二七  
 毛利大友和平井毛利隆元卒去の事……………二二八  
 雲州白鹿城攻の事……………二八一  
 元就洗合に陣城を築かるゝ事……………二八七  
 雲州伊藤城明退く事……………二八九  
 弓濱合戰の事……………二九〇  
 郷人一揆退治の事……………二九一  
 三村修理亮伯州發向の事……………二九二  
 杉原播磨守伯州泉山入城の事……………二九三  
 輝元元長雲州發向井富田麓合戰の事……………二九五  
 富田城下三所に於て合戰の事……………二九八  
 富田退口合戰の事……………三〇五  
 伯耆國江美落城の事……………三〇六

原降參の事……………二二五  
 福屋隆包毛利家に背く事……………二二六  
 石州中之村城没落の事……………二二七  
 石州松山落城の事井福屋隆包漂泊の事……………二三四  
 別府合戰井新原軍の事……………二四〇  
 石州山吹城攻の事……………二四六  
 本庄越中守毛利家に屬する事……………二四八  
 本庄越中守一揆原退治の事……………二五五  
 本庄越中守本田豊前守と乃木に於て相戰ふ事……………二五六  
 宍道多賀南條行松等家城に歸入る事……………二六〇  
 豊前國門司城合戰の事……………二六七  
 本庄父子誅戮の事……………二六九

大江城没落の事……………三〇七  
 富田所々附城井山中鹿之助夜討の事……………三〇九  
 熊谷原偽りて元就に降る事……………三二二  
 尼子諸將降參の事……………三二四  
 尼子義久下城の事……………三二五

卷四

伊豫國河野加勢の事……………三三四  
 豊前國三ヶ嵩城攻の事……………三三七  
 筑前國立花城攻井大友後詰の事……………三三六  
 五月十八日合戰の事……………三四二  
 庄式部少輔豊後勢と合戰の事……………三五二  
 尼子勝久雲州亂入の事……………三五二  
 天野紀伊守敵を方便する事……………三五七



米原心變 附南條山田伯州に歸る 井 三五八  
 立花城明渡す事……………三五六  
 雲州富田麓合戦の事……………三六一  
 雲州原手合戦の事……………三六二  
 雲州美保關合戦の事……………三六五  
 神西三郎左衛門再び尼子に與する 事……………三七二  
 美作國高田城合戦の事……………三七二  
 備後國神邊合戦の事 井防州關所合 戦の事……………三六〇  
 大内輝弘山口に入る事……………三六一  
 元春隆景九州立花退陣の事……………三九二  
 立花城明渡す事……………四〇〇  
 大内輝弘山口没落 井最期の事……………四〇三

目次終



藝侯三家誌卷一

一 大内義興義尹卿を扶助し奉る 附義尹上洛の事

足利義尹 北國に遁 行く

大内義興 義尹を守 護す

明應二年前將軍義尹公、細川右京大夫政元が爲に都を退き、北國迄落ち行き給ふと雖も、北國も悉く兵亂にて頼むべき方なく、夫より又攝津の國に到りて〔頭書〕北國より美濃へ出で、伊勢路を越え、伊賀・大和を経て攝津へ到り給ふと云々。四國へ渡らんとて、阿波の鳴門の澳に泊り、阿州の國人を語らはると雖も、一人も參る者なければ、夫より周防の國府に到り、天神の宮司大全部を旅館として、同國山口大内左京大夫義興が許へ、上野民部大輔を以て頼思はるの由言遣さる。大内介一議にも及ばず、則ち山口神光寺に御所を建て入れ奉れば、近國の武士馳せ集りて是を守護す。京都には細川政元が計ひにて、源義澄卿此時は義通と云ひて、伊豆國におはせしを迎へて、明應三年十一月に正五位に敘し左

大内義興義尹卿を扶助し奉る 附義尹上洛の事



細川政元  
足利義澄  
を迎へて  
將軍とす

馬頭に任じ、同十二月に征夷大將軍になし奉りて謁仰す。

〔頭書〕或書に云く、義澄將軍は故東山義政の御舍弟、關東堀越の御所政近の御次男、洛外天龍寺香嚴院に御坐しけるを取立て、將軍に成し奉る。法住院殿是也云々。此時義澄通名を義高と改めらる。斯くて同九年改元有りて、文龜元年に移る。其頃迄は舊將軍は義材卿と申せしが、今歲義尹と改めらる。同二年、京都新將軍義高參議に任じて、名を義澄と易へらる。永正四年六月、細川右京大夫政元熊野へ參籠せんとて浴室に入りけるに、家人香西又六逆心を挟み居けるが、此時政元の祐筆戸倉次郎と云ふ者を賺して、政元を弑害せしむ。是より洛中大に擾亂す。大内介、此由を傳へ聞きて、時節到來しぬと思ひければ、舊將軍義尹を取立て、永正四年十一月廿〇日に、先づ領國周防・長門・豊前・筑前の勢二萬餘騎を隨へて、山口を打立つ。相隨ふ大名には大友氏統・島津忠久・星野親忠・麻生元重・龍藏寺肥前入道・高橋統種等馳せ加はる。義尹安藝の國府に著き給へば、武田太郎左衛門元繁一番に馳參る。其外宗戸安藝守元深・平賀太郎左衛門尉・毛利備中守興元・吉川伊豆守國經・天野六郎左衛門

政元殺さる

西國勢義尹に隨ふ

義尹東上

尉・小早川・熊谷等七千餘騎、石見國には高橋・吉見・山名・益田・三隅・福屋・小笠原已下相加はる。夫より備後の鞆へ著き給へば、宮・三吉・山内・木梨・檜崎等來り集れば、備中の細川・伊勢・庄・石川・三村・清水、出雲國に尼子・三澤・湯・淺澤・三刀屋・淺山・兵道・廣田・櫻井・鹽屋、伯耆には山名・南條・小鴨・行松、因幡には武田・吉岡、但馬に山名の一族、美作に兩齋藤・三浦・蘆田・市・播州に赤松、攝津に池田・伊丹の者共次第に馳加はる。義尹卿は鞆の浦にて越年し、永正五年正月上旬、後れたる九州の味方悉く待揃へて、此所より船に乗り、二月二日攝州尼ヶ崎に著き、難波・住吉・天王寺邊迄陣を取らる。京都には當時の執事細川右京大夫澄元是を聞きて、在京の大名を集めて、將軍の御前に於て評議し、數萬の軍勢を攝津・難波邊へ差向けて戦はしむるに、京勢遂に打負け、逃げて退く。京都には重ねて勢を催すべき力なくて、管領右京大夫澄元、四月九日京を没落して阿波國へ引退く。將軍義澄は、同十六日近江國へ逃下りて、佐々木を頼みて居給ふ。舊將軍義尹は同月廿七日、泉州堺に著きて在陣し給へば、大内介義興は先達て入洛す。

義尹入洛

大内義興義尹卿を扶助し奉る附義尹上洛の事



〔頭書〕後土御門院御宇明應二年四月、將軍義材卿畠山彈正少弼義豊を退治の爲に、河内國へ發向して正覺寺に陣取らる。義豊譽田に在城するに依つて是を攻めらる。毎度寄手利を失ふ。其後義豊潛に細川政元に加勢を頼みて正覺寺を攻む。將軍方敗軍して、畠山尾張守政長戰死す。細川政元將軍を捕へて、家人物部紀伊守が家に置きて守護せしむ。然るに將軍六月四日の夜忍んで物部が家を出で、侍二人召具し北國へ落ちらる。上野民部大輔・伊勢左京亮・廣戸刑部少輔兼ねて心を合せ、逢坂にて待受け、越中の國迄供奉すと雖も、頼む方なく美濃路へ立歸ると云々。

## 二 三好長輝入道父子自害の事并義尹再び將軍に 補し給ふ事

三好筑前守長輝入道奇雲は、將軍義澄並に細川右京大夫一戰にも及ばず、京都を没落せられし事を口惜く思ひ、五月中旬阿波國より攝州へ發向し、細川・佐々木等と牒

三好長輝  
の擧兵

し合せて、京都を攻めんとす。三好筑前守長光・同弟又次郎長則を追手の大將として、阿波讃岐の兵一萬餘騎尼ヶ崎に陣を取る。前筑前守入道奇雲は、三千餘人にて同國芥川に控へて、佐々木六角定頼と相圖の日を待ち居たり。洛中にも兼ねて此事聞えければ、武田彦太郎親信に備後・安藝の軍士七千餘を附けて、日の岡峠に差向けらる。是は江東より寄る敵を防がん爲なり。又三好父子を支へん爲め、陶入道道麒に九州の勢二萬餘を添へて東寺へ遣さる。大内介義興は手勢一萬五千を隨へて、弱からん味方を扶けんとて、大宮通三條・四條邊に控へたり。三好筑前守長光相圖の日を違へじと、七千餘騎鳥羽路を経て大宮表へ押寄す。大内の先陣杉十郎、大宮より七條へ駈出で、射手八百人を揃へて散々に射さす。寄手にも鏃を揃へて矢を放つ。然る處に陶入道道麒、九國の勢を率して敵の後へ廻り、羅生門の邊口り、関を作つて喚き懸る。三好前後の敵に駈立てられ、入替る味方もなければ終に打負け、百萬遍知恩寺に駈入り、父子三人自害し亡せぬ。今度三好脆く一戰に負けし事は、佐佐木六角定頼が兼ねての相圖相違せし故と聞ゆ。其後大内義興軍に打勝ちて、洛

長輝父子  
自盡す



中に敵一人もなき由義尹卿に告げければ、六月八日入洛し給ひ、七月朔日三位に敍し、權大納言に任じ、征夷大將軍に再補せらる。大内介義興をば管領職に任せられ、〔頭書〕大内任管領事、古來非斯波・細川・畠山三家一則所詮他家無任此職是濫例之初也。畿内・中國・西海の成敗を掌らしむ。

### 三 義澄薨去并船岡山合戦の事

義尹卿威光日々に盛にして、年來の怨敵も多く降參す。斯かれば早く義澄を攻め亡さんとて、永正六年・七年の間、兩度討手を向けらるゝと雖も、京勢皆勝利を失ひ歸る。然るに同八年八月十四日、前將軍義澄江州岳山に於て、行年三十二にして病死し給へば、京都には義尹卿を始め奉り、今は心安しとて彌々安堵の思ひをなさるゝ處に、同月細川右馬頭政賢・同阿波守政國・三好・佐々木等、攝津・阿波・讃岐・近江の勢三萬餘騎、其外東國の兵少々馳加りて京都へ攻上る由、諸所より早馬を打つて告來る。京都には折節無勢なれば一先落ちて、重ねて勢を催し上洛すべしとて、將軍義尹・大内介相共に丹波へ赴き給ふにより、細川右馬頭政賢頓て京都へ入易る。將軍

足利義澄薨す

義尹丹波へ落つ

船岡山合戦

義尹丹波の龜山に御坐して、重ねて京都を攻められんとて軍勢を催さる。此由京都へ聞えければ、細川右馬頭政賢・同阿波守政國・其外三好・佐々木・土岐・武田已下、船岡山に城を構へて敵を相待つ。將軍義尹卿は、八月廿七日の夜半に丹波を發し給へば、畠山尾張守植長・同播磨守元長・山名宮内少輔氏明・其外赤松・尼子・武田・吉川・毛利・平賀・小早川以下八萬餘騎、廿八日の曉船岡山へ馳向ふ。將軍は高雄山に御陣を居ゑらる。大内義興は手勢一萬餘騎を引分け、陶問田等を先陣として進まる。京勢も船岡山を右馬頭政賢の本陣として、三萬餘騎は皆山下に備ふ。斯くて寄手の先陣城下へ押寄せ鬨を作れば、京勢も相懸りにして暫く矢軍に時を移す。其後大内の手より、陶問田三千餘拔連れて切つて懸り、安見・筒井・遊佐等が勢を忽ち突崩す。佐々木の一族斯波・小笠原以下入替りて防戦ふ。大内又一萬餘騎を前後に立て駈向へば、尼子伊豫守經久・武田太郎左衛門尉元繁・赤松入道・山名但馬等も同じく繼いで懸れば、京勢にも細川・三好・土岐・佐々木・大館・村上・長尾以下三萬餘騎、馳向つて入亂れ相戦ふ。大内義興諸卒に先立ち敵を追立て、船岡山の大門迄攻近づく。

義澄薨去并船岡山合戦の事



細川政賢  
討死す

右馬頭政賢自ら味方を恥しめ駈出でらるれば、寄手暫く猶豫す。蒲生兵衛大夫、政賢の前に立塞り、轡を取つて引返せば、大内勢又討つてかゝる。尼子・赤松・山名等の西國勢押續いて攻寄れば、細川・土岐・佐々木・小笠原其外の東國勢渡合ひ、兩陣十萬餘の兵思ひ／＼に相戦ふ。右馬頭動もすれば先駈して下知せらる。大内義興他の敵には目を掛けず、大將を討たんと一の城戸へ攻近づく。政賢又駈出で紅の扇を以て下知をなし、敵の先陣引色に見ゆれば、右馬頭一際勇みて味方を進め、真先に駈けらるゝ處に、大内勢大將と見て、十方より射懸くる矢、政賢の胸板に中つて馬より落つ。隨兵抱き抱へて周章す。大内義興是を見て、味方を勇めて鬨を作つて進めば、衣笠山に陣取りたる細川高國も喚いて駈出で、諸軍勇みて攻付くる。城兵は大將討死するに依つて力戦する事能はず、洛中洛外へ逃げ行くを、西國勢追駈けて討取る首數五千餘級、其外切捨數知らず。爰に小笠原又九郎元長は、味方の落行くにも顧みず、大手の櫓に登り、敵數多射伏せ矢種盡くれば、大剛の者の自害するを見よとて、立ちながら腹を切り、櫓より飛落ちて死す。其外諸國より馳せ集りたる京勢は、皆己

義尹京都  
に入る

が國々へ逃下れり、將軍義尹卿は船岡山の合戦に打勝ち給へば、夫より高雄山に雨三日逗留し。洛中無爲に成りしかば、頓て歸洛して先づ妙本寺に在陣し、其後御所に入御せらる。大内義興今度の軍功に依つて、永正九年三月に従三位に敘せらる。同十年五月、將軍義尹卿諱を改めて義植卿と申し奉る。其後義澄の御子義晴、將軍義植と和睦し給ふ。

〔頭書〕大永元年三月、義植公又退没京都出奔于淡州武養號島公方。同六月義澄男義晴上洛、嗣柳營時十一歳。十二月補征夷大將軍、同二年四月九日、義植薨淡州武養、五十八歳。

#### 四 武田元繁安藝探題として下向の事

吾朝戰國に入りて年久しと雖も、都鄙いよく彌いよく靜謐ならず。諸國の侯伯我勝つよきに剛よきは柔を討ちて之を併せ、家臣其主を弑して國を押領す。京都には舊將軍義澄卿、去る永正八年江州に薨せられてより、幼子義晴を將軍義植たね卿子として和睦し給ふと雖も、各、

武田元繁安藝探題として下向の事



武田元繁  
安藝探題  
となる

所従の諸臣に於ては、胸中互の鬱憤遺して、洛中頗る穩ならず。國々に到つては干戈鳴止む時なし。此時安藝の國侍互に所領を貪り、所々に於て私の合戦あつて、國中靜ならざるに依りて、永正十三年、同國佐東金山の城主武田太郎左衛門尉元繁に、急ぎ本國に下向して國中平均の謀を成すべしと、公方義植命せられて、元繁を判官に補し、安藝の探題として差下さる。國の探題下向の上は、藝州早速安穩なるべきと思ふ處に、當國の武士多く彼下知を用ひざれば、武田金山の家城に入ると雖も、曾て國中靜謐の功をも成さず、却て國人在京の隙を窺つて、所々の城々を切取り、我威を國中に振はんとす。

### 五 元繁諸處發向の事

永正十四年二月十日、武田刑部判官元繁家城佐東の金山を立ちて、同國山縣の今田と云ふ所に陣取り、山縣の一族多く武田を背くに依つて、悉く攻め隨へ、夫より新庄吉川伊豆守國經の領内へ相働かんとす。此時國經は在京にて、嫡子治部少輔元經、祖

武田新庄  
を攻めて  
敗る

父駿河守經基入道慶本の老病を扶助して、居城に有りしが急ぎ駈向つて、同月十二日宮庄に於て〔頭書〕一説に武田と防戦は、藝州新庄の内、寺原の臺が尾と云ふ所なりと云ふ説あり。武田と相戦ひ、即時追ひ崩し、敵數多討取りければ、武田勢其後は寄せ來らず。〔頭書〕森脇七郎左衛門・同彌十郎於寺原討死と系圖にあり、此時の事歟。其後武田猶ほ國中を打隨へんとて、與力の國人を招きけるに、熊谷次郎三郎元直香川兵庫助・已斐入道・飯田・山田・遠藤・福島・新里・入江・山中・温科以下、多く一味しければ、其勢を合せて三千餘騎になりぬ。之に依つて所々に押寄せ、小城十四五箇所を攻め落す。〔頭書〕熊谷次郎三郎元直云々、民部少輔膳直子の母は温科の女なり。伊豆守信直・平三直續等の父の妻は宮若狭守女、三入の高松城主香川兵庫助・八木の城主美作守光景父なり。

### 六 吉川高橋有田城を論ずる事附武田有田城を攻むる事

去る永正元年の頃、吉川伊豆守國經、藝州有田の城を攻取りて、人數を籠置きける處

吉川高橋有田城を論ずる事附武田有田城を攻むる事



高橋大九郎有田城を攻めんとす

有田城の合戦

に、石州上出羽の城主高橋大九郎（頭書）毛利興元の舅なり。一説に本城越中守兄なりとの説あり。數千騎を帥ゐて有田の城を乗破り、悉く切捨てける間、近郷皆高橋が領となる。有田の城には高橋より、野田彈正忠を籠めて守らしむ。然る處に吉川の家人森脇七郎左衛門尉（たばか）方便つて野田を殺し城を奪ひ取りければ、高橋聞きて、さしもの彈正森脇如きに方便られけるこそ口惜しけれ。其儀に於ては、有田の城三日の中に取返すべしとて、一族他家の與力を語らひけるに、志の者共少々馳せ加はる。高橋は安藝石見の土民の諺に、三歳犢の毛の數程人數持ちたりと云へる程の者なれば、究竟の兵五千餘人を率ゐて家城を立つ。吉川伊豆守國經此由を聞かれて、今有田を切取られては、永き弓箭の疵なるべしとて、自ら一千餘を從へて彼城に籠らる。高橋是れ幸ひの事なりとて、頓て押寄せ攻圍む。吉川國經真先に突いて出で、高橋が先陣高橋土佐守・篠原勘解由左衛門が一千餘の勢を谷底へ迫落す（せりおと）。高橋自ら采配を取つて下知をなし、鷲直に打つて懸かる。城兵も身命を捨て、防ぎ戰ふと雖も、寄手は二千に餘る大勢、味方は纔に五百なれば、終に城中へ引き入る。高橋付入にせんと續いて懸れば、國經又

武田元繁扱を入る

有田城小田の有となる

元繁有田城を圍む

取つて返し、七八度が程防ぎ戰はる。城兵敵を多く討取ると雖も、入替る味方なくして戰ひ勞れぬ。寄手は大勢なりと雖も、城兵能く防ぐ故、柵（しや）の木一重破り得ず。然る處に、武田元繁兩方へ使を以て、今適國中暫靜なるに、兩人私の鬭争公儀に對し不忠なり。唯互に理を枉げ和平せらるべしと言送らる。兩人共に是を聞き、有田の城をさへ我が有に仕らば、和解すべしと返詞せらる。元繁重ねて有田の城は、兩人共に手を付けらるまじ。元來小田刑部少輔信忠が先祖の本領なれば、小田に返し與へらるべしと扱はる。國の高家の命背き難く、吉川國經有田の城を小田に渡し、高橋と和睦せり。其後仔細有りて、武田と吉川不和に成りし時、小田聊元繁を恨むる事有りて、武田を背き吉川に屬せしかば、元繁大に怒りて、小田領地を奪はれて牢浪の身なりつるを、我本領に安堵せしむる處に、未だ幾程ならず其恩を忘れて、我に背く事奇怪の至りなり。其城一時に攻め落して、後來の見懲にせんとて、永正十四年十月、武田元繁、熊谷香川・已斐・飯田・遠藤已下の國人を伴ひて有田の城に押寄せ、稠しく圍んで攻め戰へば、小田叶はず、小舅の熊谷次郎三郎元直を頼み

吉川高橋有田城を論ずる事附武田有田城を攻むる事



て降を乞と雖も、武田曾て許容せず、彌々厳しく圍攻む。

### 七 多治比元就と武田勢合戦の事

元就元經  
乞ふ打兵を

永正十四年  
其頃藝州吉田郡山の城主毛利備中守興元は在京にて、其弟多治比少輔次郎元就多治比の居城に居られけるが、吉川治部少輔元經へ使を以て、今武田が心を推量するに、有田の城落去せば、吉田・丹比兩城を攻めん事必定ならん。有田の城落ちざる先に後詰して、小田を見繼ぎ武田を討つべきと存するなり。同意に於ては加勢頼み入る由申し越さる。

〔頭書〕元就今年二十一歳、元就妻は吉川國經の娘にして、元經の妹たるに依つて加勢を請るゝと云々。又吉川元經室は毛利弘元の娘にして、興元・元就等の妹也。其後又志道太郎三郎廣好を呼んで、武田元繁國の探題として、曾て國中平均の謀を爲さず、却て國人在京の際に乗じて城々を押領し、今有田の城を圍み攻む。此城既に落去せば、定めて興元在京の時を得て、吉田の城へ手を付くるか、さなくば又我を若

元繁吉田  
へ發向

年なりと思ひ悔りて多治比・猿懸へ寄するかなるべし。有田未だ落ちざる以前、後詰して勝負すべしと思ふは如何有るべきと評議せらる。志道廣好が曰く、興元在京の留守有合ふ人數少くては、後詰叶ふまじき由諫止す。然る處に十月廿一日、武田勢熊谷・山中・一條・板垣・小河内・粟屋等六百餘騎にて、吉田・丹比の間へ打出で、在家を放火する由告げ來る。元就聞いて有合ふ勢百五十騎を帥ゐて駆出でらるゝ處に、先陣の熊谷等計らず行逢ふ。元就生年廿一歳、殊に初陣なれども、智勇全備せし大將故、靜に手分をして五十騎の兵をば後陣に備へ、自らは百騎計りを隨へ、射手を進めて控へらる。

〔頭書〕或書曰、元就幼少にして父弘元に後れ、御母杉の大方と一所に吉田相合の土居に住み給ふ。乳母井上河内後見し、成人の後丹比・猿懸に城を築き、領七十

〔五脱カ〕貫在住し給ふと云々。此七十五貫、其後の檢地に五千石に成りしとなり。武田勢小勢と思ひ悔りて、六百餘騎一手に成りて攻めてかゝる。元就鏃を揃へ散に射させらるれば、敵手負死人多く出來て少し疼む所を、元就進んで駆立てらる



れば、武田勢忽ち崩れて引退く。熊谷山中軍士を恥ぢしめ馬を立直さんとすれども、引立ちたる勢なれば、終に返す事を得ず、數十町逃退く。元就長追を制して頓て引返し、本の如く備へらる。二陣の已斐・新里等〔頭書〕已斐・新里が勢一千餘騎とあり。先陣の駈立てられたるを見て、入りら更んと馳せ來る。元就荒手の來るを見て、今度は十死一生の戦と思はれければ、あの山際へ引退き、田中の繩手を前に當て、敵を難所に引受けて戦はば、利有るべしとて諸卒に向ひて、采配を上げらるれば、一同に引退く。敵は是を叶はで引くと心得、先陣・後陣一つに成り、一二間の田中の道を我先にと追駈くる。元就敵を思ふ圖に引受け、無二に切つて懸らるれば、敵は多勢ながら道狭ければ勢こすみ駈引自由ならず。押立てせき合ふ程に、左右の深田へ押落され、討るゝ者數知らず。先陣突立てられ引退けば、後陣の槍・長刀に貫かれて手負ひ、死する者もあり。前には敵鏃を揃へて散々に射れば、武田勢進退安からずして、板垣喜四郎・水落源〔之脱〕承・深見源次郎・大乃美孫太郎・佐々村立蕃を始め、宗徒の者七十餘人討たれて引退く。伴入道西阿〔頭書〕此時稱三伊關民部少輔好清。後入道號三西阿武。田元繁舍弟也。同五郎繁清〔頭書〕伴繁清は元繁の婿なり。父子はさる

兵なるが、二百餘騎にて弓手の山傳ひに敵の後を遮らんと押廻す。元就此勢を駈散さんとせらるゝ處に、敵又千騎計り取つて返して懸りける間、前後の敵に取圍まれて、元就危く見えし處に、殘置かれたる五十騎の兵駈合せ、伴を杳はるか山上に追上ぐる。敵又襲ひ來れば元就千變萬化して防戦はる。然りと雖も多勢に無勢終に叶ひ難く、一方打破つて引退かるれば、敵勝に乘じ慕ひ來るを、此處彼處にて引返し、丹比迄七八度に及び返合せ戦はるれば、馬も三所突かれ裏はかく。されども鎧に箭五筋迄射立てらる。敵猶慕ひ來る處に丹比に殘置き、數百人の兵山半腹迄下し待受けたるを見て、敵引返しける間、元就辛うじて猿懸へ懸入らる。

### 八 元就再び中井手有田合戦の事

元就猿懸に歸城して、則ち志道太郎三郎廣好が許へ使を以て、今日不慮に武田と防戦する處に、味方無勢なるに依つて聊か利を失ひ、歸城せしむるの由言送られければ、志道大に驚き、はだせ馬にて急ぎ丹比へ來り、吉田・桂・福原其外所々へ早馬を立

志道廣好  
元就を援



て此由を告げ、早く丹比へ馳行きて力を合すべき旨言送る。是を聞いて元就の舍弟相合四郎就勝を始め、福原上總介廣俊、桂左衛門佐為澄、坂庄原口羽、赤川渡邊以下馳集まれば、丹比勢七百餘人になる。此時吉川治部少輔元經、家臣宮庄下野守に軍士三百餘人を附けて加勢せらる。〔頭書〕桂為澄、渡邊長門守、志道廣好、是兄弟三人なりと云へり。元就此勢を合せて、翌廿二日の曉天に丹比を立ちて、有田を指して赴かる。武田元繁も元就定めて昨日の無念を晴らさばやと、一兩日が間討出づべしと、兼ねて了簡せられければ、軍散じてより中井手に柵を結び、芝土手を築き向城の如く構へて、熊谷次郎三郎元直〔頭書〕熊谷輔曉直子、伊豆守信直父。に五百餘人を添へて、吉田よりの後詰を押へしむ。元就忍びを遣して様體を見せられしが、路次へ歸つて敵陣の様子委しく告げければ、先づ中井手を切崩し、其後武田が本陣へ懸るべしとて、一千五百餘人を二手に分け、五百餘騎をば、武田若し有田の攻口を寛くろげ馳來る事もあらば、是を防がしめん爲め殘し置かる。〔リカ〕殘て一千騎熊谷が陣へ切つて懸る。先陣桂左衛門佐為澄、其外井上兒玉粟屋赤川以下三百餘人、射手を前に進めて柵際へ無手むずと付けて、一時が間に引破らんとす。

元就武田を攻む

中井手合戦

〔頭書〕元就曰、武田一戦に利を得れば、此方より又寄すべしとは思ひも寄るまじければ、急に押寄せ勝負を決すべしとて、人數八九百にて取懸らるゝと云々。熊谷が叔父水落備後守直綱と云ひて大方の勇者、采配を取つて唯射取れと下知すれば、三入可部の者共一度に揃ひて射出せば、先に進んだる若者數十人射倒さる。桂左衛門佐其外井上源三郎以下の精兵散々に射て、透間に柵を越えんとしけれども、敵やじり鏃を揃へて防ぐ間、互に矢軍に時を移す。元就、志道太郎三郎廣好を呼んで、斯の如くにて時を移さば、武田城攻を止めて味方の後へ廻るか、横合に懸る事も有るべし。さ有らば味方危からん。早く槍を入れ揉破るべしと下知せらる。廣好、然らば我等無二に懸りて柵の木を破るべし。其時旗本を以て熊谷が旗本へ突懸りて押崩さるべしとて、則ち驅出づる。武田元繁は此に作る鯨波くじなみを聞きて、物見を出して見せけるに、敵後詰を押へん爲に、引分けて備へたる五百餘騎の勢を見て歸り、丹比勢思ひの外多勢にて、二手に分けて來るかと思えて、一手は是へ旗頭向ひたりと云ひければ、元繁偕は元就、吉川元經と一手に成りて當陣へ寄せ來り、熊谷が陣



元就中井  
手の柵を  
破る

へは定めて一族共を向くるなるべし。早く手分をせよとてひしめ、後詰の事は思ひ寄らず。偕元就敵陣近く駐寄せ、急に揉み破れと下知して進まるれば、志道矢面に立ちて箭三筋迄射立てらるれども、事ともせず命を際と相戦ふ。元就の馬の鎧にも矢二筋中る。志道廣好斯く柵のみを破らんとせば、急に勝負有るまじとて、二百餘人柵を廻り横合に突懸れば、水落備後守兼ねて彼口に向け置きたる細迫左京亮ほそさき、桐原以下馬より下りて防戦す。元就一番に柵に手を掛けらるれば、諸卒一度に咄さうと押入り、一番に井上源二郎、二番に同源四郎分捕す。三番に粟屋源次郎、長け六尺計りなる男の末田源内と名乗りたるを突伏せて首を捕る。其外思ひくゝに分捕せる者共前後を争ひける間、元就我が眼前の働きなれば、今より後討捨にして、加勢のなき内早く當陣を切崩せとて、旗本三百餘熊谷が本陣へ一文字に突いて懸けらるれば、熊谷が勢一同に崩れ立ちて引退けば、元直は我は敵に後をば見せじとて、切て廻り敵數人討取り、猶も進んで戦はんとする處に、敵の放つ矢元直が額に中りて、馬より眞逆に落つる處を、吉川元經よりの加勢の大將宮庄下野守、馳せ寄りて首

熊谷元直  
討死す

を搔き、當手の大將熊谷元直を宮庄下野守討取りと呼ばはれば、水落備後守直綱、大坪孫四郎、細迫彌七郎、桐原與七郎以下三十餘人敵陣へ切入り、一人も残らず討死すれば、中井手の陣は破れぬ。

### 九 武田元繁最期の事

武田刑部判官元繁は、先陣の勢崩立ちて引來るを見て、是は如何にと尋ねらるれば、中井手の陣破れて熊谷元直討死と告げければ、元繁驚き、さらば我れ元就を討取り、熊谷が孝養に報ふべしとて、有田の城の押へには、伴五郎繁清、品川左京亮信定に七百餘を添へて差向け、我身は四千八百餘を五手に分けて、元就を破らんとす。一手は粟屋兵庫助繁宗、内藤彌四郎繁勝、國侍已斐入道、香川兵庫助、福島加賀守、同三郎左衛門を始め七百餘、左の山に陣を取る。元繁の先陣は毛木民部大輔、信久、筒瀬左衛門大夫、信賢、部坂入道道海、同小次郎繁澄、久村、溝田、中山已下千餘騎なり。二陣は一條彌次郎、板垣掃部助、小河内左京亮、同大膳、同修理亮、青木小三郎以下七百餘、三

有田城對  
陣



有田合戦

番元繁の旗本にて、叔父武田兵部大輔貞信・板垣與次郎・飯富彦三郎・内藤新九郎・粟屋勘解由左衛門已下千五百餘騎相隨ふ。戸谷の香川・秋山・市木等は、三百餘にて後陣に控ふ。丹比勢の一手は、相合四郎就勝〔頭書〕元就の弟なり。元就本家相續の時、跡目の事に依つて逆意生害。大將にて桂左衛門等三百餘、一手は福原上總介・井上河内守・粟屋掃部助已下四百餘なり。元就旗本七百餘騎、偕後陣をば有富井上等百騎計りにて是を固む。志道太郎三郎廣好は二百餘人を従へ、旗を巻き右の山陰を竊に廻り、城の尾頭へ押上り、伴・品川を切崩し、城兵と一つに成り、元繁の本陣へ切懸らんと方術す。扱てだて兩方の先陣相懸りにして、一時計り稠きびしく相戦ひけるが、毛木民部忽ち突崩されて引退くを、一條板垣受留めて、亂合ひて暫く戦鬪す。丹比勢は、今朝寅の刻より入替る勢もなくして戦ふ程に、聊戦勞れ暫く息を繼がんと一引ひくを、元就下知して押返し、一千餘一手に成りて突懸ければ、一條板垣等散々に崩れ、元繁の本陣迄雪なだれ懸かる。元就頓て武田の旗本へ打つて懸からるれば、元繁も眞先に進み防ぎ戦はれて、大將の旗三度に及び行逢ひたり。されども丹比勢元より無勢なれば、終に戦勞れて引退けば、元繁

武田元繁討死

是を追討たんと逸足にて駈立てらる。元就味方を白眼みて、井上の者共が日來手毎につく打つて持ちたる弓は何の用ぞや。切折つて杖につけと噴らるれば、井上河内笑ひて、年老いたれば早く勞れ、暫く息を繼居たり。井上の一族其所々に集りて討死せよと呼んで、眞先に進んで攻め戦ふ。大將元繁は味方を抽で、又内河を越えて自ら敵を追立てらる。元就是を見て、あれ射よと下知せらるれば、丹比勢取つて返し所々より射ける矢、元繁の胸板に中り後へ徹とほれば、又内河の水際へ馬より逆に落ちらるれば、井上左衛門走懸つて首を取り、切先に貫き、大將元繁を井上左衛門討取りたりと呼ばはれば、引色に成りし丹比勢大に氣を得勇み懸かる。板垣與次郎・飯富彦三郎・内藤新九郎・青木某等駈入り、討死す。其外の者散々に逃ぐるを追討にして、取りたる頭數七百八拾餘なり。夜に入りぬれば逃行く者、がけ岸より落ちて死する者又多し。此時香川兵庫助・巳斐入道は、今田邊の山上に篝火を燒きて居けるが、當國の探題の弔軍とむらひつゝする者のなきは口惜き事なり。明朝敵陣へ駈入り討死して、元繁の孝養にすべしとて、翌廿三日巳斐・香川主従三十人、吉田・丹比の兵二三百

元就元繁  
并從の葬  
禮を行ふ



有田の頸塚

元就勸賞  
として刑  
部少輔拜  
任

人に駢合せ、皆そこにて討死す。軍散じて元就、武田竝に熊谷・香川・已妻が死骸を圓光寺と云ふ禪院へ送り、葬禮を行ひ、其外の首をば途中に埋めて塚を築かせらる。有田の頸塚とて今に有り。此に於て小田信忠籠城運を開きたり。儲多治比少輔次郎元就は、國の探題を討ちたる事、公儀如何有るあるべしと思ひながら、此由舎兄備中守興元の方へ注進し、此程武田が動行の趣、具に訴へられければ、則ち興元・吉川國經・高橋大九郎など相議して、公方義種卿へ此旨言上ありける處に、武田國の探題として、國中平均の計略をば成さず、却て國人を惱し亂を起す事其科輕らず。然るに是を誅戮する事忠功少なからずと御感有りて、則ち興元本國に下向して、彌國中無事の功を成す可しと、命せられて御暇を給はる。其上、上使として上野民部大輔を藝州へ下され、少輔次郎元就の功を賞し、刑部少輔に任せらる。元就上使を吉田へ迎へ、其後居城猿懸へ請じ台判を頂戴す。此時吉川伊豆守國經にも暇を給りて、新庄の居城へ歸らる。此元就は、平城天皇第二の皇子阿保親王二十六代の後胤にして、先祖は皆儒門たりしが、大江廣元三代將軍に咫尺せられてより、武臣と

元就の家系

なり、關東に居住せらる。然るに尊氏將軍の時、毛利少輔太郎師親軍功に依りて、藝州吉田の郷を二千貫給はりてより安藝國に在國せらる。師親後に元春と改めらる。夫より廣房・光房・熙元・豐元・弘元と繼來りて、弘元の子備中守興元、二男松壽丸、三男少輔三郎元綱、四男相合四郎就勝、五郎兵部丞元範と云ふ。彼松壽丸後多治比の家を繼ぎて、多治比少輔次郎と改名して、丹比七百貫を領せらる。今の元就是なり。

一〇 大内義興防州下向の事

譜云、永正十五年八月二日大内義興歸周防國云々。

永正十五年、大内左京大夫義興武家の管領を辭して防州へ下向せらる。世上へは在京十餘年、公武の間に相接せし故雜用費多く、財寶漸く減じける故歸國すと披露しけれ共、實は然らず。(領書)大内義興防長・豐・筑・備・藝・右大守、去永正中扶三助義植卿、再補將軍、任管領職、從其數年在京、至今年歸國。尼子伊豫守經久竊に本國出雲へ下りて、執事の下知を用ひず、國中を討隨へ隣國を押領し、剩へ大内支配の國石見・備後・安藝まで過半其手に屬しぬ。又經久は安藝の吉川駿河

尼子經久  
叛す

大内義興防州下向の事



大内義興  
本國に下  
向

守經基の婿にして、今の吉川伊豆守國經は刑部少輔元就の舅なれば、毛利・吉川兩家の一族、皆尼子に一味せしに依つて、他の國人等多く經久に隨ひ、剩へ尼子石州を経て山口へ打入らるなど風聞する故に、大内領國を平治し、尼子の亂を静めん爲め、八月十日或は二日京を立ちて俄に本國に下向せらる。安藝の國侍此時大内に屬するも有り、尼子に従ふ者も有りて、所々鬭争止む時なく、人の心も日々に變じて安穩ならず。

### 一一 吉川慶本并毛利興元卒去の事

吉川慶本  
卒去

同十七年正月八日、吉川駿河守入道慶本卒去せらる。此人去ぬる寛正元年より應仁元年〔送脱〕京都大亂に至りて數度武功を顯し、將軍並に管領、數通の感狀御教書を給ふ。殊に應仁二年八月朔日、相國寺燒跡合戰の時、自身敵を退け、疵を蒙る事數箇所なり。時の人其の勇武を畏れて、鬼吉川と稱し、又其手疵多き故に組吉川とも云へり。此時家人花木善兵衛經基の命に代りて討死す。同年八月十三日、毛利

興元卒去

備中守興元病死せられて、嫡子幸松丸少年六歳にして父の後を嗣がる。

〔頭書〕經基度々の軍功に依つて、播州福井の庄を返付けられ、其後石州邇磨郡内佐磨・藝州山縣郡内寺原郷・同有田並に北方村・同河合・同南方等、義政公より充行はる。右應仁・文明年中の頃の事なり。

### 一一一 青屋城攻附高橋大九郎最期の事

石州の國侍高橋大九郎、備後の三吉修理大夫と青屋の城を争ひて、數年合戦に及ぶ處に、今歲大永三年三月〔元カ〕、〔頭書〕此取合大永元年歟、文段後の段と前後なり、時節不詳。高橋三千餘騎にて青屋の城へ押寄せ、一方を明けて三方より圍み攻む。城兵防ぎ兼ねて皆一方より逃落つれば、寄手或は城へ乗り、或は逃ぐるを追ひて數百人討取る。高橋が旗本の者共も高名を心掛けて城へ乗りける間、高橋父子纔手廻十騎計りにて、床几に腰を掛けて、首共實檢し何心なく居る處へ、落行く城兵數百人此體を見て、眞丸に成り取つて返し、床几より引下し、あへなく首を搔落して切先に貫き、高橋父子が首をば、青屋入道友梅

高橋大九郎父子詩  
死



高橋の郎  
黨元就に  
附從ふ

が手の者討取りたりと呼んで、備後の三吉へ引退く。高橋が郎黨佐々部岡湯谷など途方を失ひ、青屋の城をば捨て、高橋が居城出羽の城に引籠りて悲歎する處に、多治比刑部少輔元就此由を聞き、高橋は幸松丸の外祖父なれば、〔頭書〕高橋大九郎重光娘毛利興元の室也。毛利家の一族として、是を餘所に見過すべきに非ずとて、手勢五百騎計りにて出羽へ駆付け、元就有らん程は心安く思ふべし謂とはるれば、郎黨共少し心を安じ、家人の如く附從へり。其後よりは高橋が一萬六千貫を元就自と領せらる。斯くて三吉修理大夫は、此費に乗じて出羽の城を切取んとて、久代・高野山・木梨已下相加はり、五千餘にて四月十日青屋に陣を取る。元就は吉田・丹比の勢に高橋が手の者相加へて三千餘にて、同月十五日青屋の城に押寄せらる。三吉・高野山等叶はじと思ひけるにや、青屋には勝れたる兵八百餘に、青屋が手勢を加へて千餘人を籠置き、頓て城を引拂ひて己が城へ引籠る。元就青屋の城の四面を圍み、夜晝十四五日攻むると雖も、城中少しも疼ず防戦す。然れ共當城に用水乏しき由、兼ねて聞えし故、さのみ手詰に攻めずと雖も、頓て没落すべしとて寄手己が陣を堅くし、三吉が後詰の用心

元就青屋  
城を攻む

青屋落城

して數日を経る。青屋友梅精しらげこめ米を出して馬の頭三寸迄掛けさするに、餘所目には水の如く見えしとなん。されども終に城中堪へ難くして、青屋降參するに依つて、元就其命を助けて下城させ、自らは丹比へ歸城せらる。

〔頭書〕元就年譜、或書云、明應六年丁巳四月十八日誕生、天永三癸未八月廿八日郡山入城、天永六年丙戌四月、後奈良院御即位之時、任大膳大夫、天永七丁亥上洛、天文二癸巳九月廿五日、敍從五位下、翌廿六日任陸奥守、其後敍從四位、元龜二辛未六月十四日卒、七十五歳、贈參議從三位、又或說云、公方義輝卿賜錦直垂被加御相伴衆、又一說曰、大永六後奈良院御即位時、任大膳大夫、翌大永七年春上洛、敍從五位、賜錦直垂、天文二年癸巳九月廿五日、從五位上、翌廿六日任右馬頭、永祿三庚甲二月十五日任陸奥守、公方義輝卿被加御相伴衆、敍從四位、元龜三、四月贈參議從三位云々。

一三 大内義興藝州發向附元就鏡山城を陥るゝ事

大内義興藝州發向附元就鏡山城を陥るゝ事



義興山口  
へ歸陣

大永二年大内義興數萬騎を帥ゐて、尼子一味の城を攻め取らんとて、藝州へ發向し、城々四五箇所攻め破り、則ち西條の鏡山に城を築きて、藏田備中守・同日向守を籠め置き、我身は小田龍藏寺筑前國へ亂入の由、告來るに依りて、藝州を引拂ひ、防州山口へ歸陣せらる。此時藝州の國侍平賀・天野・阿曾・沼・竹原など味方に屬せしかば、藝州半國は大内の有と成りぬ。毛利吉川・武田・杯は尼子の縁者・親族なる故、尼子に從はる。同年三月尼子伊豫守經久は、藝州味方の城共を大内に攻落されたる事を憤りて、大内方の城を攻取るべしとて、出雲・美作・備後・石見の勢を催さると雖も、一日一日と延引に及びしかば、先づ鏡山の城を攻め落さんとて、同六月雲州富田を出馬せらる。此時吉川治部少輔元經は、（こぞし）今茲大永二年三月六日卒去せられて、一子次郎三郎興經〔頭書〕興經永正十五年誕生、元經死去の時五歳、千法師と號す。其頃は未だ千法師と云ひて、纔五歳に成られければ、軍旅の事に於ては、祖父伊豆守國經、其事を専らとせられし故、元經死後未だ幾程ならずと雖も、國經悲涙を押へ乍ら居城を出でて、尼子勢に相加はらる。是に依つて經久多治比元就吉川國經を頼みて魁將とし、龜井能登守を檢使として差副へらる。

元經卒去

〔頭書〕陰德太平記・關西圖記口には、此時元經御出とあり。

〔同〕或書に、此時節元就は總領幸松丸の後見なる故、各、同列に出陣也と云々。

經久は後陣を待揃へん爲め、暫く北池田に到りて陣を居ゑらる。斯くて先陣城の麓へ押寄せ放火すれば、城兵も討出で終日戦ひ引入らんとする處に、道狭く多勢集ひ、進退不自由にして城兵多く討死したり。

〔頭書〕一書に六月十三日、先陣城の麓を放火すると有り。又一説には三月十三日と云へり。同落城も三月二十八日なりと不知是非。

其後經久鏡山の向下見峠に陣を寄せらるれば、國經元就は相共に城下滿願寺へ陣を移して攻め上らる。〔頭書〕異書に此時龜井は口見村谷尾に陣取、元就は龍王山に陣を据ゑて、數日城を攻めらるとあり。藏田もさる兵なれば、堅固に城を抱へたり。元就藏田日向守が氣質、日來邪慾なる事を察し知られければ、密に渠が許へ總領備中守を討つて出さば、彼領地を直に日向守に宛行ふべし。〔頭書〕或書に藏田本領の外、に三千貫を加へて可き宛行、由約束ありしと云々。無くば落城の上、一族悉く誅戮すべしと言遣られければ、日向守領旨して則ち元就を二の丸へ引入るれば、備中守力なく本丸へ取籠り、搔楯

大内義興藝州發向附元就鏡山城を陥るゝ事



鏡山城合戦

かき一日一夜防戦す。總勢も繼いで攻上ると雖も、要害切所にして落城容易ならじと見ゆる處に、智勇兼備の元就、軍士を進め懸引自在に攻詰めらるれば、備中守が頼切つたる從兵三十九人迄討死しければ、藏田防ぐ可き力盡きて、元就に妻子の命を請ひて切腹したり。元就備中守が妻並に入歳になる菊法師〔頭書〕一書に金法師とあるなり。を助けて、木原備中守に預置れしが、後に藏田市介と云ひて元就に仕へ、勇者の名を得しは此菊法師なり。儲日向守は猶子備中守を殺し、事、不義無道なれば、尼子終に渠を誅せられぬ。扱又今度當城落去の功は、元就の奇謀に有りとして、經久是を感賞して、藏田が遺領悉く元就に附與せられたり。斯くて鏡山の城去る廿八日落去せしかば、尼子經久七月五日、雲州へ軍を班さるれば、元就國經も俱に居城へ歸陣せられたり。

經久兵を雲州に返す

〔頭書〕國經享祿四年辛卯年六月二日卒云々。或說此時死齡八十九歳と云ふ。此說に因れば大永二年は八十歳なるか、或說の八十九歳卒去と云ふ事眞偽不詳。猶又此後大永四年、佐東金山御出陣は八十二歳に當るなり。

### 一四 毛利元就本家相續の事附相合就勝の事

毛利幸松丸卒去

大永三年六月末、毛利幸松丸俄に發病して療藥驗なく、惱亂驚働せられけるが、終に七月十六日、〔頭書〕一説に七月廿五日卒云々。少年九歳にして早世せらる。

〔頭書〕或書云、毛利幸松丸七歳の時、藝州最上鏡山の城主倉田備中守近則が首實檢に入る。七歳の幼稚一つ首實檢の事如何と怪む處に、如案彼首腫を動し、三度齒を咬鳴らす。於此幸松丸戰慄して卒去せりと云々。

毛利家家督を諱す

父興元死後程なく、不幸更打續きたれば、毛利家一族を始め、家中の諸士男女上下是を愁傷す。家臣福原桂志道、口羽已下評議しけるは、此上は當家跡目の沙汰延引に於ては、今戰國の時に當つて、猶又如何なる變異か出來らん。然りと雖も別に後嗣に立つべき子息もなし。然ればとて江家累代の血脈を斷ちて、尤他人を求むべきに非ざれば、叔父連枝の中相續の外有るべからず。然れば長兄多治比刑部少輔殿は、今百萬の將としても其器量不足ならず。當時中國に於て若手の諸將の中、此人如



きの弓取有るまじ。三男北殿は脚の疾に依りて、近年歩行自由ならず。四郎相合殿は、尤軍將の器備はらざるに非ずと雖も、其卓量元就に比すべからず。其上舎兄多治比殿を差置きながら、庶弟を主君と仰がんも順義ならざれば、彼此以て元就家督の外有るべからずと評議すと雖も、衆議區々兩異に分れて、何れ共決定なく一日一日と延引に及ぶ處に、大内義興此折を得て、遺領併呑の内意有る由普く風聞す。且又尼子經久も子息の中を、後嗣に居る度き望み有る由、家中専ら沙汰しければ、さもあらば跡目の議定遲滞未決の間、兩家大身の威に誇りて、當家に望みを懸けらるゝに於ては、向後如何なる危害出來らんも計り難し。所詮此上は刑部少輔元就、智仁勇の徳有りて大將の器に當り、其上今連枝の中の長子なれば、旁、以て此人の外求むるに餘儀なしと、漸く會談一決して、福原・桂・志道・口羽・兒玉・赤川・渡邊・井上等各、丹比・猿懸へ參向して、元就本家相續し給ひ、近日吉田入城有るに於ては、各、御馳走申すべき旨懇に申述べ。元就聞かれて、興元父子打續き不幸の上は、勿論跡目の沙汰なくて叶はざる事乍ら、元就嗣立の儀に各、決定あるべしとは、更に思ひも寄らざ

衆議元就  
に一決す

元就意見  
に依り京  
都に申請  
す

りき。さりながら吾等兄弟三四輩の中、長幼の序に従へば我身兄に生れたれば、さのみ固く辭退すべきに非ず。此上は當家血脈連續の爲なれば、如何様にも其意見に任すべし。然るに此頃尼子經久、子供の中を遺式に立て度きと、頼りに望み有るの由風説あり。若々此事正義ならば、各、私の裁斷計りにては、經久押し計らはるゝ事も有るべし。其期に至つて違背難澁せしむるに於ては、渠多勢の威に募りて如何様の事をか思寄せられん。然らば却て當家災の基本なるべければ、所詮此旨豫め京都に訴へて、天下の台命を申し給りなば、他人の競望を禦ぐべし。其上にて此事披露有つて宜しかるべきかと謂はれければ、諸臣皆此議尤と感心して、又々衆議熟談して、粟屋縫殿允を物詣と號し、密に京都に差寄せ、將軍家に訴訟しければ、公方義晴公則ち元就毛利家相續して、本領安堵すべき旨台判を給りたり。粟屋悦んで急ぎ取下りければ、福原以下の輩會議して、斯かる名主を軍將として、吾々指揮に従はん事、當家彌、興立繁榮の大本なりとて、喜び合ふ事限りなし。斯くて福原・桂・志道・口羽以下の諸臣等、元就入城を迎へん爲め、各、猿懸に到りければ、幸松丸卒



元就本家を相續す

後中陰の日數未滿の中たりと雖も、吉田無主城にては如何なり。此上は一日も早く入城有りて然る可しとて、有るべき式の禮儀等もそこ／＼にして、取敢ず此輩を相具して、同年八月廿八日、元就〔頭書〕今茲元就廿七歳吉田に移り、郡山入城せられたり。爰に元就の舍弟相合上總介就勝は、幸松丸存生の中より、我れ當家の庶子に生れて、吉田の老臣其外家中の諸士徒隸に至る迄、諸事に就け誨り輕しめらるゝ事無念なりと、常々僻み憤り、我等父兄に對しては、當家の末庶たりと雖も、今の總領幸松丸には正しく伯叔の系續なるに、幼稚の甥に附傭して、斯く當國の傍邊にて空しく生涯を經んも口惜し、如何にもして幸松丸幼弱なる中、家中非常の大變も出來よかし。さあらば、吾身吉田の城を掠領すべき良謀の端も出來ぬべしと、胸中に深く嘖み居られけれども、時節到らざれば力なく、此事色にも出されざりしが、此度不慮に幸松丸早世せられければ、あはれ此時節我等若し後嗣に立ちなば、多日の素懷をも遂ぐべき者をと、様々思慮を凝らされるが、渡邊長門守は桂左衛門佐爲澄が弟にして、志道上野介廣好が爲には兄なれば、彼の者を頼み我に最負させしめば、志道・桂も同意

家督問題  
延引の理  
由

する事有りぬべし。然らば此般跡目の衆議に於て、我等後嗣に立つべきに、必定一決すべしと工面して、夫より渡邊父子を連々他事なく懇切に持成されければ、長門守も其心を汲み察して、如何にもして今般此人を家督に備へなば、向後己れ諸臣の上立ちて、當家の權柄に與りなんと思ひければ、此度跡目評議の席に於て、元就後嗣に立たれては、兎あるべし角ありなんなど、様々に其不利を擧げ、佞言を構へて言ひ妨げける故、會談數日一決せざりし事、此故なりと、後にぞ聞えける。然れども元就家督の事道理の當然にして、衆議多分なるが故に、終に其沙汰元就に落著しければ、上總介胸中殊の外に本意なく思はれながら、心の鬼を押包みて、曾て色にも出されず。何となく持成されけれども、元就聖智聰明の大將なる故、就勝の内存如何様時節を窺ひ、當家を押領せんとの逆意ある事、掌を指して察し識られければ、頓て敢なく此人を生害せられたり。其頃坂の某も就勝に味方して、長門守に荷擔せしかば、渠をも同時に自殺させしめらる。渡邊長門守をば暫く其儘にて闇かれけるが、今般元就毛利家相續して、吉田入城有りし事を尼子經久へ告げらるべき爲め、雲州

元就佞臣  
を生害せしむ



富田へ使節として差遣すべきと方便呼出され、彼の者日頃上邊は諂諛側嬪を構へて立振舞ひけれども、内々には上總介就勝に阿順して、元就の事に就けては潛に悪言を嘔吐き、萬事に觸れて、端々無禮なる事ども重疊せしかば、元就遺恨骨髓に徹し、盛年の血氣に深く之を憤り思はれければ、勇壯の多力に任せ、自身取つて押し伏せられ、髻と頤とを捕へ、縁の端迄提出し、下なる谷へ抛落されければ、則ち微塵に成つて失せぬ。父渡邊入道をば、渠等が領地小原に於て討果されたり。長門守が嫡子十四歳に成りけるが、弓に箭を取添へ携へ持ちて、中間一人相具し、山傳ひして備後國山の内へ立退きけるが、頓て又赦免を得て歸參し、盛長の後渡邊太郎左衛門と云ひて、武功の侍大將是れなり。

〔頭書〕或覺書、本書の説多同少異あり。□□□□其文左の如し。六月末より幸松丸俄に御煩、七月終に早世し給ふ。興元死後程なく又此の如くなれば、家中諸士男女、毛利家斷絶の時至れるやと、上下皆悲歎す。跡目の事別に男子無ければ、刑部少輔殿・上總介殿兩人ならでは、別に家督に備ふべき子息もなし。□□北殿おはすれ

ども、近年脚の疾有りて行歩叶すなれば、相續成り難しと、福原桂・志道・兒玉・渡邊・赤川・井上等評談すると雖も、何れとも決定せず。一日々々と延引する處に、大内義興一族の中を毛利家へ仕へ居度との内意の由風聞、又尼子經久も子息の中を毛利家へ契約有り度きとの由沙汰す。之に依つて家老相談しけるは、後嗣の事延引に及びて、大内・尼子より申懸けらるゝに於ては、事六箇敷成行くべし。唯早速元就相繼然るべしと内談決定す。密□□の城□□で、元就吉田入城有るべく各、御馳走申すべき旨演説す。元就則ち領掌せらる。然れ共各、内談計りにては、經久押して計らはる事も□□、其上にて異議に及ばず、經久大軍にて押寄す事に及ぶべき間、此事京都へ訴へ、公方の御内書を申請然るべしと密談せらるれば、各、同意して、栗屋縫殿允を物詣と號して京都へ上せければ、公方則ち元就、毛利家相續の御判を出さる。之に依りて福原・桂・志道・兒玉・口羽・赤川・井上など御供にて、元就郡山入城せらる。□□渡邊長門守などは相合上總介殿に一味して居たるが、皆々一同に登城して、御入城目出度き旨御禮申すなり。坂は相合殿生害



の後切腹させらる。渡邊は雲州へ使者に遣さるべしとして召出され、元就自身取つて押伏せられ、元結と頤とを捕へられ、中に提縁より下の谷へ抛げられければ、微塵に成りて死す。父渡邊入道をば小原に於て打果さる。長門守が子十四歳なるが、弓に矢を取添へ、中間を召し連れて山へかゝり、山内へ立退きたりと云々。元就本家相續の事、各、相談の時分、元就夢想を見らる。毛利家鷲の羽を續腰桂當所八幡に於て百韻興行せらる。長門守が子後に渡邊太郎左衛門と云ひて、武功の士なり。

一五 大内藝州佐東金山櫻尾の兩城を圍む事

大永四年五月廿日、大内左京大夫義興、子息周防介義隆、防長豊筑の勢三萬餘人を將ゐて山口を立ち、防州岩國永興寺に著陣して、爰にて勢を二手に分つ。一手は義隆を大將として陶兵庫助入道道麒相加はり二萬餘騎、藝州佐東の金山武田光和かみが居城へ向はる。一方は義興自ら大將にて一萬餘、草津・二保島の兩城を攻落して、其よ

義興櫻尾の城を圍む

禰の坂迫合

り嚴島の神主佐伯式部大輔興藤が籠りたる廿日市・櫻尾の城を圍まる。之に依つて毛利元就飛脚を以て、大内藝州出張の由尼子經久へ告遣らる。尼子は正月より伯州へ發向して、山名と數度戦ひ城多く切取られ、山名因州へ退くと雖も、殘黨國中に有りて合戦未だ止ざる故、藝州發向しばら少く延引せらる。然れども金山・櫻尾兩城共に堅固に守り、寄手も仕寄を付けてさのみ急にも攻めざれば、捗々しき合戦もなし。然る處に、武田の幕下熊谷兵庫助・山中佐渡守・香川・飯田・山縣等、金山を見繼ぐべしと僉議すと雖も、敵大軍故後詰も成難ければ、先づ八百餘騎にて禰の坂上迄打出で、敵の様を窺ふ處に、大内勢是を追拂はんとて、杉伯耆守・同勘解由・問田掃部・同紀伊守等二千餘人、六月廿四日の夜半に金山陣所を打立ち、谷道一里計り忍寄りて夜の明くるを待ち居る處に、熊谷以下此由を聞き、味方は小勢なれば、尋常の働にては利有るまじと謀を議して、熊谷は未だ若年なれば、香川美作守元景相加はりて四百餘騎、坂上七八町下りて一段高き切岸に陣を取る。其外切所を固めて伏兵を置き、嶺々には所の一揆原に檢便を添へ、相圖を待てと約束して控ふる處に、敵夜明方に押上



大内勢敗北

る。一陣の山中佐渡守・飯田・遠藤・福島二百餘にて十町計り出向ひ、矢合せして引退く。敵勝に乗り數町が間追登る。熊谷・香川能程に引受けて、眞逆に落し駈くれば、敵堪へずして二三町程引退く。熊谷・香川本の陣へ引上ぐれば、敵又返し登る處を、合圖の貝を吹立つるに、伏兵一度に起つて前後の峯谷より討つて懸かれば、大内勢忽ち崩れて逃げ下るを百二十餘討取り、殘兵殘らず大内の陣迄逃退く。斯くて武田光和は、此城中に引籠りて討出でざるも言甲斐なく思はれければ、三千餘の兵を五手に分け、七月三日城の尾頭へ打出で、先陣をば城の麓へ下し、楯を衝きて控へさせらる。大内勢杉・右田・問田三千餘にて打つて懸かる。問田が勢森坂已下五百計り眞先に突懸かれば、杉仁保右衛門太夫が勢も二千計り續きたり。武田勢少も臆せず、相懸りに懸りて手痛く戦ふ。然りと雖も元來小勢なれば、終に戰勞れて少し退く處に、内藤彌四郎一人踏留まるを見て、青木横瀬・篠村も共に引返す。内藤槍にて相働き、敵四人突伏せけるが、我も手を負ひぬれば引兼ねて既に危き處に、武田五百計りにて横槍を入れらるれば、杉・右田等突立てられて引退く。陶安房守隆滿等入替り

武田光和の弓勢

て進む所に、武田尋常の者六七人にも張兼ねたる大弓にて、押取りし射られけるに、一矢に馬人三重計り射貫かるを見て、敵恐れて颯と引く。陶安房守押返し入違ひ戦へば、武田も薄手を負はれながら、五度の駈合に陶が若者七人迄突伏せらる。漸く日暮に及びぬれば、雙方相引に打入る。此時大内方には豊田・湯田はじを元め三百餘人討たれ、城兵百七十餘人討死す。

### 一六 尼子勢金山後詰

尼子伊豫守經久、出雲・伯耆・備後・備中の勢を催して、金山・櫻尾の後詰として、七月初旬、雲州富田を發して同國赤穴迄出張し、龜井能登守・牛尾遠江守・馬田駿河守・淺田主殿助・廣田助兵衛を大將とし、五千餘人先立つて金山へ差向けらる。毛利元就・吉川國經・宍戸・平賀熊谷・三吉・小早川以下、備後・安藝の勢を率ゐて四千餘、尼子勢に加はりて、七月八日金山へ出張せらる。龜井能登守・牛尾遠江守先陣として五千餘騎、平賀太郎左衛門・三吉入道は二千餘騎にて二陣に控ふ。其次は毛利元就・吉川國經・

元就等金山へ發向



小早川掃部頭興平等七百餘騎備へらる。斯くて七月十日、先陣大内陣に押寄せ、足輕を出して射させければ、陶安房守・問田掃部助・青景越後守以下二千餘騎出し稠しく追合ふ處に、大内勢杉豊後守横合に懸りて突崩す。牛尾入替らんとする處を、杉伯耆守・同民部・仁保・豊田已下五千餘にて突立つれば、二陣の平賀引受けて散々に戦ひ、敵の一陣を突崩す處に、陶入道道麒三千餘騎にて駈合すれば、平賀叶はず押立てらる。此時尼子勢淺山七郎四郎・廣田彌七兵衛・十六島孫六・岸新兵衛以下七十餘人討死す。元就の陣へは弘中參河守・狩野入道・冷泉・秋月等、五千餘騎にて懸り來り勝負を争ひけるを、元就大内勢を一町計り突崩して、左の山に備を立てらるれば、陶・杉已下も進む事を得ざる故、牛尾・龜井・平賀等勢を打入れぬ。

### 一七 元就夜討の事

毛利元就備・藝の國侍に向ひて議せられけるは、先日の戦に味方聊利を失ふ事無念の至なり。さ有れば各、我等が勢を以て、敵陣に一夜討して、味方の憤忿を晴らし、

元就夜討  
の手配

我々が眉目にもせんと思ふは、如何有るべしと云はるれば、各一議にも及ばず同意せらる。扱雲州勢へは各、相議し夜驅を致すなり。夜中敵味方見分難き間、雲州勢に於ては一人も出合るまじ。若し討損する時に於ては、加勢有るべき由言送りて、備・藝の國侍を五手に分たる。先づ山内・宮・山名・三吉入道は陶安房守・同中務が陣、宍戸安藝守は杉伯耆守が陣、吉川國經は千壽・秋月が陣、小早川興平・天野・竹原は内藤下野守が陣、毛利元就は熊谷兵庫助・信直・香川美作守・元景・三須筑前守・房清・遠藤・秋山以下一手として、陶入道が諸陣の後詰せんを防がん爲め、三箇處に伏せ置きて敵の模様を窺はる。扱相印・相詞を定め、八月五日風雨の夜を幸にして忍び入り、合圖の期に至りて、諸陣一同に鬨を作りて切入る。敵思ひも寄らずして俄に騒動して、多くは同士討に切合ふ。此時陶入道道麒は少しも騒ぐ體もなく、夜討は小勢なり日頃の相詞にて敵味方を知分け、防ぎ戦ふべしと諸陣に下知を傳へければ、士卒少し静りて踏み留まりて防戦す。杉・内藤・青景・右田・千壽・秋月が陣には討たる者數を知らず。陶入道、後陣の弘中參河守・大和伊豆に守夜討の後を遮るべき由下知して、



元就金山  
へ夜討す

陶が手の者四五百計り兩人が勢に加へて敵の後へ廻す。元就足輕共に松の枝を切らせ、田中繩手に抛捨てさせて、我身は五百計りにて後に備へらるれば、敵是を小勢と見て、切崩さんとして進み懸かる處に、彼松の朶たに行懸りて進み兼ねたる處を、井上の一族共鏃を揃へて多く射伏せたり。此時尾崎二箇所の伏兵一度に起りて、敵の後陣深野・野上が勢を四五町計り追崩す。先陣の弘中等も射立てられて崩れ引きけるを追駆けて、深野・柿並以下の兵を七八十騎討取りぬ。斯くて元就の本陣にて合圖の貝を吹かせらるれば、總勢一處に集り一同に引取りたり。此夜大内勢を討取る首數五百廿餘、其外手負數多し。味方には杉原九郎左衛門・宮四郎左衛門・三田以下三十二人討死す。陶入道此夜討に機後れて、今度義隆初陣に依つて、我是を扶たけて當陣に向ひ、此上に又仕損する事も有りては、諸人に對し面目なかるべし。先づ此をば引きて廿日市に到り、義興と一手に成り、重ねて本意を達すべしとて、同月十六日金山を引拂ひ、狼おはかみ之森の城を乗崩し、男女二百七八十が首を切捨て、夫より廿日市義興の陣迄打入る。

北 陶道麒麟  
敗

### 一八 大内櫻尾より歸陣の事

陶道麒麟  
伯式部を  
破る

大内義興は、金山に於て味方敗軍の事胸中快からず、如何にもして櫻尾を攻め落し、一度勢を引取り、重ねて發向して尼子を退治すべしとて、八月廿一日手強く城を攻められけれども、城中にも究竟の兵二千餘人籠りて、防ぎけるに依つてた輒く落ち難し。陶入道、義興の氣色を見兼ねて、今日は某新手なれば一合戦せんと望みて、手勢三千餘騎を従へ、義隆をば後陣に備へさせ、我身先陣に進み、城主佐伯式部大輔が城下の居館ゐたちを一時に打破り、三十八人が首取りて焼立てければ、義興少し氣色直りて、此勢に櫻尾を乗取らんとせらるゝ處に、尼子經久五萬餘騎にて佐東へ著陣の由告げ來るに依つて、當城をば差置き、尼子勢と戦ふべき由評議せらるゝ處に、又小田・龍藏寺等筑前へ出張するの通知脱〔カ〕到來あれば、義興先づ我が領國を治めて後、重ねて發向すべきとて、同廿五日廿日市を引拂ひて防州へ歸らる。之に依つて尼子經久も雲州へ軍を班かさるれば、毛利元就吉川國經以下の國侍、面々の居城へ歸

義興防州  
へ歸陣

經久雲州  
へ歸陣



る。

一九 大内龍藏寺和平附石州濱田合戦の事

大永五年三月中旬、大内義興三萬餘騎を帥ゐて、小田・龍藏寺退治の爲め筑前へ發向せらる。龍藏寺は筑後境に在陣して、四月より十月に至つて六度の合戦有りしが、終に小田・龍藏寺・星野・菊池等と和を乞ひて、肥後・肥前へ歸れば、大内は諸方の人質を取固めて、同六年二月下旬山口へ歸陣せらる。同三月石州へ出張して、尼子方の城六箇所迄攻め落して、同國三隅入道が居城へ押寄せ、七月より十二月迄攻め圍まる。石州尼子方の者共、此由雲州富田へ注進し、三隅落城せば國中皆大内に屬すべき由言送れば、尼子經久驚きて、三隅後詰として、頓て大軍を率ゐて向はるゝ處に、其中はや三隅防ぎ兼ねて降參せしかば、大内國中を隨へて、同國濱田へ陣を移して、尼子の出張を待掛けらる。尼子此由を聞きて急ぎ濱田へ打出で、敵陣五十餘町を隔て對陣し、暫しばしは合戦もなし。或る時尼子勢牛尾遠江守・河添美作守・馬田與三左衛

義興石州へ發向

大内尼子對陣

濱田合戦

門・湯信濃守三千餘騎にて郷中を放火し、足輕を先に立て、敵を招く。若林伯耆守は一千五百餘騎にて、牛尾・河添等に七八町隔て二陣に備ふ。大内方には陶入道道・麒麟・青景・越後守・仁保右衛門大夫、五千餘騎打出し矢軍しけるが、後には互に亂れ合ひて戦ふ處に、陶安房守五百餘騎にて横槍を入るれば、牛尾等突崩されて引退く。此時若林が手の者共伯耆守に向つて、入替つて味方を救はれ候へと勸むれ共、若林思ふ旨ありとて備を動かさず。尼子勢は三百計り討たれて散々に成つて逃げ退く。此由經久へ告來れ共、後陣に若林有れば、無下に僻事はあらじとて少しも騒がれず。牛尾・馬田も返し戦はんとすれども、大軍引立ちたる故、力なく七八町計り引きけるを、青景・仁保等氣に乗つて若林が陣迄追駈けたり。伯耆守が先備さきの者共散々に射けれども、勇懸かる勢なれば些ちとも疼まず、若林が旗本尾崎迄攻寄せたり。若林待設けて矢先を揃へ射させけるに、敵手負・死人多くして少し猶豫したる處を、自ら槍を提げて一千騎一文字に突懸ければ、一陣の青景叶はずして引き退く。後陣の陶勢受留めて半時計り戦ふに、若林少し引き色に成る時、彼が先陣五百計り初度の戦に突

大内龍藏寺和平附石州濱田合戦の事

四



若林伯耆守の軍忠

立てられ、右の方へ引きけるが又横合に懸りければ、江良宮川忽ち打負けて引きけるを、若林二三町追駈けて頓て引返し、本の如く備へたり。陶入道は後陣に控へて、若林を待懸け、れども、彼早く引取る故其日の戦は止みぬ。牛尾藤三郎敵三人討取り、四人目の敵に逢ひて討死す。其外尼子勢三百八十餘討たる。若林伯耆守は首三十餘討取りて經久の實檢に入れければ、伊豫守喜びて、今日味方大崩たるべき處に、伯耆守一分の覺悟を以て敗軍を喰留むる條、今に始めぬ若林が軍功拔群なりと感せらる。此後は互に對陣のみして五十餘日を経ける處に、伯州へ山名但馬守出張の到來あるに依つて、經久大内へ使を立て、濱田を引拂ひ伯州へ發向せらる。之に依つて石州半國は大内に屬しぬ。頓て此勢に乗じて、義興雲州へ打入らんとせられける處に、今茲大永七年將軍家より、大内・尼子和睦すべき由公命有りて、夫より後はさしたる軍なくして、近國暫く無異になる。其後大内義興風氣を煩ひ、山口に於て醫療を加へられしが、終に享祿元年十二月廿日死去せられたり。

義興卒去

〔頭書〕享祿四年六月十八日、吉川伊豆守國經卒。興經十四歳。

## 二〇 元就上洛并武田熊谷不和の事

元就上洛す

頃日國中穩なるに依つて、大永七年の春、毛利元就上洛せられて、大樹義晴公に謁見す。元就は大江廣元の苗裔として江家の嫡々なれば、自餘の國侍には准すべからずとて、高家に劣らず賞翫し給ふ。其上將軍家の吹擧を以て、元就を從五位に敍せらる。加之武功雲上に聞えけるに依つて、錦の直垂を下し給ふ。〔頭書〕元就三十一歳。去即位之時、元就任大膳大夫、今年上洛之時、敍從五位下、賜錦直垂。斯くて元就三年在洛して、享祿二年の秋藝州へ下向せらる。爰に熊谷兵庫助信直は、去ぬる頃より武田光和と不思議の意趣出來して、元就に従ひ武田と矛盾に及びしかば、天文二年八月武田光和〔頭書〕元繁の子なるが、世に感え無類の達人の由、光和室は吉川元經の娘興經の姉なり。陰徳太平記に、興經光和共に力強勇猛なるに依つて、參會の時、若し爭論の事も有る可きかと遠慮して、家臣一生兩公の參會を不<sub>レ</sub>免と云へり。光和天文三年逝去、興經十七歳なり。然れば興經は若年の時の事なるべし。一千餘騎を催して三入の高松へ押寄せらる。熊谷信直舍弟平藏直續を横川表へ差出して待懸けさす。武田方に伴五郎繁清を大將として、香川左衛門尉光景・已斐入道等八百餘騎馳向ひて戦ひけるが、武田の軍奉行粟屋兵庫馬上より射

熊谷武田と矛盾

元就上洛并武田熊谷不和の事



武田光和  
卒去

落され、竝に與力小河内の一族多く討死すれば、武田勢氣を落して引退く。武田光和は搦手より高松へ向ひて攻上り、漸く城へ乗入らんとせらるゝ處に、平藏直續大手の軍に打勝ちて、後へ廻し討つて懸れば、武田終に敗軍し家城に打入らる。重ねて勢を催し熊谷を攻めんと議せられけるが、毛利平賀後詰すべき聞えあるに依つて、武田重ねての軍も成難くて打過ぎらるゝ折節、重病に犯され終に翌年三月逝去せらる。其後家督の事に依つて家臣口論し、終には同士軍をし散々に立ち去りければ、武田家終に斷絶して、藝州の旗下三十六人の國侍、是より多く元就へ屬しぬ。其後刑部判官元繁の婿伴五郎繁清が實子、將軍義晴公へ訴へ武田の名字を繼がれ、武田刑部少輔信實と名乗り、雲州へ下り尼子を頼み〔脱ア〕らる。  
〔頭書〕頃年享祿三年、興經公幼稚の時、元就領分の内仔細有りて配分し給ふ。其判物に云ふ。

北方百五十貫の地相渡申候。可有御知行候。彌無等閑可申談之事、可爲祝著候。仍狀如件。

享祿三年十月廿八日

元就判

吉川千法殿千法師、興經公童名、永正十五戌寅誕生、享祿三年八十三歳也、今年元春公誕生。

### 二二 尼子經久三男鹽冶興久と不和の事

尼子經久  
父子確執  
の原因

去年天文元年、雲州には尼子伊豫守經久、三男鹽冶宮内大輔興久と不慮の儀に依つて、父子確執に及べり。其仔細は興久龜井能登守を以て經久へ訴訟せられて、同國原手郡七百貫を望まるゝ處に、經久原手郡は富田近邊なれば遣す事成り難し。然れば別所に於て千貫の所遣るべき旨返事せらる。興久原手郡は思ふ仔細有りて望む所なり。餘の所となれば何萬貫とても望み無し。畢竟今度の所望叶はざる事は、偏に龜井能登守が讒詞して妨げたと覺えたり。此上は龜井を討つて我が本望を達せんと忿らるゝ。其頃經久より杵築きづきに於て、法華經一萬部を讀誦させられ、能登守彼奉行として杵築に在りける中、興久三千餘騎を催し、杵築へ押寄せらるゝ由周く沙汰しければ、經久聞かれて、興久愁訴あらば我にこそ訟ふべきに、龜井を討た

尼子經久三男鹽冶興久と不和の事



興久經久  
晴久を討  
たる謀

龜井新次  
興久を  
諫む

んとするこそ心得ね。是は偏に事を能登守に名付け、我に弓を引くべきとの企な  
るべしとて、牛尾遠江守・同參河守・卯山飛驒守に二千餘人を差添へ杵築へ遣し、龜  
井を伴ひ路次の用心をさせて、富田へ引取らせらる。興久是を聞き、縦たゞひ我非分あ  
りとも、親として子を思替へ、郎黨を扶くる事や有ると大に憤り、頓めどて乳人の米原  
平内・龜井新次郎を呼んで、吾今父子不快の身と成る事、是れ偏に龜井が所行なり。  
此上は彼彌よ如何なる巧言をか構へ、吾を罪にも陥し入れん。所詮今よりは一筋に  
思切り富田へ押寄せ、晴久を討ち經久を押籠め、悪しき龜井をのこ切りにし、此無念  
を晴さばやと思ふは如何にと云はる。兩人暫くは目と目を見合せ閉口して居たる  
が、様々和漢の舊事を引き、正ただしき父に向ひ弓を引き、甥なまこに對して劔を振り給はん  
事、冥王の照覽恐しく、不義・不孝の名は末代に朽ちまじ。假令一旦の憤に依つて經  
久仰付けらる旨ありとも、などか思召し直されざらん。能登守は此新次郎が兄た  
るに依つて、就中申すにては全くなし。能登守に於ては、我等渠かれが宿所に到り兄弟  
刺違へ候はん間、是にて憤を散せられ、父子御不快の事をば是非に止まらるべき由

諫止す。興久是を聞き、我曾て經久を討つべしと思ふに非ず、唯富田の城を乗取り、  
晴久を討ちて我が當家を相續し、龜井が首を刎ねて後は、父子和解して孝順を盡す  
べし。然れば父に楯を突く事不孝なりとて、頭くびを延べて軍門に下るに於ては、龜井  
則ち我を討つべし。父を敬ふとて家人の爲に頭くびを刎ねらる者やある。我經久の  
先陣に有つて、伯州に於て山名と合戦四箇度、其外所々の城を落し、敵を靡たひけし事  
いくらと云ふ事を知らず。夫故に今近國經久に靡たひき従ふ。我身命を惜まず、思ひ  
切つて富田の城へ攻め入りなば、勢の多少にも寄るまじ。唯一時が間に揉破るべ  
し。若し運盡きて合戦勝利を失ふに於ては、富田の城を枕として討死し、佛とも神  
共成りて後、龜井に讎を報ゆべきなり。さり乍ら面々は經久譜代重恩にして、殊に  
新次郎は能登とは兄弟なれば、旁かたわら我くみに與する事有るまじ。兩人急ぎ經久へ参りて  
此旨を告知らするに於ては、其時檢使を申請ひ涼しく切腹すべきなり。早々富田  
へ歸るべしと、聲を忿らし疊を打ちて言はるれば、兩人の者俯きたる頭を少し上げ  
て、御詞を返すは恐れ多けれ共、仰せの如く近國に武威を振ひ給ふ事は、偏く存せ



すと申す者なし。此故に僣慢熾盛しせいに及び、天魔の御胸裏に入替り、斯る惡逆を思召し立たるゝと覺えたり。興久尼子家相續の事、興久尤も騎將の器には當らせらるゝと雖も、數箇國を治め數萬の大將の器には當らず、其を如何にと申すに、強剛勇猛のみにて五常の道は曾て御存なき謂は、父公に向ひ弓を引き楯を突かるゝ事仁にて候や。鳥類だも梟は不孝の鳥とて、諸鳥是を憎むの由申傳ふ。兎にも角にも此事思ひ留まらるべき旨諫言すと雖も、忠言還つて耳に逆ひ、大に腹立せられ、吾一度思ひ立ちて生きて有らん其程は、杵築大明神も智見あれ、此弓矢思ひ留まるまじ。又面々の異見の趣を背く所も如何なれば、所詮我爰にて自害せば、父に向ひ弓を引くに非ず、各々の異見を用ひざるにも非ずとて、刀の柄に手を掛けらるれば、兩人の者急ぎ袂に縋り、此上は力なし。兎も角も仰の旨に隨ひて、共に忠戦を勵むべし。但し二人の者共は若年の時より經久御厚恩を蒙り、其上一族悉く富田に罷り在る上は、御疑心も有るべけれども、多年の御好み捨て難く候へば、縦ひ骨を粉にせられ肉を膾にせらるゝとも、全く恐る可きに非ずとて、兩人共に妻子を證人に出

米原龜井  
興久に與

新次郎經  
久に暇乞  
の爲め富  
田の城に  
行く

し、杵築大明神の牛王を飜し、一紙の告文を書きて、灰に成し酒に入れて是を呑み、一筋に思ひ定めければ、興久も快こころよげにて金作の太刀兩人に與へらる。斯くて興久は先づ佐田の城に人數を入れ置きなば、經久定めて彼城を圍まるべし。其時則ち後詰して一戦の中に勝負を決すべしとて、宗徒の兵二十七騎其外雜兵五百餘人を佐田の城に差籠めらる。龜井新次郎は經久へ最後の暇乞の爲め、侍五六人にて富田の城へ馳行き、經久へ謁見して、其後間近く寄りて、今度興久しかんゝの事に依つて、叛逆の次第逐一に語れば、經久聞かれて、興久野心の事は兼あらまじねて其有増あらまじを聞及びしかども、近日の動亂に及ぶべきとは思はざる處に、言語道斷の曲事なり。汝神妙に告知らせたり。此忠志の謝禮をば、重ねて所領を以て是を報すべしと云はるれば、龜井其時少しから笑ひて、いやとよ。某曾て立身の爲に主人の隱謀を訴へ申すにはあらず。當家譜代の家人として、殊に我若年の頃より、取分け愛憐を蒙り御傍に置かれ、人にも成るべき者と御覽じけるにや、御寵愛の御末子興久に附置かれ、萬事頼み思召の旨貴命を蒙りてより、如何にもして興久を取立て奉り、其時の御詞の



首尾をも合せ申度き念願に候處に、存の外なる事ども更に夢とも辨へず。然れ共一旦主君と仰ぎ奉る上は、是非なく彼の惡逆に與し奉り、骸を戰場に晒し名は苔の下に朽たさんと定め存じ候へ共、年來御厚恩の忝さに、最期の御暇乞に一目拜し奉るべきと存じ参りたるにて候へ。身の罪科を免されん爲に、主の科を告げ申す龜井と思召さるゝ御心中こそ恥かしけれ。我多年の厚恩を報せんとして經久に與し奉れば、一旦の主人に怨敵を成す。又忠臣の節を守りて興久の命に隨へば、譜代の君主に箭を放つ。此兩端を免れて腹搔破りて死せんとすれば、興久の御最期に誰有つてはかゝしく軍をもすべく候はんや。夫とても全く命を惜むには非ず。杵築大明神も知見あれ、今度の合戰縦ひ興久勝利を得らるゝ事あり共、某に於ては討死仕るべきにて候。今生の見參是迄とて、面も上げず涙に咽ぶ。經久も龜井が心中哀れと思はれて、坐に袂を絞られけるが、さらば暇乞の盃せんとて、酒取出して進めらる。其後龜井暇申して退出しけるが、門外より馬に打乗り、中間に持たせたる弓矢取つて打番ひ、龜井新次郎仕り候と高聲に呼ばはり、門の柱に矢二筋射立て、其よ

り富田の町屋に火を掛け、高らかに、富田に在合ふ人々我に近附きて手並の程を試みよと匂り廻りて、靜に馬を歩ませ行く。是を聞き富田の若者、龜井を追駆け討留むべき由云ひけれども、經久仔細有り。龜井に手な付けそと制せらる。

### 二二 佐田城没落の事

其後經久は先づ佐田の城を攻落さば、鹽治は一戰にも及ばずして敗軍すべしとて、國中の勢七千餘騎を催し、佐田の城を取圍み、我身は船に取り乗り、佐田の湖水を乘廻り、城の堅固不堅固の所々順見して、其後諸軍に下知を傳へ、一人も拔落ちせざる様に柵の木を結はせ、城を稠しく攻めらる。城兵柵を結固められては籠中の鳥の如く成るべしとて、三百餘人散々に射て、透間あらば切つて出でんとためらひたり。經久は普通に超えたる精兵を勝つて五百餘挺前に立て、其後に突騎八百餘槍を横たへ控へさせらる。其次には卯山・牛尾以下一勢々々、敵出では駈散らさんと靜まり返つて備へたり。已に足輕共野伏軍始めける程に、寄手付入りにせんと敵を呼引出

經久佐田城を攻む

佐田城合戦



さんとしける處に、城兵今岡彌五郎摩利支天の梵字書きたる金の洗米紙を立物にし、（扇脱）を以て下知し、早速足輕を引取る。寄手跡を慕ひ城へ乗らんとしけれ共、左右の櫓に矢前を揃へ、（下矢）に射んと待懸けたるを見て、經久一人も乗入るべからずと、軍使を以て制せられける程に、寄手其旨を守りて止まる。斯くて柵を結廻し内外の出入を止めらるれば、城兵此儘ならば兵糧盡きて飢死すべし。逆も死すべき命なれば、いざ切つて出で敵に逢ひて討死すべしと云ひければ、今岡彌五郎今少く待つべし。雨風頻ならん時を待つて一夜討して、若し敵陣亂れ騒がば、一人なりとも切抜け、重ねて興久の先途をも見果つべし。其術も叶はずば、そこにて討死せんは易かるべしと制しければ、各々同意して時節を待居る處に、頃は天文元年八月下旬、野分めきたる秋風の、俄に雨を催して、目刺とも知れざる程の闇き夜、是こそ願ふ時節なれとて、同廿八日（頭書）或は八月八日云々。丑三計りに城兵松枝内藏丞・池田新右衛門・淺山九郎岸崎掃部助・杉木勘解由・柴橋軍左衛門・卯山作之允・今岡彌五郎以下、宗徒廿七人、其外五百餘人の城兵今宵を最期と思ひ定め、最期の酒宴し、或は彌陀の名號を

城兵夜討す

頸に掛け、或は法華の題目を綿上に附け、足輕共に斧鎌など持たせて先に立て、風雨に紛れ柵の木を切破り切つて出でたり。寄手も兼ねて用心して心得たれば、少しも騒がず駈合せ、柵際にて乗越ゆる敵の數を知らず突伏せたり。然れ共元より思切つたる城兵なれば、少しも疼す面々に名乗り掛けて突いて懸かれば、柵近く控へたる牛尾馬田切立てられ引退けば、既に一陣破れぬれば殘黨全からじと見ゆる處に、尼子紀伊守國久・同兵部大輔其勢三千計りにて入替りて攻め戦ふ。城兵此紛れに二箇所陣屋に火を附くると雖も、寄手其儘打消しぬ。城中の兵次第に滅じければ、今新宮黨の堅陣を破るべしとは見えざれ共、何れも大剛の者共、死を一途に切つて廻る間、寄手三箇度迄突き立てられ、手負・死人數百人に及べり。されども城兵小勢なれば、終に此陣破り得ず、一人も残さず討死す。斯くて經久夜明けて後首其實檢し、何れも假名・實名正さる。其中に今岡彌五郎が首見えざれば、經久今岡一人切抜けたる事はあらし。如何様城中に忍んで殘居る事も有るべし。搜し見よと下知せられて、寄手共偏く尋搜せども終に見當らず。爰にさる岸陰に萍の折々動く事あり。

佐田城陥落

佐田城没落の事



是を怪み槍にて彼<sup>ふせくま</sup>萍を押し除けて見れば、今岡首計りを水中より出して息繼居たり。見ると等しく其儘に槍突きければ、今岡槍を押し除け、水中に抜き持ちたる刀を以て切懸からんとすれ共、水中なれば働き得ず、終に討たれたり。頓て其首を廿七人が首より下に掛置きしを經久見られ、今岡が首をば何よりも上に掛くべし。彼者は森脇長門守が草履取乙若<sup>おそわか</sup>と云ひし者なり。力量人に勝れ心剛強にして比類稀なる兵なり。<sup>(定カ)</sup>清久存生の時栗生・篠塚杯云へる兵も、此今岡には勝らじと稱美せられし程の剛の者故、吾長門守に所望して直に召仕ひ、所領も過分に取らせたり。彼名字を持たざる事を口惜く存ずる由傳へ聞ける間、頓て因州へ働きし時一番首を取りける間、其賞に今岡と名乗らせたり。其後所々の合戦に衆を抽でたる事幾らと云ふ事なし。就中比類なしと思しきは、因幡國に於て、敵五人切つて懸りしを四人切伏せ、今一人の兵と無手と組み、押へて首を搔かんとしけるが、刀の刃を散々打毀<sup>こぼ</sup>して脇指を搜しければ、組みける所にて拔落ちける間、彼鋸<sup>かのこ</sup>の様なる刀にて、首半摺<sup>なまは</sup>切りたれ共終に落ちざれば、其儘足にて踏み付け、首を捻切り提來りぬ。此振舞を見

彌五郎の素姓

て諸人目を驚かし、膽を消さずと云ふ事なし。槍を突く事十七箇度、首を取りしは數知れず。彼者には摩利支天の乗移り給ひたるなれば、凡人の下には如何とて、頓て掛替へさせらる。其後經久<sup>さすか</sup>追不便に思はれて、廿七人の者共を過去帳<sup>くわて</sup>に付け、岩倉寺に於て衆僧を供養し、深く菩提を弔らはれたり。

### 二三 末次城軍の事附興久備後沈落の事

鹽冶宮内大輔興久は、佐田の城の後詰せんとて、同意の軍士を催さるゝと雖も、纔二千餘騎にも足らざれば、此勢を以て一萬に及ぶ敵陣に後詰せん事叶ひ難しとて、兎角延引せらるゝ其間に、佐田の城程無く没落し、城兵一人も残さず討たれたりと聞えしかば、興久無興して、頓て龜井・米原を呼んで評議せらる。兩人の者此上は一日も猶豫なく富田の城へ一文字に押寄せ、夜中に町屋に火を放ち、所々に群れて鬨を作らば、富田勢悉く市場表へ打出づべし。其時兩人の中一人は御旗本にて防戦し、一人は物馴れたる兵二三百人勝りて敵に紛れ、刺違<sup>さしちが</sup>うて城内へ馳上り所々に火を懸け、

興元軍評定



一時が間に採破るべし。若又城中用心して切り入る事叶はずば、中途より取つて返し、敵の後より関を作つて切懸らば、敵思ひ寄らぬ後に敵有りと思はば、味方に野心出來て裏切するぞと心得、味方に心を置合ひて十方へ逃散すべし。追手の合戦利を得られば、富田落城手間取るまじ。縦ひ城を乗取る迄こそなくとも、一度勝利あるに於ては、當國の侍多く味方に屬すべし。御勢多く付き、威勢強大に成るに於ては、何程も良謀・奇策も亦有るべし。唯明夜富田の城へ無二に懸かれ、興亡を試みられ候へと諫議す。興久思案して、此小勢を以て富田勢に駈合せん事叶ひ難かるべし。先づ末次の城を攻落し、若林・河津杯を討ち隨へ、其後島根郡を手に附けて後、富田の城をば攻むべしと云はるれば、龜井・米原聞きて、是程愚なる御所存とは存じ寄らず。末次の城を攻落させ、島根郡を打隨へ給ふ迄、是を目の前に見ながら、經久爭で後詰せさせ給はで有る可きか。縦ひ經久御慈愛の心深く、父子手詰の勝負も情なしと思はれて後詰なく共、雲伯兩州に並びなき勇功の若林、城を堅固に抱ふるに於ては、彌々味方氣屈して兵共心變りし候はん。斯くては涉々しき一戦をも

興久末次の城を攻む

せで浮名を屍の上に汚すべし。今に於ては勝利を全く御心に懸けらるまじ。唯尋常の最後の軍して、不義無道はさる事なれども、勇猛は長たりと人にも唱へらるべきと思召し定めらるべし。勢の多少と云ひ父子の軍と云ひ、旁々味方勝利あるに道なし。唯一歩なりとも富田の方へ赴き、潔く一戦して運の存亡を試られ候へかしと云へば、興久暫く目を閉ぎ居られけるが、良久しくして各々承る處もさる事なれ共、先づ我存する仔細あれば、末次の城を攻む可きなり。若し經久後詰あらば、夫こそ望む所なれば、駈向ひて興亡を一戦の中に究む可し。某一命を末次の城に懸くるに於ては、如何なる若林なりとも、各々に矢の一つをも放させまじと荒言して、既に打立たんと思はるれば、各々力及ばず、逆も活きて有らん身ならねば、何れの道にて捨つるも同じ命なりと、何れも覺悟を極めて、龜井・米原・櫻田・笠崎・柳原市丞など云ふ宗徒の兵十七人、終夜酒飲み戯れけるが、龜井・米原にさしたる花を翳して、身を捨ててこそ名は久しけれ武士の、矢武心の花に引く弓、筆の名こそ妙なれやと謠ひければ、各々涙を盃中に灑ぎたり。已に其夜も明行けば、鹽治宮内大輔興久二千餘騎を

末次城合戦

末次城軍の事附興久備後沈落の事



率ゐて、若林伯耆守が籠りたる末次の城へ押寄せ鬨を作る。然れ共城中には鬨をも合せず、静まり返つて音もせず。寄手若林聞逃がしたるにやと柵を破り、堀を渡りて堀の手へ付けしか共、猶も静まりて矢の一つをも射出さざりければ、寄手一度に堀を乗越えんとする處を、堀裏に隠れ居たる兵共、槍・長刀の切先を揃へ、切落し突落しける程に、討たる者二三百人に及べり。中にも伯耆守が固めたる折堀の下にては、一所に六十二人迄突落されければ、寄手は堪へず堀際迄引退き、息繼ぎ休み居ける處に、富田の方より尼子紀伊守父子四人、同下野守〔頭書〕世に尼子比丘尼と稱するは此人なり。經久の弟なり。大將として、龜井・河添・卯山・牛尾・櫻井・廣田・河本・森脇已下八千餘騎、眞黒に成つて打出でたり。興久、龜井・米原に向ひ、是へ大勢の見えたるは富田より後詰有りと覺えたり。當城には押へを置き、富田勢に馳向つて一戦せんと云はるれば、兩人唯此が有無興亡の所なり。興久は暫く爰にて當城を押へられれば、二人の者共先づ後詰勢に向ひ勝負を試む可しとて、一千餘騎を引分け、一村茂りたる吳竹を楯になし、其前に澤田の馬の足の泥りける所を隔て、射手を進めて待懸くる。米原は俄にあ

富田城より  
尼子紀伊守等  
後詰す

龜井能登  
守敗北

たりの在家を毀ち、柱・棟等を道筋に横たへ、葎草を束ねて所々に置き道妨となし、其隱より防矢射んと構へたり。斯くする間に敵勢はや間近く押寄せたり。龜井能登守今日の先陣は他に譲る所に非ずとて、八千餘騎にて米原が手へ押寄せ、材木を越えんとする處を、束ね重ねたる茅藁の蔭より散々に射れば、足輕共射立てられ引退く處を、能登守是程の所攻破らぬ事や有ると怒りければ、龜井が若黨我先にと射れ共切れ共用ひず、無理に乗越え討つて懸る。米原三百餘騎爰を大事と防ぎ戦へば、龜井大勢なりと雖も、終に射白まかされたる上、材木を越ゆる時大勢討たれければ難なく突立てられ、一度に颯と引退く。二陣の廣田・櫻井・屋吹千計りにて入替りて相戦ふ。龜井新次郎が手へも牛尾・河添の者共懸りたるに、龜井散々に射させ疼む所を蒐立て、藪の蔭にて人馬の息を入れ、七百餘騎を二手に分け、更戦ひ更休みて時移る迄防ぎ鬨ふ。斯くて富田勢何れも突立てられ勝敗如何と見る處に、尼子紀伊守國久・嫡子兵部大輔・二男式部大輔・三男左衛門大夫二千餘騎、太鼓を打ちて静々と懸かられるに、米原暫く防ぎけれども終に押立てらる。右の方に控へ

興久勢敗  
北



たる龜井新次郎も下野守に破られ、是も同じく引きけるが、龜井・米原一所に成つて兩人議して、同じくは新宮黨の人々に逢ひて討死せんとて、兩勢合せて一千餘騎、二度迄敵を突立てけれども、富田の總勢一つに成り懸り來る間、爰こゝかしこ彼にて五騎十騎づつ討死して後まばらに成りければ、龜井新次郎、米原小平内に向ひ、此儘ならば兩人共に爰にて討死すべし。然らば誰か興久の先途をも見届けん。御邊は急ぎ興久の旗本へ引返し、合戦の様をも申され、何とぞ興久備後へ落ちられれば、山内大和守は正しき塔鼻の間なれば、大和守を頼んで、今一度無念を散ずる軍をもし給ふ様に、智計を廻らさるべしと云へば、米原爰を見捨て、何國へか引くべきと、中思切つたる體に見えければ、龜井様々利を説きて言を盡し言斷りければ、米原さらばとて東西に引分る。頓て平内興久の本陣に歸り、始終の有様委しく語り、此上は是にて討死有る可き哉、又家城へ歸陣有りて、叶はざる迄も今一度鬪争を遂げらるべき哉と云ひければ、興久とて功を立つべき道なければ、爰にて潔く戦死すべけれ共、妻子を人手に渡さん事口惜しければ、先づ家城へ引返して、妻子共を備後へ退

興久佐田  
城へ退陣

龜井新次  
郎討死

け、其後心安く自害せばやと云はるれば、さらば兎も角もとて米原後陣を打つて佐田迄と引退く。斯くて龜井は、興久今は遙に落延びられつらんと思ひければ、今迄は落残りたる勢を纏め、小高き所に登りて敵を會釋しけるが、悉く打下して唯死なんとのみ働きて、敵數人討取り終にそこにて討死す。此隙に興久はるか杳に落延びられけるが、敵勢討留めんとて慕ひ來るを、米原道々引返して數度敵を追拂ひ、頓て興久に追付き、打連れて引く處に、若林伯耆守は富田より後詰の有るを見て、興久定めて佐田へ引取らるべきと兼ねて思ひければ、城を竊に出で、行先の濱路に少し狭き所有りけるに、一文字に柵を結び、一人も通すまじと待懸けたり。興久是をば知らず、米原と相共に五百計りにて落ちられけるが、先立ちて逃げたりし者共走歸り、是より先に敵柵を結び鏃を揃へて待懸け、柵際にて味方六七十人計り討伏せられたり。唯是より引返さるべしと云ひければ、興久驚きて米原に向ひ、如何有るべきと云はるれば、米原小平内爰をば某謀を以て通し見んとて、あたりの獵船を一艘求め出し、興久主従七八人を乗せ、海上を経て佐田迄落したり。興久米原にも船に乗れか



しと云はれけれ共、元來討死すべきと思定めければ、若林が餘りに不得心なる働ゆるまが憎ければ、彼が陣を打破つて一面目失はせ候はんとて、主従七八人にて引返せば、志有りける者四五十騎、共に討死せんとて打連れて馳行く。其外五百計りの勢は是より思ひくくに落散れり。斯くて米原小平内は若林が三百計りにて備たる柵際へ打寄せて、若林に詞をかけ、九尺計りに見えたる十文字槍を提げて、一槍參らんと云ひて渡合ふ。若林は三間柄の槍にてぱつしと合するや否や、米原つと入つて若林が左の口の脇をしたゝかに突きたり。伯耆守持ちたる槍を抛捨て、米原が槍を押し除け飛懸かりて、米原を引寄せ取つて押へたり。平内其隙に脇差を抜きけれ共、大力に兩腕を縮められ働き得ざる處を、若林懸て首を搔落したり。然れ共伯耆守も此疵を煩ひて終に死たると聞えし。宮内大輔興久は家城へ落著かれけるが、富田より頼て討手として大勢向ふと風聞しければ、夫より急ぎ山内大和守〔頭書〕山内直道を頼みて備後國へ落ちられたり。若林伯耆守今度の軍功に依つて、經久感じて島根郡二百貫を勸賞に行はれたり。

興久備後國へ落つ

### 二四 元就備後安藝所々城攻の事

毛利元就備後國宮下野入道が城を攻めらるべきとて、熊谷伊豆守信直・天野紀伊守隆重・香川左衛門尉光景以下二千餘人を帥ゐて、天文三年二月上旬、藝州を立ちて備州へ發せらる。宮入道能く防戦する中不意に病死す。其子若狹守は未だ若年たりと雖も、家の子丹下が一族能く城を守る。同七月三日、元就二千餘にて城下の在家を放火して引退かるゝ處に、丹下與兵衛五百計りにて後を慕ふ。香川兄弟殿しけるが、弟元忠是を追退け引返す。其後も度々丹下二百三百にて打出迫合ひけるが、丹下が勇力に敵恐れて近付く者なき故、或は手負ひたる體にもてなし、或は虚死して、敵近付けば俄に起上り其首を打臥る。或る時丹下矢手を負ひて引兼ねたる處に、味方は常の事と思ひ助け合せざる間に、藝州勢十騎計り落合ひて是を討取りける故、城中降參して城を明渡す。之に依つて元就藝州へ歸陣せらる。

丹下一族元就の軍を防ぐ

〔頭書〕今年天文三年、伯州羽衣石城主南條豊後守宗勝・同國尾高泉山城主行松入



元就高野山を攻む

道等、爲<sub>二</sub>尼子追出<sub>一</sub>本國云々。

同四年三月上旬、元就二千餘を率ゐて備後の高野山の城下へ押寄せ、城の尾頭より仕寄を付けて攻めらるれば、城主高野山入道久意備前の赤松へ加勢を乞ふと雖も、援兵遅々しける間、城中糧<sup>かて</sup>乏しくなりて、二の丸へは本丸より糧を少し宛運ぶと雖も、其間に深き谷有りて人の往來容易からざる故、網を張渡して瓢箪に糧を入れ、其網に付け朝夕通しける。寄手是を見、何とぞ此網を射切らんとしけれ共、其間遠くして叶ひ難し。元就桂左衛門尉元澄に命じて網を射切らせらる。城中甚だ迷惑す。其後彌、嚴しく城に攻入れば、入道叶はず終に降参したり。元就は夫より處々へ押寄せ、城七箇所攻落し、藝州へ歸りて國中の城々を攻められける處に、家人井上源五郎謀を運して城中へ忍び入り、焼立て杯して敵城六箇所迄攻破りしが、其後市川の城へ忍び入りける處に、敵出合ひて防ぎ戦ひ、井上終に深手負ひ程なく死したり。此兩年の間、備藝の間に於て、城々十餘箇所元就の有に屬せり。

〔頭書〕或説に、此時元就桂が弓精<sup>〔勢力〕</sup>を感じて、能登守教經に准じて能登守に名を改

高野山の城落つ

めらる。

### 二五 元就尼子と不和になる事<sup>附</sup>晴久藝州吉田

#### 發向の事

元就多年尼子の幕下に隨はるゝと雖も、民部大輔晴久の代に至つて、元就の武功近國に其名高く、此の如くにては、後には尼子とても毛利家の麾下にこそ屬せらるべきと、人皆評舌しければ、晴久へも此節元就退治の謀略無くんば、向後當家の爲め臍<sup>ほぞ</sup>を嚙むべきと讒詞する者有りければ、晴久も此事を尤と信用して、夫より元就を疎んじ、毎に不快の色顯はれければ、元就も當々是を憤り思はれける折節、大内家へも此事粗漏れ聞えけるにや、義隆竝に陶尾張守より、大内の味方に屬せらるべき旨懇に申し越さる。元就れ吾尼子と縁者の好<sup>よしみ</sup>に依つて、一旦麾下に屬してより戦勳を抽づる事多年なり。然るに今讒者の佞言を信じて、動<sup>や</sup>もすれば我に害心を懷かるゝ條謂れなしとて、則ち大内家一味の返事せられ、頓て兒玉木工允を山口へ遣し、

元就大内に一味す



彌、其盟約を述べられたり。借又元就より尼子に附け置かれて、富田に在りける赤川十郎左衛門・光永中務兩人の者へ密に此旨を通達し、急ぎ彼地を引取るべき旨下知せらる。是に依つて兩人密に富田を立退きける處に、尼子聞付け則ち追手の者懸り來り、同國大東と云ふ所にて難なく、兩人に追著きければ、赤川・光永引返し暫く防ぎ戦ひ、一旦敵を追散らすと雖も、素より追手多勢なる上、光永深手負ひければ、兩人異議なく切抜けん事叶はじと思ひければ、中務赤川に向ひ、某事此の如く手を負ひ殊に老身、旁一同に立退かん事叶ふべからず。此處にて討死すべし。追手の勢重ねて又急に攻め近著つかざる中、急ぎ此所を立退かるべしと勧めければ、十郎左衛門聞きて、兩人一所に有りて敵に逢ひ、一人踏止りて討死せんを見捨て、某人此所を立退きては、弓矢の恥辱是に過ぎず。重ねて人に面を向くべき様もなければ、曾て思も寄らずと云ひければ、中務又一端の道理はさる事なれ共、今此所にて兩人一所に死たればとて、主人に對しさしたる忠義に非ず。如何にもして一人なり共此を切抜け本國に歸り、頃年雲州に在りて、尼子家の様子見聞せし趣つよを具に

君家に訴へ、向後戦忠の爲に一命を抛なげんこそ、眞の忠義なるべければとて、片時も早く急がるべしと頻に諫め諭しければ、赤川も差當る道理に屈服して、しぶく其所を立ちて別れ落ちたり。其後中務は敵の懸るを待受け、馬引寄せ打乗つて、毛利家の侍光永中務光重と名乗りて、近著く敵を待懸けたり。尼子勢渠を少勢と見てければ、我先に討取らんと總勢一度に攻め懸る。光永は討ち残されたる郎黨十人計り左右に従へ、敵陣に馳入り、駈破り駈通り、取つて返しては討靡け、死狂ひに攻め戦へば、今迄付き従へる家人も次第に討死して、主従二三人に討ち成され、其身も殊に戦ひ勞れければ、今は赤川も定めて遙に落延びつらんと思ひければ、其儘馬に乗りながら刀の切先を口に當て、熊と馬より逆さかに落ちて貫かれて死ぬ。赤川十郎左衛門は難なく吉田に歸り著きて、雲州の様子具つよに訴へ、此度大東に於て追手の勢と相戦ひ、光永を見捨て面目なくも引歸りたる趣など、委しく申し述べければ、光永は深手負ひたれば俱に、引歸らん事叶はずして、討死せしは力なし。赤川に於ては無益の討死を遂げずして、中務が異見に従ひ歸りし事、是ぞ忠義の志を忘れざる



元就神邊  
城を攻む

故なりとて、殊に感賞せられたり。其後元就は藝州に有る尼子一味の城々に押寄せ、一時攻めに五箇所迄攻め崩し、夫より山名宮内少輔忠興が居城備後の國神邊かんたべに陣を寄せ、城下を放火して彌々尼子と手切れの色を立てられたり。尼子晴久此由を聞き大に憤り、其儀ならば頓て旗下の諸將を催し、藝州吉田に發向し、大勢を以て即時に城を攻崩し、此程の事をば追付け思ひ知らすべき者をと、殊の外に怒り伺られけるが、頓て當家の諸臣を悉く召集め、近日元就を退治の爲め、藝州吉田發向すべき旨評議せらる。祖父經久へも此事を告げられける處に、經久は素より武功を以て數箇國を切り從へ、中古に名高き老功の大將なれば、晴久短慮の血氣に任せ、當時の英雄元就に對し、此事急に思立たれん事危忽なりと思はれければ、先づ石見備後兩國を討ち從へ其人質を取固め、其上にて吉田出張然る可しと云はるゝと雖も、晴久上には此議尤と同意しながら、經久老耄して斯く臆したる事を宣ふとて、近國の侍を催して元就退治の用意をせらる。伯耆の大山へ合戰勝利の爲に緋緘の鎧太刀一振是を籠めらる。吉田筑前守・同弟左京亮に二千餘騎を差添へて、南

晴久吉田  
を攻めんと  
議る

條・行松等若し本領へ打入る事も有る可きとて、伯州の押へに置かる。

〔頭書〕一書に、此時尼子下野守も吉田發向の事、却て味方危ければ、先づ石備兩州を切開きて後、吉田發向せられよかしと、再三異見せらるゝと雖も、晴久下野守の例の臆病異見とて曾て用ひられずと云々。

扱藝州發向の道路は、三吉式部少輔味方であれば、三吉口より推入るべし。先づ事の様を窺ひ見よとて、尼子紀伊守・同下野守・同式部大輔を大將とし三千餘騎、天文九年六月下旬、備後の三吉迄發向せしむ。同國志和地八幡山には、三吉より家人中村石見守を籠置く故、宍戸安藝守が領地岩屋の城に籠め置く處に、新宮黨彼城を攻落りなれば、宍戸が舍弟深瀬彈正隆兼を岩屋の城に籠め置く處に、新宮黨彼城を攻落さんとして、河耳迄打出でけるに、深瀬さる勇士にて稠しく防ぎ、折節雨降り河水増して渡難し、河向には敵鏃を揃へ待懸けしかば、新宮黨頓て勢を打入れ八幡山へ引退き、夫より雲州へ歸陣す。同年八月尼子民部大輔晴久、藝州吉田へ發向せらる。相從ふ人々は、尼子下野守・同嫡子〔助イ〕孫四郎・尼子紀伊守國久・同兵部大輔・同式部大輔・同左

晴久吉田  
を攻む

元就尼子と不和なる事附晴久藝州吉田發向の事



衛門大夫を先として、伯耆播磨美作備前備後隱岐の國侍、尼子家に志有る者馳集りて、其勢五萬餘人、八月下旬に富田を立つて九月四日藝州吉田に著き、青野鼻三猪口に陣取らる。此時吉川治部少輔興經〔頭書〕永正十五年戊丑誕生、今年天文九年廿三歳、國經は去る享祿四年卒。天文九年迄十年。も尼子の幕下たるに依つて、同國新庄の居城を發して吉田表に出張せらる。晴久の本陣左の方に湯原彌次郎湯信濃守三千餘にて備へ、高尾豊前守・黒正神兵衛尉・吉川治部少輔興經は右の方に備へらる。元就尼子と不和に成りしより、譜代の家人の末子、人普く知らざる者を尼子方へ奉公させられけるが、其者共何角の事を内通す。又尼子よりも三年前より、内別作助四郎と云ふ者を偽つて勘當し、毛利家へ奉公させられけるが、元就其心を得て傍近く給仕せしめらる。〔頭書〕内別作事、元就祐筆に被召抱、晴久の近習の者となさ有つて今度尼子吉田出張の儀に付、家臣等と評議せらるゝとして、晴久あはれ甲山に陣を取られよかし。若三猪口に陣を張られなば、周防への通路を塞がれて、味方の働自由なるまじき間、一先づ山口へ開き、大内を頼みて重ねて合戦すべきなど、隱密に議せられけるを、内別作聞いて頓て或夜逐電す。元就後にて今度尼子三猪

元就晴久互に間牒を放つ

毛利勢金山に陣を取る

口に多分陣取るべし。若し甲山に陣を張られれば、當城を目の下に直下し、究竟の要害なれば籠城危かるべしと云はれけるが、果して晴久三猪口へ陣を居ゑらる。武田刑部少輔信實は、兼ねて本領安堵の願有つて、尼子を頼み居られけるが、牛尾遠江守相共に佐東の金山へ打入らる。之に依つて毛利家より熊谷伊豆守信直・香川左衛門尉光景以下に、兒玉周防守を檢使として、都合七百餘を金山へ差向け、日々足輕迫合あり。藝陽の侍・毛利家與力の輩も勝負を窺つて、元就に組する者もなき處に、同國五龍の城主宍戸安藝守元源・嫡子雅樂頭隆家に、軍士百餘人を添へて吉田郡山の城へ差籠る。又小早川又太郎正平、我身は風氣を煩ふに依つて、其臣小早川中務〔頭書〕本名梨羽。に五百餘人を添へて差出す處に、尼子勢吉田郷中嶺々谷々に充満て、郡山へ入らん事叶ひ難く、小早川中務先づ吉田の坂に控へたり。同六日尼子勢河添美作守・黒正神兵衛尉湯信濃守・廣田櫻井馬田里田以下四千餘、爰彼に打散つて在家町屋を放火し、其後二手に分つて押寄せ、太郎丸を焼拂はんとする處に、城中より粟屋兒玉・内藤三戸・佐藤飯田・波多野・淺原・櫻井〔等脱〕打出で、防戦して追崩し、足輕數十人討

元就尼子と不和になる事附晴久藝州吉田發向の事



取り、手毎に首提げて城に入る。小早川中務が控へたる吉田の坂へ、尼子勢湯原彌次郎押寄せ戦ふ處に、防州より杉次郎左衛門尉馳上つて中務が陣に相加はる。又城中より井上の一類・山縣一黨三百計り扶け來りて、敵の後より切つて懸る。是に力を得て小早川・杉透間なく攻懸かる。湯原前後の敵に馳合せ終日挑み戦ふ處に、馬を深田に乗箝め、兎角する中に城兵山縣彌三郎〔頭書〕一書に彌三左衛門とあり。馳寄つて討落し、其首を討取りたり。此時城兵元就の家人粟屋與三右衛門・羽仁藤兵衛・佐武善左衛門等比類なく相働きたり。

〔頭書〕或書に曰く、尼子近日吉田出張の聞え有りしかば、兒玉與八郎と云ふ者、今度雲州著陣せば、人より先に、何とぞして一番に首を取つて、大將の實檢に備へたき事なりと思ひけるが、雲州吉田に著きける折節、下人の如く出立ち、古き箠笠を被り、其下に刀を指し掬網を持ち、敵陣近き所に行き魚を掬ふ、尼子方の侍、味方の足輕共の漁獵するぞと心得、何心もなく數人出で見物す。敵見入つて油斷の透を計らひ、侍一人討取り残る者共追散し、首を提げ歸りたり。元就は此働御心に叶はず、暫く追込め置き給ふと云々。

〔頭書〕城兵粟屋掃部助・同縫殿允兒玉四郎兵衛・同三郎右衛門・佐藤彦三郎・内藤六郎右衛門・波多野源兵衛・三戸飯田・淺原・櫻井等相働きたりと云々。

〔同〕或説に、此時大内義隆後詰可有とて、先づ杉次郎左衛門を藝州へ上せられ、勢を被催と雖も、相從ふ者なく、小早川又太郎計り從之、則ち杉兩勢合せて二千計り、坂豊島に陣取候處に、尼子衆切懸り合戦有り云々。

〔同〕或書、湯原人數を率ゐ、戸島池の内へ打入る。清長の粟屋與三右衛門・小山の佐武・穗掛村の羽仁藤兵衛等馳向ひ、相戦ひ、梨羽も坂の陣より來つて、一つに成り戦ふ云々。

## 二六 九月九日十二日合戦の事

同九月九日、尼子勢本庄越中守常光・赤穴右京亮・湯佐渡守以下四千餘にて、後小路を放火し敵打出るに於ては、駈散じて我々が高名にせんと働き廻りたり。城中の



遺分の合戦

足輕共打出で、丹比河を渡つて遠矢少し射掛け、弱々として引退く。尼子勢我先にと追駈くる。此時城兵の大將は渡邊太郎左衛門、其外問田宮内少輔・天野紀伊守・井上與三衛門・渡邊新右衛門・兒玉左衛門・太郎・二宮土佐入道即阿彌〔頭書〕實名晴久、二宮順喜嫡男也。岡與三右衛門・渡邊十郎三郎・同源十郎・井原・樋爪等相伴ひて五百餘騎、〔頭書〕實名晴久、二宮順喜嫡男也。遺分〔頭書〕實名晴久、二宮順喜嫡男也。と云ふ處にて渡合ひ相戦ふ。岡與三右衛門槍脇の弓にて敵多く射落す。渡邊太郎左衛門・本庄何某と槍を合せ、突伏せて首を取る。渡邊十郎三郎は高橋を討取る。城兵にも渡邊源十郎・樋爪某など討死す。尼子方本庄越中守・赤穴右京亮高名す。寄手聊か利を失ひて引退く。城兵小勢故少し慕ふ様にして討入りたり。同十二日雲州勢横道石見守・同兵庫介・牛尾參河守・岸左馬進・高尾豊前守四千餘、卯の刻より大田口へ相働く。城中より粟屋縫殿允・井上河内守・同源三郎・同源五郎・同立蕃允・同與三右衛門・粟屋右京亮・同源次郎・同伯耆守・福原源右衛門・波多野源兵衛・坪井因幡守・内藤六郎右衛門・綿貫新右衛門・三宅・三戸以下、駈合せ忽ち突崩し、十日市邊迄追詰めて數十人討取り、是も小勢なる故長追せず、城中に引き入る。〔頭書〕本文井上源五郎載之。六年巳前、天文四年、藝州市川の城にて深手を負ひ、

程なく死たるは又前段に見えたり。其時の源五郎子又源五郎と云ひたるにや。

### 二七 九月廿三日合戦の事

同廿三日白豆坂會下谷に陣取りたる龜井能登守・森脇長門守・三刀屋彈正左衛門・福山次郎左衛門等二千計りにて、三塚・風越山・宮崎邊へ陣を替ふる處を、城中より中村豊後守・中原善左衛門・井上長門守・同與三左衛門七百餘騎打出で矢軍しけるが、雲州勢射立てられ引退けば、城兵進みて攻懸かる。龜井能登守・森脇長門守手を負ひければ、尼子勢彌・堪へ兼ねて引退く間、中村の一族真先に進みて、終に風越山・宮崎の陣を切崩す。其後又寄手後河原へ打出でたるを、城より兒玉三郎右衛門以下の若者共下合せて相戦ふ。能谷伊豆守・香川左衛門尉より人質として、郡山の城へ籠置きける熊谷左馬助〔頭書〕伊豆守信直次男なり。平三直續が跡を繼ぎて、新介直顯父也。香川淡路守兩人、兒玉が手に付いて出で、槍下の分捕す。扱出雲勢引退くに依つて、城兵も打入りぬ。牛尾遠江守が同朋に琢阿彌と云ひて大方の強の者有り。遠江守が嫡子湯原彌次郎に従ひて出陣せしが、風



氣を煩ひ臥居たる處に、其日主の彌次郎討死したり。一塚阿彌此日從ひ出でざる事を口惜く思ひながら、病身心に任せず日を送る處に、病少し軽く覺えしかば、早速城近く寄せ來り、是は牛尾が近習の者なり。主にて候者討死せし刻きざら、所勞の事に依つて在合さず、唯今討死せん爲に罷向ひたり。毛利勢討出でられれば、勝負せんと言れば、城内より井上與三右衛門出向ひ名乗懸け、終に是を射落し首を取れり。

〔頭書〕異書に云く。晴久の出頭湯原彌次郎、近國武士元就に通じて加勢を出し、此近郷諸所に陣する由、某馳向ひて追拂ふべしと望んで人數を率ゐ、戸島池の内へ討入り、清長の粟屋與三右衛門・小山の佐武・穗掛村の羽仁藤兵衛など駈向ひ戦鬪す。小早川の加勢梨羽中務板村に陣する處に、此所へ駈付け、西屋・佐武と一つに成り相戦ひ、湯原彌次郎を討取ると云々。

## 二八 尼子紀伊守國久と南條宗勝合戦の事

吉田筑前守・同舍弟左京亮は、尼子より伯州の守護に置かれたる處に、早打を以て晴久の陣所へ注進しけるは、尼子藝州發向の隙を窺ひて、山名但馬守より、因幡の守護に置かれたる武田山城守に、伯州の浪人南條豊後守宗勝・山田出雲守・小森木工允など相添へて、六千餘騎を先手として、近日伯州へ討入るの由風聞有り。急ぎ尼子一族の内一人大將として、當國發向有るべき由告げたり。晴久驚き、吉田兄弟に附置きたる勢僅なれば、先勢を引分けて彼表へ遣すべき旨議せらるゝ處に、尼子紀伊守國久某父子發向せん由望まる。依つて即ち二千餘を引き分けて、紀伊守を大將として伯耆國へ差向けらる。斯くて武田山城守は因州鳥取の城に籠り居けるが、國久が兵小勢なりと聞きければ、さらば伯州へ打越ゆべきとて、其勢七千餘騎伯耆國馬野山邊へ出張し、是より勢を二手に分つ。一手は南條豊後守・小林木工允・餅瀬等二千餘橋津口へ馳向ふ。一手は山城守大將として、山田出雲守・行松入道・簗部以下五千餘を隨へて渡口へ打ち出づる。尼子勢、吉田筑後守父子二千餘にて橋津口へ向ふ。渡口へは尼子紀伊守國久・嫡子兵部大輔・波多野以下三千七百餘にて控へたり。兩陣入り亂れ手痛く相戦ふ處に、尼子兵部大輔深入りして、矢に中り馬より落つる處を、武



田が家人中原木工允押へて首を取る。國久無念に思ひて、武田勢を忽ち切り立つれば、敵堪へず逃行きたり。爰に武田が若黨林權平と云ふ者、日來は主の勘當を蒙りたりしが、敵陣へ駆入り能き頸一つ提來りて、山城守に向ひ、勘當赦免有るべき哉と云ひければ、山城守大に訶つて、誰が許して是迄は來れるぞとて更に許容せざれば、權平しほくと涙ぐみて、又敵陣へ駆入り、終に討死したり。是を見し人、餘りに心強き振舞なりと皆人云ひければ、山城守、我今運窮りて討死せんとする折節、日來勘當の者を免さば、主と死を共にする家人のなき故、渠を赦免せしなど人嘲らん事を思ひて、斯く振舞ひしと云へり。扱山城守は馬野山すくも塚邊迄落行きけるが、敵透さず追駆くれば、今は叶はじと思ひて、すくも塚へ走上り自害したり。橋津口へ向ひし南條宗勝も、吉田父子と戦しが、終に打負け、宗勝は水中を遊ぎ潜りて遙沖に出で、漁人の釣船に助け乗せられたり。

〔頭書〕或書曰、元就云々。相合宮崎の尾より熊ヶ谷へ取續けたる陣は、淀井・福瀬・吉川、其外因幡・伯耆の者共と見えたり。一夜討して切崩すべしと宣ふ。之に依

りて九月廿八日の夜、中村豊後守他人を交へず己が一族を催し、宮崎の尾に押懸け切崩し、數十人討取る。又志道・上野・口羽刑部・矢野隆重・桂元澄・赤川左京已下、相合熊ヶ谷の陣へ打寄する。敵周章して懸合せんとする者なく、方々へ逃散す。吉田勢追詰めて首數多討取り、淀井・福瀬討死。又吉川の内山縣立蕃允と云ふ大剛の兵を、桂元澄討取云々。元就の云く、今度淀井・福瀬をば何某討取りたるぞと尋ねらる。各、申すは、大事の敵討洩しては無念と存じ、各、中に取籠め討果し候へば、誰こそ打留めたれと申す事、分明ならずと申上げたりと云々。  
〔是カ〕  
各、の説別書に見當、眞偽不知、非。

## 二九 土採場合戦の事

同十月十一日、尼子式部大輔舍弟左衛門大夫大將として、雲・伯・石の勢一萬餘吉田郷中へ馳出で、焼き残たりる在家を放火して城兵を招く。是は此程數箇度の戦に寄手利無きを無念に思ひ、新宮黨出でたるなり。此新宮黨と云ふは、尼子紀伊守國久、

新宮黨の  
由來

土採場合戦の事



元就新宮  
黨と戦ふ

嫡子兵部大輔、此兵部は此程伯州に於て討死し、其舍弟式部大輔・三男左衛門大夫等なり。紀伊守國久は伊豫守經久の次男にして、雲州新宮谷に居城せるに依つて、新宮黨と云ふなり。所々に於て數度の武功を顯はし、強敵をも曾て恐れざる者共なり。元就此黨打ち出でたるを見て、彼等は自餘の敵に非ず、自身向はるべしとて、二千餘人を従へて打出でられ、先づ渡邊太郎左衛門尉〔脱ア〕連・國司右京亮元武・兒玉左衛門太郎・粟屋掃部助・同右京亮に五百餘を添へて大通院谷より忍び下り、三口市邊の藪蔭に隠れ居て、〔頭書〕三口市丹比川の邊に伏置と云々。異書曰、常友邊の林の内に伏置と云々。相圖を待てと言ひ含め、又桂左衛門佐元澄・志道上野介廣好・兒玉十郎右衛門・粟屋孫次郎・同太郎左衛門・兒玉木工允・井上又右衛門・同大藏左衛門・波多野源兵衛・井原善左衛門以下二百餘をば、城より五六町下に巖聳え樹茂りたる所あるに控へさせて、敵若し追ひ來るに於ては、嶮岨を便に防ぐべき旨下知せられ、粟屋縫殿允を城中に残し置き、〔頭書〕城中には粟屋縫殿允・赤川十郎左衛門・飯田・三宅を始め、其外置ると云々。

元就は嫡子隆元竝に家人口羽下野守通良・赤川〔左カ〕右京元秀・同又五郎・兒玉三郎右衛門・同與八郎・同内藏允・佐藤彦三郎・長屋縫殿允・桂善左衛門・岡亦十郎・長沼宮内・三戸五

油繩手の  
合戦

郎右衛門・同小三郎・井上長門守・同玄蕃・同源次郎・同與右衛門・同七郎四郎・平佐源七郎・内藤九郎兵衛・椿槌房以下一千餘を隨へて、祇園谷より油繩手へ打出でらる。尼子式部大輔元就自身打出でたり。是ぞ願ふ所なりとて眞先に進む。總軍も我先にと懸かる間、前後の備へ混雜す。元就是を見られ、敵大勢を頼みて我を輕んずると見ゆ。進んで切り崩すべしと下知して、押太鼓を打たせらるれば、兩陣の魁兵むす無手と渡合せ、油繩手に於て攻め戦ふ。敵には其頃關西に名を得し新宮黨大將として、軍曹立原備前守、相隨ふ軍士三澤・三刀屋・古志・山中・神西・池田等、進んで攻懸くれば、城兵突立てられて先陣少し引退く。元就味方を勵まし敵の眞中へ突いて懸らるれば、尼子勢押立てられて引退く。立原軍士に下知し押返す。式部大輔兄弟も是程の小勢一時に揉破るべしと、貝太鼓にて懸來る。然れ共此繩手道狭く、大勢一度に懸り得ず、元就の旗本勢口羽・赤川・兒玉、其外一人も残さず槍を合せ、身命を捨て、相戦ふ。中にも椿槌房當年十四歳と名乗りて槍を入る。此槌房後井上豊後守と云ふ。此時は椿と云ふ者の養子に成りしが、此時の働比類なく見えし。



〔頭書〕此時吉田衆志道上野介・兒玉三郎右衛門・口羽刑部・國司右京・同源次郎・井上又右衛門・波多野源兵衛・中原善左衛門・内藤九郎兵衛・兒玉木工允・同内藏允・佐藤彦三郎・三戸五郎右衛門・同小三郎槍を合す。立原備前守・三澤三郎左衛門、其外歴々槍を合す。三澤は無雙の大力にて、三間柄の槍を持口數度突懸り、手柄を盡すと雖も、數箇所手を負ひたる故、終に井上に討取らる。

斯て元就兼て定めし相圖をせらるれば、三日市・常友より伏兵一度に駆出づれば、雲州勢程なく突立てられ引色に成る處に、三澤三郎左衛門尉爲幸手勢五百計りを引分け、總軍崩れんとすれ共、少しも瞬かず踏留つて戦ひ、爲幸既に危き處に、家人三澤藏人布廣左近・野尻玄蕃以下七十人計り中に隔て相戦ふ。吉田勢爲幸一人を目懸けて矢を放つ間、三澤數箇所手負ひたる處を、井上七郎四郎組んで首を取る。之に依つて三澤藏人・野尻玄蕃・竹中孫三郎を元卅餘人討死す。〔頭書〕此時も井原・樋爪・渡邊源七郎討死すと云々。但し此者共に九月九日合戦に討死すと云々。爲幸が嫡子爲清、父と一所に討死すべきとして駆出づるを、布廣左近・米澤入道引止めて退けば、吉田勢射取るべしとて勇み懸れば、引返し戦ふ

者も多けれ共、終に突崩され、深田の中へ馳入り討たる者數知れず。吉田勢は手毎に分捕し、勝鯨波を揚げ閑に城へ入りぬ。〔頭書〕桂善左衛門は、此度木戸より加勢として來りしとなり。又井原村の樋瓜も、一同に従出づるとなり。口外小二郎・井上右衛門將・渡邊源十郎相従ふと云々。又案するに渡邊源十郎・井原の樋瓜、九月九日の合戦に討死と本文にあり。然れども異書の文段、九月九日合戦の事なるべし。

〔頭書〕異書に曰く、三澤藏人は無雙の大力にて、三間二尺の長身の槍を持ち働ける處に、波多野源左衛門利春と名乗懸かるを槍にて打倒す。利春又起上らんとする處を突殺せば、内藤九郎右衛門突懸りて暫く勝負なし。三澤左右の手に槍と太刀とを持ちて戦ひ、終に内藤を打伏する。三戸與五郎長刀を持つて打つて懸る。三澤太刀をば鞘に納め、槍を以て横打に打倒す。與五郎も四五度起上らんとしければ共、打倒し、突伏せたり。井上源左衛門詞を掛けて打つて懸かる。三澤槍を取延べ拜打に討つ。井上も槍にて打拂はんとすると雖も、大力にて打たれ槍柄を打折り、其儘太刀を抜合せ切拂ひ、組付け、れども押伏せられ討たれたり。井上與二郎元就の命を請けて大厩〔雁股カ〕俟を以て、三澤が目の上を籠深に射たり。藏人妻手にて槍を振廻し、弓手にて其矢を抜んとする處を、渡邊太郎左衛門槍を以て三



澤が脇腹を突き、三澤も透かさず渡邊が左の股を突合ひて、一同に倒れたる處に、有地美作下合ひて終に三澤を討取り、首を下人に持たせ、渡邊を肩に引掛け、連退きたりと云々。

### 三〇 吉川興經等陣を宮崎に寄せらるゝ事

吉川治部少輔興經・高尾豊前守久友・黒正神兵衛尉久澄評議せられけるは、此程數箇度の合戦味方終に利なき事、元就が武略傑出したるのみならず、味方大勢を頼みて我身の大事とせず、城兵は小勢故志を同うして身を捨て防戦へば、大勢却て戦ふ毎に利を失へり。我々三人宮崎へ陣を寄するに於ては、城兵此程の勝軍に慣うて切崩さんとして駆出づべし。平場に於て戦はばこそ利をも失はん。陣を堅く備へ、柵の木を隔て散々に射させ、此時敵柵を破らんとして懸り來らば、手負・死人多く出來すべし。其費に乗じて我々志を一致にして切て出づるに於ては、突崩さざる事有るべからずと評議決定して、此旨晴久へも云はれければ、民部大輔兎も角も望に任すべし。

併し先陣をば晴久旗本の武士に申付くべしと云はれ、先陣高尾豊前守・二陣黒正神兵衛尉、其次吉川治部少輔と定めらる。是は城中より定て宮崎へ切懸かるべし、其時本陣の勢を出して挟で戦ふに於ては利有るべし。然らば此程數度の負軍の嘲哂をも塞ぐべしとの事なりと聞ゆ。依之十月十三日、吉川・高尾・黒正、宮崎へ陣を移さる。

### 三一 大内勢吉田後詰の事

尼子晴久數萬騎を率して藝州吉田の城を取圍むの由、備後・安藝の大内味方の中より、防州山口へ頻しきりに注進しければ、大内太宰大貳義隆・家臣陶尾張守隆房・杉伯耆守重政〔頭書〕一本に重政とあり。・内藤下野守興盛を大將として、防・長・豊・筑の勢二萬餘人を附けて、吉田の城の後詰として藝州へ差上せらる。十一月廿六日山口を發して、十二月三日吉田郡山の巽山たつみ田山中に陣を取る。依つて元就、國司助六・粟屋太郎左衛門・井上新三郎を使として、陶・杉・内藤が陣へ遣して謝詞を述べらる。陶尾張守よりは柿並佐渡を使とし、杉・内藤よりも使相添ひて、山口より援兵として發向の由言送る。扱



年内は寒氣甚しければ、春に至つて戦ふべしと詮議して、翌年天文十年正月十一日、防州の三將天神山へ陣替す。同十二日元就、兒玉三郎右衛門尉を以て、明日宮崎に陣取りたる高尾、黒正・吉川を切崩すべし。此時若し尼子本陣より扶け來る事有るべき間、彼を押へて給はるべき由三將へ言送らる。此時軍評定の爲とて、陶よりは末富志摩守・杉・内藤よりも一人充使を差越したり。元就満願寺に於て三使に對面して、暫く軍談し返さる。翌十三日卯の刻、元就三千餘を城外へ備へ、自は床几に腰を掛け敵軍を見やりて居らる。〔頭書〕此時元就は鎧をば著す、かば色の小袖を著して床几に腰掛けて居られしとなり。此日陶より末富志摩守戰場見合せの爲め打廻りけるが、吉田勢打出でたるを見て、急ぎ走り歸る。元就の二男少輔次郎元春、今年十二歳なるが、共に打出でんとせらる。元就見て、次郎を具して歸れと云はれければ、井上河内守則ち抱へて内へ入れば、元春怒つて、既に井上を拔討ひきにせんとせらるれば、河内守力なく逃隠れぬ。元春其隙に走り出で元就に向ひ、是非召具せらるべき旨云はるれば、元就笑ひて打連れ出でらる。城兵三千に過ぎざれば、女童迄堀際へ出し、竹木の枝に金銀の扇子・紙くなど括り附けて持た

せ置かる。高尾豊前守は城兵向ふと見て、二千餘騎柵際に到つて待懸くる。吉田勢頓て攻近付き、柵を破つて切入る。高尾防ぎ戦ふと雖も終に叶はず、左右の谷へ崩れ引き、二陣の黒正神兵衛尉、一千五百餘にて駈合せ迫合ふ。此時、陶・杉・内藤二萬餘の勢を三段に分ち、晴久の本陣へ懸かるべしとて、青三猪山へ押寄する。尼子下野守今日の戦ひ大事之に過ぎず、各一手際なきに於ては、晴久の歸城難からんと雖も、誰有つて抽ひきでたる義勢にも及ばざれば、尼子比丘尼びくに今日一命を抛つて、日來各の嘲に報すべしとて、手勢五百計りにて青三猪之坂へ駈出づる。此下野守は思慮ある侍にて、戦を深く慎み、危き働きをせざる故、尼子家の侍共、尼子比丘尼と私に呼びけるが、常は怒る色もなし。夫れ故に、此度斯く惡口を云ひたるなり。扱下野守馳出づるを見て、河添美作守・太田豊前守以下二三百人打ち續き、陶が先手深野平左衛門・宮川善左衛門・末富志摩守が二千餘の勢と、入り亂れ終日戦ふ處に、深野・宮川討死し、末富は深手負ひ、下人に助けられ味方の陣に入りぬ。此時元就の家人中原善左衛門は、防州勢働き見合の爲め宮崎より來り、陶が手に加はりて有りしが、大雁侯



を尼子下野守が眉の外はづれに射込み、馬より落つる處を走寄り、首を取らんとする處に、同朋一人、首を取らせじと進み懸るを、中原一刀に討捨つる。其隙に下野守が死骸を若黨共肩に掛けて、味方の陣へ逃入りたり。夫故中原は同朋の首計り取つて打入りぬ。漸く日薄暮に及ぶに依つて、兩陣相引に引分けける。尼子方には下野守を元討死はじめ四百餘人手負は數知れず。防州勢は陶が手に、深野宮川を始め三百卅餘人、杉が家人六十餘、内藤が陣に八十餘人、都合五百四十餘人討死し、其外手負又多し。儲宮崎には元就・高尾・黒正が陣を破りて、吉川興經の陣へ討つて懸からる。興經は勝れたる精兵の手強にて、多くの敵を射拂はれけるに、毛利勢手負・死人多く出來て進み兼ねたる處へ、興經一千餘騎にて突懸り戦はる。吉川勢境朝枝・森脇分捕す。勝負何れとも付かざる中、漸々暮深く成るに依つて、兩陣互に相引にす。此時敵味方の討死互角にして、此日元就の手へ首都合五百七十餘討取りけるを、一所に築籠められたり。相合の首塚是なり。

〔頭書〕或書に云く、其頸三猪山の嶺に一所に築込み、一七日佛事供養營ませらる。

頸塚今に有りと云々。

〔頭書〕或家古き覺書に曰く、此時晴久も一族家老を集めて、軍の誕を云付け、備を立て敵を待つ。然れ共敵無二に懸來るを見て、何も此に臆したる様に見ゆ。其時下野守、今日こそ日頃武邊せらるゝ衆の、一手際仕らるゝ所なりと云ふ。然れ共誰にても返答する者もなき處に、下野守今日は尼子比丘尼討死仕らずば、晴久口穩に開口は成るまじ。臆病比丘尼罷通るなり。御免有るべしと云ひてすと立ち、緋緘の鎧に赤き手拭にて鉢巻して居られたるが、甲を取つて打著、三猪口へ向はる。此刻黒正ははや切崩され遁れ難き故、鹿角の立物を抜いて捨て、笠印をも取捨て、味方の首一つ提げ、元就の旗本へ不圖馳行き、實檢に備へて陶が勢へ紛入りたり。吉川興經一陣崩れたるにも臆せず、前に芝土手高く築き柵結廻し、突出づる口二所明け、左右の角に矢倉を上げ、一方には精兵を選び置き、一方には自身大弓を持ちて待懸けらる。吉田勢戦破るゝといへ口、頻〔どしどし〕に懸るべしと下知せらるゝに依つて、吉川陣へ押寄せ矢軍す。赤川左京山縣彌三郎など先に進み、槍を入れ



枝折戸を破り押入るを、興經散々に射立てらるれば、手負死人多く、少し進み兼ねたる處を、新庄勢八百計り突出し柵外へ追出す。吉田勢桂元澄、井上の精兵散々に射て取つて返し、柵内へ追入る。興經又大弓にて射立て追出せと下知せられ、難なく追出す。元就に頻に切入れと下知せられ、又柵際迄押入る。然れ共草臥れたる故内へ切入る事は成らず、其時元就爰を引いて一息入れよと下知せられ、各七八段引退き息を繼ぎ、日暮れたる故打入りたり。宮崎合戦半ば大内勢三猪鼻山八分攻登り、末富志摩、銀の四手を竹に付け腰に指し、眞先に進む。尼子下野諸勢を下知し突懸け暫く戦ひ、終に敵を追立つる。大内勢山下の川を渡り、三日市迄引退く處に、末富一番に取つて返し、又山八分迄攻登る。下野守又突懸からる。本田豊前・河添美作・立原備前槍を〔合カ〕口せ、無〔憤カ〕比類働なり。黒〔正カ〕口は敵の中に紛れ居たるが、河添美作守と名乗るを聞き、口〔憤カ〕り槍を打除け入らんとす。河添敵なりと思ひ、黒正が頬當をしたゝか突きたり。其時黒正神兵衛なりと云へば、美作口を引取り命を助けたりと云々。尼子下野討死すと雖も、尼子勢かさより下懸る故、大内勢又

戦負け、山下の小川を越え引退く。此度は尼子勢も長追せず、坂中より引取る。陶今一度懸るべしと云ふと雖も、野口加賀など異見して勢を打入れたりと云々。頸塚の事今も三猪山の嶺に小高き所、麓より口所の者此を頸塚なりと云傳ふなり。

### 三三二 尼子晴久敗軍の事

尼子方より似せ山伏共を周防の物聞に置かるゝ處に、晴久の陣に來りて、大内義隆數萬騎を率ゐて防府に著陣し、青景・弘中・右田・門田等〔問カ〕は、既に防州岩國迄到著するの由を告げたり。是に依つて晴久家臣等を集め、元就城を堅固に保つて、落城の期いつ有るべしとも見えざる處に、陶等大軍にて後詰し、其上に又義隆自ら數萬騎にて援來るに於ては、味方の危亡此時ならん間、一先づ開陣して、重ねて折を得て又發向すべしとて、其趣を吉川興經の陣宮崎へも送り、處々に捨すて箒かき燒き續けて、潜かに北池田・あすな・津賀邊へ引取らるれば、吉川興經も新庄へ歸城せらる。城よりの物見共尼子敗軍の旨告ぐると雖も、殊の外大雪にて、夜中に跡を慕ふ事も成り難くし



て、吉田勢夜明方に城を出でて追行く。高尾豊前守五百騎にて、殿しけるに追付き  
て切つて懸かる。豊前守は夜中に引かば退得べきに、宮崎に於て一番に陣を破ら  
れし事を無念に思ひ、態と立留りて慕ひ來る敵を待受け、三度迄吉田勢を突立て、  
三百餘人終に一人も残らず討死したり。其隙に雲州勢手負を扶けて、下部に至る  
迄都賀へ引退きけり。此所に二三日逗留して敗軍を集め、其後雲州富田へ歸城せ  
らる。晴久開陣の節、能々周章てられしと覺えて、深野宮川が首をかなかけに居る  
て陣所の縁に置き、尼子下野守が頸をば、首桶に入れて床の上に置き、頸を隠す事  
もなく打捨て歸らる。佐東の金山に籠め置かれし武田刑部少輔信實・牛尾遠江守方  
へも、晴久より今宵吉田を引掃ふ由告げやられしかば、則ち其夜城を明去りけり。  
熊谷伊豆守信直・香川左衛門尉光景は、金山の押へとして三入八木の城に置かれた  
るが、武田・牛尾等金山を引拂ふ由聞きて、各、城を出づると雖も、敵早く引きける  
故頓て引返し、武田が家人城にや籠る、落ちやすべきと、漂ふ者共を三十餘人討取  
りぬ。

三三三 藝州佐東金山并廿日市櫻尾落城の事

其後元就、防州の三將の陣に赴き、此度運を開きし事、偏に大内家扶助の故なりと、  
謝辭を述べらるれば、陶以下は元就大敵を引受け、數度の戦に利を得られし故、尼  
子叶はず敗軍す。元就の功に依つて、我等迄出張の規模有りと云へり。斯くて各、此  
次に當國に留まり居る敵を討亡すべしと評議して、元就は佐東の金山の城へ向は  
れ、陶・杉内藤は嚴島の神主佐伯興藤が五百餘人にて籠りたる、廿日市の櫻尾の城へ  
向ふ。金山の城をば武田・牛尾明退くと雖も、其跡に武田家の栗屋太郎兵衛・板垣三郎  
太郎・山中十郎太郎・青木太郎左衛門・内藤彌四郎・一條九郎次郎・大乃美彦三郎・細野  
原次郎左衛門・井尻與三已下、三百餘人残り居たり。元就は宍戸隆家を伴ひて、金山の  
麓へ押寄せらるゝ處に、城兵宍戸が手へ突いて出で稠しく防ぎ戦ふ。宍戸が家人庄  
原孫次郎神代内藏丞・木原源三兵衛・山懸左馬助・佐々部宗左衛門等槍を合せ、比類  
無く働き討死す。其外の手負・死人已上四十餘人、尤も城兵にも討死多し。其後已斐



藝州過半  
大内の有  
となる

豊後守・香川左衛門尉謀りて扱あつかひを入れけるに、栗屋・板垣以下は皆其旨に任せぬ。其中に内藤彌四郎曾て同心せず、古主元繁・光和の畫像を掛け、焼香三拜して切腹したり。残る者共何れも降参しければ、下城させて金山の麓伴と云ふ所に宥め置かる。然るに井尻與三・毛利方の様子方便事たばかりと見切り、各言合せ、栗屋・板垣・青木・大乃美・細野原・山中以下伴の屋敷に取籠る。之に依つて元就討手として、宍戸隆家・熊谷信直・香川左衛門尉・已斐豊後守・飯田・山田等を向はしめらる。井尻與三をば宍戸が郎黨末兼彌四郎討捕り、其外深瀬式部・佐々部兵部江田市助・中所少輔四郎等分捕りす。栗屋・一條・板垣をば熊谷が手、其外佐東郡の者共討果した、山中十郎太郎・青木太郎左衛門は落失せぬ。櫻尾の城をば陶・杉・内藤多勢を以て圍む處に、四月五日城中の者共、城主佐伯式部大輔父子を討つて出し、一命を乞ふと雖も、陶隆房一人も助けず悉く殺したり。是より後藝州過半大内家に屬す。

〔頭書〕或書曰、武田信實死後一子有り。家人携へて武田家相續の事を願はん爲め、京都へ上ると雖も、其頃京都も兵亂にて公方家への訴訟も相成らず、牢浪の身と

終に成られけるが、其後本願寺顯如上人を頼み、彼弟子と出家ならせられ、年月を送られしが、後年輝元へ詫言して廣島へ下り、彼地に於て寺地を申請け、一寺を建て居住せられたり。今の佛護寺是也云々。或説信實子刑部信貞と云ふ有り、出家せし人此なる歟云々。

藝侯三家誌 卷一終



藝侯三家誌 卷二

一 大内義隆雲州發向の事

尼子晴久吉田表敗軍の後、備・藝・雲・石に於て、尼子旗下の國士宮若狹守〔頭書〕宮若狹守父祖下野守若狹守、將軍義政近仕の内官なり。細川勝元被官共、意を敵陣に寄せ、阿黨を企つるの由之を訴へ、幕下退去の輩十二人の内なり。三吉修理亮・山内新左衛門・高野山入道久意・福屋式部大輔隆包・三澤三郎左衛門爲清・三刀屋彈正左衛門久扶・本庄越中守常光・宍道遠江守正隆・河津民部左衛門久忠・古志清左衛門尉・出羽主膳正・吉川治部少輔興經等一味同心して、陶尾張守隆房迄、義隆雲州出馬あるに於ては、各、旗下に屬して、馳走すべき由云送る。其外山名小笠原・廣田・櫻井・富永久代・江田・池上・木梨岡本・羽根等よりも、同じ趣申越すに依つて、義隆諸臣を集め、此事を衆議せらる。相良遠江守武任、雲州出張の不利を擧げて諫止すと雖も、陶尾張守、頻りに

大内義隆  
出雲赤穴  
城攻の爲  
め進軍

之を勸めなして、終に雲州發向に評議決定す。茲に因つて天文十一年正月十一日、大内左京大夫義隆、領國の勢を率ゐて、防州山口を立ちて、雲州に向はる。相従ふ人々は、氷上太郎高弘・陶尾張守隆房・同安房守・杉伯耆守重政・内藤下野守興盛・同彈正忠隆世・杉入道宗參・同民部大輔・同豊後守・同次郎左衛門尉・同勘解由判官・同治部大輔・同十郎冷泉判官隆豊・右田左馬助・弘中參河守・同中務少輔・仁保右衛門大夫・青景越後守・三浦將監・毛利與三・黒川近江守・岡部右衛門尉・清四郎・問田掃部助・同紀伊守・同丹後守・豊田美濃守・狩野入道・弘中左衛門大夫・江良彈正忠・鷺津朝倉・梶森町野・神代・桑原已下三萬餘騎、安藝の國府に著陣すれば、宍戸安藝守〔頭書〕宍戸雅樂頭元深事歟。八田知家末裔。知家は源義朝の子、八田權頭宗綱家を繼ぎ八田と號す。後宍戸四郎左衛門と改む。毛利右馬頭元就・同備中守隆元・平賀太郎左衛門隆宗・吉川治部少輔興經・小早川又太郎正平・熊谷伊豆守信直・同平三直續・香川左衛門尉光景・山縣上總介光頼〔頭書〕今田上野介經高養父なり。吉川元經の婿、藝州山縣郡今田城主。同筑後守〔頭書〕山縣小鐵親歟。後の筑前守直綱子にして、四郎右衛門春實父なり。諱は元光といふ。飯田越中守・野間刑部大輔隆實・天野紀伊守・已斐豊後守・新里式部大輔・宮若狹守・同左衛門大夫・三吉修理亮・山名宮内大輔忠興・木梨治部大輔・高野山入



道・久代修理亮吉原藤左衛門尉・山内新左衛門尉・佐々木新右衛門尉・池上佐渡守・多治目藏人・志賀太郎兵衛尉など相加はる。三月上旬、石州出羽の二山へ軍を移さるれば、益田越中守藤包・福屋式部大輔隆包・佐波常陸介隆秀・小笠原彌次郎長雄・同彈正忠長徳・本庄越中守・羽根彈正・都野駿河守・岡本大藏・久利清六兵衛・同左馬助・吉川和泉守・都治參河守・出羽主膳正・周布河上の一族など馳集りて、其勢雲霞の如し。杉入道宗參、都賀の渡に舟橋を架けしかば、總軍河を越え其所に陣取りて、夫より雲州赤穴の城を攻めんとす。

〔頭書〕筑前―筑後―四郎右衛門

市右衛門

半右衛門

嘉兵衛

四郎右衛門

四郎右衛門

市右衛門―長右衛門―仁左衛門

〔頭書〕小早川家

景平

萬壽冠者  
土肥次郎三男、小早川二郎。一説惟平子遠平孫云々。又一説實源義信子云々。

茂平

美作守

政平

三郎

朝平

太郎左衛門

宣平

安藝守

貞平

讃岐守

春平

左近將監

熙平

備後守

敬平

美作守

扶平

掃部頭

興平

掃部頭

正平

又太郎

## 二 熊谷平三討死 赤穴城明渡す事

赤穴城合戦

赤穴の城は、赤穴右京亮が居城なり。富田より、田中三郎左衛門を加勢として、差籠められ之を守る。味方の衆議、未だ決せざる所に、熊谷平三直續〔頭書〕熊谷平三直續は、熊谷次郎三郎元直二男にして、伊豆守信直弟なり。拔駈して、六月七日、手勢二百餘にて、赤穴の城へ押寄せ、城下の在家を放火す。城より足輕を出して取結び、矢軍する隙に、赤穴右京亮田中三郎左衛門尉、一千餘にて打出で、熊谷が後を塞いで討留めんとす。直續一方を打破りて、五六町引退くと雖も、城兵所々に散つて矢を放てば、熊谷とても遁れぬ所と思ひ、五十餘人を従へて、左の方に、赤穴右京亮五百計りにて控へたる中へ駈入り、赤穴が先勢を追退くる。此時手の者半討たれ、二十餘人になりて、赤穴・田中が勢に駈入

熊谷平三討死附赤穴城明渡の事



熊谷直續討死

赤穴城を明渡す

り戦ふ程に、平三直續荒川與三主從二騎に討ちなされ、敵數多切捨つると雖も、大勢に取籠められ、終に敵と刺違へて討死す。同七月十八日、毛利元就父子先陣として、都賀の渡の東の地へ打越え、軍評定之ある處に、相良遠江守と陶尾張守異論ありしが、陶終に申勝ち、〔頭書〕七月十九日、此處に於て陶・内藤其外國侍・侍大將、赤穴の城攻むべきや否の儀評定ありて、殘し置きては後日の妨になるべしとて、攻むべきに決す。同廿三日より、各攻口を請取り、仕寄を付けて攻め近付く。廿七日總勢四萬餘、鯨波を揚げ、一度に押懸る。赤穴右京亮少しも臆せず、一千餘を率ゐ、眞先に進み、卯の刻より午の上刻迄、數個度迫合ふ程に、寄手、手負、死人千餘人に及び、さして仕出したる事もなく、日既に暮れしに依つて、寄手、都賀迄引退き、手負共を養育して、重ねて寄すべしと議する處に、其夜田中三郎右衛門詮言して、赤穴が妻子を助け、城を明渡して、雲州へ引取りたり。

〔頭書〕廿七日の合戦に、吉川興經は、陶隆房・平賀隆宗一手として、大手の門へ向はれけるが、赤穴突出で手強く防ぐ故、總勢引取るなり。興經は攻口に堪へたる所に、赤穴又城兵を盡して、二千計りにて突出で、數刻相戦ひ、互に勝負なく、相

引に打入りぬ。陶が家人末富志摩討死、手負數百人、吉川・平賀の手にも、手負死人數多之あり。

此事後に聞けば、赤穴右京亮、陶が手にて喉を射られ、城中に退き、頓て死したる故と聞ゆ。同廿九日、義隆、油木へ陣を移さるれば、三澤三郎左衛門爲清・三刀屋彈正左衛門久扶・宍道遠江守正隆・河津民部左衛門久忠・多賀左京亮・廣田・櫻井、此外南條豊後守・行松入道等馳せ加はる。〔頭書〕三澤・三刀屋已下、田子兵庫助取次に、義隆へ目見す。此處にて九月中逗留せられ、手負共を養生し、十月中旬、三刀屋が峯へ陣を替へ、十一月上旬、義隆は高津馬潟の正久寺に本陣を居ゑらるれば、陶・杉・内藤已下の大内旗本勢は、をんば神魂・あにか出雲郷に陣を取る。毛利元就は、白潟に、熊谷伊豆守・三須筑前守等は八重垣に、吉川治部少輔興經は、平原に陣を居ゑて越年せらる。

### 三 富田菅谷の蓮池合戦の事

天文十二年正月二十日、義隆、宍道のうねち山へ軍を移し、諸將を集めて、きやうら



ぎ山近く陣を寄すべき由、陶隆房を以て命せらる。各其旨に隨はるゝ處に、毛利元就此所に控へらるれば、伯州口よりは、南條行松等攻寄せ、其外所々より押詰めて、諸方の通路を差塞ぎ、敵の心を屈せしめば、城兵勇氣弛みて、拔落つる者共も少しはあるべし。城に籠る所の兵、一萬五六千と聞ゆ。縦ひ小勢にて籠城すといふとも、當城は名に觸れる要害にて、城其十倍の人數にても、力攻にせん事、輒かるまじ。然るに大方互角の勢にて攻破らん事、味方却つて危からん間、今少し猶豫ありて、所々に向ひ、城など構へ、敵の様體を試みらるべき由、いはるゝと雖も、田子兵庫頭、是程迄詰寄せて、恐るべき事にあらず。唯速に押詰め、富田の在家を燒拂ひ、諸所の通路を塞ぐに於ては、城兵堪へ兼ね、落城一兩日の間を出づまじ。急ぎさやうらぎ山へ陣を寄せらるべき旨いへば、陶尾張守、元來勇氣に奢る故、田子が言に同意す。是に依つて義隆も其旨に任せて、同二月十二日、さやうらぎ山に陣を移さる。陶隆房は、經塚に陣を居る。田子兵庫助は、出雲の國人三澤・三刀屋・多賀・宍道已下を率ゐて、富田の八幡山に陣を取る。斯て同十三日より足輕追合始まりて、三月

上旬迄、所々に於て矢軍のみありて、さのみ手詰の勝負はなし。同十四日、元就の手の者と、内藤下野家が家人と一手になり、五百計りにて、菅谷口の蓮池の繩手へ働く處に、城中より牛尾遠江守・河添美作守、一千餘にて打出で相戦ふ。城兵一人深手負ひ、繩手に倒れ居たるを、内藤が郎黨馬田孫七、其首を取る。是れ今日の一つ首にして、此度大内當國發向合戦の一番頸なり。

〔頭書〕異書に曰く、山口勢、雲州時地といふ所に著きて、評定の上、夫より富田の向經來木といふ山へ、陣を寄せらるべきとの事なる所に、元就宣ひけるは、尼子家近年、武威少し衰へたりと雖も、未だ數個國を領し、近國の武士、大半旗下に屬し、其外家中の諸士に至る迄、經久以來、代々の武備に慣れて、武邊剛者の侍共、多勢楯籠り候へば、味方卒爾の働ありては、却て越度あるべし。然れば城を急に攻拔かれんとの結構、勝敗甚だ計り難きか。富田より四五里も隔て陣を居ゑられ、諸所へ勢を分け置きて、近國より兵糧運送の通路を差塞ぎ、防州の通路には、傳つなの城々を構へ、人數を籠め置き、兵糧を運送せしめ、長々在陣の覺悟に



て、連々奇計を設けて、攻惱まざるれば、敵は次第に弱り、必ず落城の功を立てられんこそ、味方必勝の謀なるべけれど、再三意見を加へられしかども、義隆の寵士に田子兵庫助、或は豊後、經來木山、地の利、全く彼處に陣を居ゑらるれば、假令城中より敵打出で、突懸るといふとも、危き事なく、城下の在家を放火して、取巻きで攻むるに於ては、他所より兵糧を運送するとも、城内へ取入るゝこと叶ふまじければ、城中堪へ難く、落城速なるべし。さのみ敵を、奥深く恐るゝ様に計らはれんは、却て味方の勇氣を摧く端ともなるべしと、頻りに申すに依つて、終に義隆、彼山へ陣を寄せられけると云々。

#### 四 金尾の洞光寺合戦の事

三月下旬、平賀太郎左衛門尉高宗、益田越中守藤包、金尾の洞光寺へ相働く。此寺は晴久の曾祖父刑部少輔一説中務少輔、清定一説清久の菩提所なる故、敵若し放火する事もあるべしとて、尼子式部大輔・同左衛門大夫、二千計りにて打出で、射手を進め、散々に射さ

洞光寺合戦

せ、敵少し疼む所を、圍を作りて駈立つる。先に進みたる益田が手の者二人、馬より射落さる。兎角する處に、平賀太郎左衛門高宗、籠手鎖に至る迄、黄金にしたる具足を著し、冑の立物にも、黄金の五本立の櫻欄の葉を打つたるを被り、五百餘の勢を杉すぎに備へ、多勢の中へ一文字に懸り、命を限りに攻戦ふ。益田越中守も續いて懸る。然れども味方無勢なれば、押立てられぬべく見ゆる處に、吉川治部少輔興隆八百餘騎にて、敵の真中へ横合に駈入れらるれば、新宮黨忽ち突立てられ、崩れ退きたり。之に依つて大内義隆、黒川近江守を以て、今日味方大利を失はんとするの刻、興隆横入を以て、平賀高宗が必死の難を救はれ、敵を立所に追退けらるゝ條、尤も勇猛比類なき由、再三之感せらる。

#### 五 富田河合戦の事

大内義隆使を以て、毛利元就へいはれけるは、田子兵庫助、今度味方に屬したる備藝雲、石の國人を相具し、八幡山に陣取りたり。城より程近き間、敵定めて彼陣へ押



懸るべし。元就加勢として馳向はれ、彼の敵を押へらるべき由命せらる。之に依つて元就、一千餘騎を率ゐて、八幡山の宮ノ尾へ陣を寄せらる。爰に富田河の向に、河本彌兵衛尉が明退きたる館あるに、元就より南方出羽守・秋山信濃守已下を三百餘人、籠め置かるゝ處に、折しも霖雨打續き、富田河水増して渡瀬見えす。此時を幸に、富田勢大西十兵衛尉・本田豊前守・立原備前守已下二千餘人、歩立かちたちにて彼館へ押懸る。南方秋山、槍を取つて突立て、稠しく防戦す。元就宮ノ尾より此由を見、七百餘騎にて之を援けんとして、川端迄打臨まるゝ處に、田子兵庫助只一騎馳せ來りて、是程の早川の水増したるに、いかで渡さるべき。只向の味方をば、其儘にて捨てらるべきといへば、元就如何に此河渡し難しとて、纔か川一つ隔てたる味方を、目の前に於て見殺にはなし難し。宇治・瀬田ととも、渡せばこそ渡しけめとて、一番に馬を乗入れらるれば、七百餘人の兵、悉く打入りて、難なく向の岸へ渡り著く。敵之を見て、勢を引分け一千餘人、元就の勢に打つて懸ると雖も、河を渡りたる勢に、無二に突いて懸る間、富田勢、忽ち突立てられ、左右へ散つて引退く。富田城中

富田河の合戦

より之を見て、槍長刀を提げく討つて出づ。寄手の陣よりも、百騎二百騎河を渡して、元就を助け來る。是に力を得、毛利勢進んで攻め戦ふ。此場相、城と寄手の陣より、目の下に直下す所みぞろなれば、敵味方の強弱揭焉として、働晴はれなる合戦なり。第三度の迫合に、富田勢五六町程突崩さる。寄方北にやるを追うて進めば、元就之を制して、後陣に多く支へたる敵、押返す事もあるべしとて、備を固め槍先を揃へ、待懸けさせらるゝと雖も、敵頓て打入る。是に依つて元就も本陣へ歸らる。

### 六 大内敗軍 周防介溺死の事

八幡山に陣を並べ居たる備・藝・雲・石の國人三澤・三刀屋・宮山・山名・出羽以下十三人、一同に心變し、尼子へ屬すべき由内通す。晴久悦び、相圖の日を指して城中へ入るべき由、許諾せらる。依つて天文十二年四月晦日、兼ての相圖に依つて、城中より牛尾遠江守・卯山飛驒守、千計りにて打出で、富田河を隔て敵を招く。此時三澤三郎右衛門尉爲清、あの敵追拂ふべしとて、其勢千五百餘騎にて駆出で、其間近くなり

三澤爲清等尼子に内通



て、敵味方打連れて城中へ入れば、三刀屋彈正左衛門尉久扶も、又一陣引破りて、城中へ入りたり。是よりして本庄越中守常光・宮若狹守・高野山久意入道・山田・古志・出羽・廣田・櫻井・山名・小笠原・富永久代・池上・江田等、打連れ々城に入りぬ。此時志變せざる者は、毛利平賀・三吉・福屋・熊谷・天野・益田等なり。〔頭書〕國侍心變に依りて、五月朔日、諸陣以の外騒動すと雖も、陶手堅く下知して、翌日より靜まりたり。是に依つて陶尾張守、大内家の老臣を集め、今度國人等心變に依つて、家城に残り居る渠等が一族共、防州の通路を差塞ぎ、糧道を斷つに於ては、軍士饑に及ばん事必せり。先づ今度は當陣を引拂ひ、重ねて九州の味方を催し、發向すべしとて、義隆へ此事を伺ひて、五日七日未の刻、大内父子經來木山を引拂はる。義隆父子は、湯谷より船にて退かる。〔頭書〕義隆の船にも、人取付きたるを、冷泉判官・隆豊・長刀にて切拂ひ、異議なく漕出したリ。陶・杉・内藤は、湯谷迄義隆父子を送りて、重ねて雲州發向の爲なりとて、船には乗らず、其勢三千計りにて、白潟へ廻り引退きたり。周防介義房〔頭書〕周防介義房、或は晴持といへり。の船に、餘りに多く込乗りたるに依つて、船子共猶も乗らんとする者を、櫓楫にて打拂ひ、漕出すと雖も、猶も慕ひ來りて、執付きける程に、船踏返して、義房を始め一人も残ら

義隆敗軍

大内義房溺死

す溺死したり。此周防介義房は、土佐の一條權大納言房家卿の息男にして、義隆姉の腹なるを、三歳の時より大内家の養子として、從五位下に敍せられけるが、今年十一歳になられけると聞ゆ。

〔頭書〕義房或は二十歳。異書に曰く、此時義房は雲州得の浦へ落ち給ふ處に、敵夜に入り、大勢にて押懸ければ、味方の者共周章して、義房既に危き處に、篠山九郎左衛門とて、義隆寵愛の扈從上り、周防介と名乗り、手の者共二三十人、左右に從ひて防戦す。其間に義房落延び、船に乗り給ふと雖も、船踏返し、溺死し給ふ。篠山は暫く防ぎ戦ひ、從兵討死して、遁るべき様なく、今は義房も落延び給ひつらんと思ひければ、自ら太刀を胸に當て、俯伏に倒れ、貫かれて死したり。其後彼浦に祠に祀り、濱の宮と號し、今にありとなり。

毛利元就・同隆元は、宮尾より岩坂口を退るゝ處に、富田勢元就と見て慕ひ來ると雖も、曾て備亂れざる故、切崩すこと能はず。されども案内者共、方々へ散つて前後を遮りける間、毛利勢、數度返し合せ戦ひ、夜に入りたるに、敵猶は後を附け送

毛利元就隆元退軍



る。井上與三右衛門、一槍せんと名乗りて控へたれば、敵敢て近付かず。されども雨頻に降り、行先闇夜なれば、毛利勢引き兼ねたるに氣を得、富田勢、進んで叫び懸る間、内藤九郎左衛門、波多野源兵衛尉、三戸與五郎井上源左衛門等、所々にて返し合せて討死す。赤川左京亮、同又五郎返し合せ、向ふ敵二人切伏せられたれば、續いて敵進み得ず、三戸五郎右衛門、同小三郎も、井上與三右衛門と一所に取つて返し分捕す。其後は敵附送らざれば、元就心安く引退かれ、民家に一夜止宿して、雨に濡れたる甲冑を焙り、兵糧を遣ひ、夜明けて打立たる處に、神魂出雲郷に於て、陶尾張守に行逢ひ、夫より打連れて、由木鰐迄引退かる。其外大内旗下の諸將退口へ、敵附送り、何れも難儀しけり。吉川興經は、國人心變せし時、興經も尼子へ一味すべき由、晴久より内通あるに依つて、大内勢敗軍の一兩日を経て、已後引取られ、新庄へ歸城せらる。〔頭書〕元就は、兼て同國星ヶ上といふ山に陣取り居給ひ、大内勢敗軍の注進を聞き、熊野谷を通り、引取り給ふとあり。

七 小早川又太郎正平〔頭書〕或説に後大學頭といふと云々討死の事

陶尾張守隆房、鰐走の山に一夜陣取りて、箒を燒きて敗軍の兵を集めけるに、此火に付きて、爰こゝ彼より馳集まる。熊谷伊豆守信直、香川左衛門尉光景、三須筑前守房清は、暮程に鷗巢川を越ゆる處に、一揆原、大勢にて追懸くるを切拂ひて、山へ懸りて落行きたり。小早川又太郎正平は、家人眞田大藏丞、萬臺善四郎二人召具されて、是も鷗巢川を渡る處に、一揆頻りに追懸くれば、萬臺善四郎、河中より取つて返し、敵多く切伏せ討死す。敵猶ほ手滋く追懸くる間、眞田大藏丞引返し、敵を左右に受けて暫く戦ひ、大勢に手を負はせ、是も終に討死したり。この隙に正平落ちなば、落ち得べけれども、頼み切つたる家人を眼前に討たせて、命活きて無用と思はれけるにや、頓て引返し、小早川又太郎ぞ、討取つて晴久の賞に預かるべしと呼びて、多勢の中へ無二に切入り、敵數人切捨て、終に其處にて討たれたり。〔頭書〕正平討死五月九日云々。陶尾張守は、石州濱田に於て、義隆を待受け、夫より陶は、陸地を経て山口へ歸り、義隆は長州下關を漕廻り、防州小郡より山口へ歸り入らる。毛利元就は、羽根の満蓮社に四五日逗留せられ、後れたる味方を待たれける處に、彼住僧、數代取傳へたる源

小早川正平討死

義隆山口へ歸陣

小早川又太郎正平討死の事

二九



九郎義經の矢違の守を、元就へ進せらる。之に依つて元就も、重寶共を住僧に附與せられたり。

〔頭書〕異書に曰く、元就は石州羽根の満蓮社迄、落著き給へば、國侍小笠原出羽などより人數を出し、馳走するに依つて、此處に四五日滯留して、人馬を休め給ふ處に、雲州の道口に附置かれたる者より、飛脚二人來りて、何事やらん注進しければ、其夜潜に三戸小三郎・井上與三右衛門・兒玉三郎右衛門・坪井將監・井上與五郎・粟屋與三郎、此五人御供にて、忍び出で給ひ、石州の君谷村と竹村との間の口渡へ、其夜の曙に著き、船に乗らんし給へば、渡守申しけるは、頃日雲州より、敗軍の衆と見及びなば、船を渡し申すまじと、堅き御法度出でたり。然れども何卒御心入の證據もあらば、潜に渡し申すべしと申すに依つて、元就公、此度船渡したる忠節に依つて、高田郡の内笹部村、永代下さるべき由、自筆に書き給はり、船を渡し申すに依つて、後日彼處を永代給はりたりと云々。

〔頭書〕大内雲州敗軍の時、毛利元就も、熊野谷を打通りて、引退かるゝ所に、敵跡を慕ひて、追ひ來るに依つて、内藤九郎左衛門・波多野源兵衛・三戸與五郎・井上源左衛門等、數十人返し合せ、敵數多討取り討死す。三戸小三郎・井上與三右衛門等、終に敵を追拂うて、異議なく石州〔羽福カ〕波根迄、落著き給ふと云々。

### 八 備後國府野鬪の事

尼子晴久、備後へ出張すべしと思ひ立たれ、先づ國人の心を引試みん爲め、尼子紀伊守國久、同式部大輔・同左衛門大夫を大將として、龜井能登守・牛尾遠江守等を先とし、都合七千餘騎、天文十三年七月中旬、備後國へ發向し、先づ三吉を退治すべしとて、城より三里計り隔りたる府野といふ所に陣を居る、國中の士を招きけるに、宮山名を始め、味方多く屬するに依つて、此由富田へ注進す。是に依つて晴久、彌領國の勢を帥る、近日備後へ發向せんとせらる。毛利元就此由を聞かれ、晴久旗本を出さるゝに於ては、定めて多勢なるべし。尼子出張なき中、先づ新宮黨を破るべしとて、福原左近將監・貞俊・兒玉三郎右衛門尉就忠を大將として、粟屋孫次郎・同太郎

尼子晴久  
備後へ出陣



元就尼子  
勢を逆撃す

左衛門・井上彌二郎・福原中務・長屋縫殿允以下一千餘人、同七月廿六日吉田を發し、五里が間なれば、其日三吉に著く。三吉修理亮、則ち福原兒玉を迎へ謝詞を述べ。其後兩人に向ひ、新宮黨の勢七十餘騎と披露すと雖も、實は五千計りもあるべし。明廿八日、彼陣へ懸りて、一戦を遂ぐべき間、吉田勢、後陣を押へて給はるべき旨いへば、兩人加勢として是迄來り、後陣に於て見物はなり難き間、明日の合戦は、兎角吉田勢先駆すべしと言切り、廿七日の夜半に打立ち、翌朝辰の刻、尼子の陣へ間近く押寄せたり。

〔頭書〕吉田勢其夜子の刻計りに、三吉を打立ち、丑の刻計りに、府野の勘の瀬に著く處に、霧深く立籠め、一町の内外は前後見分け難き故、敵陣近く仕寄を附くと雖も、敵曾て見付けず云々。

尼子勢は、吉田より三吉へ加勢ある由聞きて、夜討の用心隙なく、物聞を出し、敵の様子を窺ひ聞くに、吉田勢押寄する由、告知らするに依つて、先陣の牛尾遠江守・平野又右衛門・青砥助・右衛門尉・米原讚岐守等、二千計りにて打つて出でたり。吉田勢

元就の先  
福原兒  
玉敗る

福原兒玉、先を争ふ心深く大に逸る。然れども所は不案内なり、折節川霧立重り、渡瀬を知らず、爰彼と徘徊して備亂れたる所へ、尼子勢朝霧の紛れに近々と馳寄せ、散々に射たり。福原兒玉、少しも疼まず攻め戦ふと雖も、敵は多勢にして、備堅固なり。味方は少勢なる上、備亂れし故、忽ち押立てられ、十四五町計り引退く。福原兒玉も深手を負ひ、其外の者、疵を蒙らぬはなし。福原兒玉之を憤りて、今一度引返し、只討死すべきと勇みけるを、粟屋孫次郎・井上彌次郎・福原中務・粟屋太郎左衛門・長屋縫殿允等詮議して、就忠・貞俊深手負はれぬれば、如何に思はるゝとも叶ふべからず。我等討死して、兩人の大將を助くべしと相議して、若者共に此由を竊に傳へて、肩に引掛けさせ、江の河を渡して引退かせたり。

〔書頭〕福原兒玉手負ひ、味方肩に掛け引退かんとす。兩人いふ、我等深手負ひ、とても遁るべきにあらず、潔く討死すべし。敵中へ投入るべしといふ。粟屋・井上等、兎角いひて引退く。其後粟屋以下の者、今一軍せんす。然る處へ福原内、手城十郎左衛門といふ者來りて、貞俊が人數をば、某手に付け下知仕るなり。敵を



待受けて一戦あるべきや、懸つて勝負を決せらるべきか。兎も角も安否を共にすべしといふ。粟屋いふ、其方覺悟神妙なり。川霧晴るれば、味方多少を見透かれん、懸つて敵を破るべしといひて、既に突懸らんとす。三吉を以て各軍口虫入に及ばん、暫く人馬口休めらるれば、入替らんといふ。各、いふ、我等が戦叶はず、引退かん口期虫入に臨まば、入替りて追拂はるべし。夫迄は先づ各、粉骨を盡し、防戦を遂げたき口返答したりと云々。

其後にて粟屋・井上以下、尼子勢の真中へ無二に突き懸つて、敵多く討取ると雖も、今朝の合戦に手負多く、殊に小勢なる故、終に叶はず。粟屋孫次郎・同太郎左衛門・井上彌次郎・福原中務・長屋縫殿允・庄十郎左衛門〔頭書〕私曰、本文に庄十郎左衛門といふ者を載す。此者異書に之あり、手城といふ者のことか。を元め、究竟の兵百餘人討死して、本の陣へ引退きたり。三吉修理亮廣隆は、福原・兒玉疵を蒙り、其外の軍士、死を一途にして馳向ひたる由を聞き、兩人兼ねて某と牒し合せて合戦あるに於ては、今朝の軍にも、左程不覺はあるまじき所に、兩侍大將、今度如何なる事にか、先を駆けんとのみ思入りて、大に逸り仕損じたりとて、五

百計りにて馳著きたり。尼子式部大輔兄弟、兩度の軍に勝ちて、首共實檢し、諸卒も息を休め、酒茶を飲み居たる所へ、三吉廣隆味方を勇め、真先に進んで駆入れば、敵油斷の折柄なれば、俄に周章ふためく程に、終に一合も戦ひ得ず、新宮黨の強將も雜人に引立てられ、力なく退きたり。之を見て池上・上里・森光・矢田・國富吉原等、三吉に心を合せ、引く敵を二三里計り追駆けて、尼子家の侍里田與次郎を元め、數百人討取りたり。

### 九 元春隆景他家相續の事

天文十六年、吉川治部少輔興經、後嗣なきに依りて、毛利元就の二男少輔次郎元春、母方に付きて興經と從弟なる故、元就に乞うて猶子とせらる。〔頭書〕興經公三十歳。元春十八歳。〔頭書〕元就室は吉川國經の娘にして、興經の伯母なり。吉川元經の口毛利弘元の娘にして元就の妹。翌年天文十七年三月、元春、新庄の小倉山へ入城せらる。興經は、去年元春と親子の契盟をなしてより、布川に居住せられけるが、入城祝儀の爲に、小倉山へ越して、當家の什物重寶共を、元春へ譲り授けら

吉川興經  
元春を猶  
子とす



る。今歳元春の嫡子元長誕生せらる。母は熊谷伊豆守信直の娘なり。是より先、元就、家臣兒玉三郎右衛門尉を呼びて、元春未だ妻室なし、誰某が娘を娶るべきか。元春が心を問ふべき旨命せらる。兒玉則ち此由を元春に語れば、元春いはれけるは、唯元就の命の儘に従ふべし。さり乍ら我に選べとならば、熊谷伊豆守信直が娘なるべきかといはる。兒玉聞きて、熊谷が娘は、悪女と承り及びぬ。若し聞誤りて、貌美しと思はるゝにやといひければ、元春、我も醜しと聞及べり。然れども今中國に、熊谷信直に勝れたる侍大將なし。我れ彼と親しくなるに於ては、信直彌、元就に對し、忠志を抽づべし。彼と我、元就の先陣にありて謀戰を勵むに於ては、如何なる強敵堅陣、之を破るに難き事なからん。元就に對しては、孝とやいはん。我身に於ては、武功を顯す謀ともなるべしといはれければ、兒玉三郎右衛門、此詞を感じ、則ち元就へ爾々の旨演説しなければ、元就喜びて、終に熊谷が嫡女を、元春の爲に娶られしとなり。又元就の三男又四郎隆景は、備後の竹原の家を相續ありし處に、小早川又太郎正平討死の後、嫡子又鶴丸元緒、未だ幼稚にして、而も三年

元春熊谷  
信直の女  
を娶る

以來盲目となられければ、家臣僉議して、隆景を申請け、正平の嫡女と婚姻をなさしむ。

〔頭書〕又鶴丸元緒、或說繁平虫入云、盲目故、後元緒といひて、教真寺に在住。法名

一林院文室元緒居士。母は毛利興元の娘、幸松丸の姉なり。隆景初竹原を繼ぎ虫入

□□居城藝州豊□□沼田庄高山城主なり。一書曰、正平□□は、豊田郡沼田□新虫入

高其娘を嫁す□□□□□□城は古高山として□□隔て近所に之あり、並べて立ち虫入

た□□なりと云々。

元來竹原も小早川の一家なる故、隆景兩家を合領して、小早川の家名を嗣がる。

其後大内義隆の吹擧を以て、公方より、隆房に屋形號を許し給ふ。

〔頭書〕小早川家に移る。之に依つて竹原の娘を離縁して、正平の娘に嫁す。先

妻竹原の娘は、天野木工助に嫁す。木工助は天野隆重が二男なり。

〔同〕小早川家代々藝州豊田郡沼田庄高山城主。

〔同〕正平、天文十二年五月九日、雲州飛鳥巢河（嶋カ）に於て戰死。法名天秀祖祐。隆景



天文二癸巳歲誕生。頃年天文十七年、八十六歲歟。慶長二丁酉六月十二日、六十  
五歲、備後三原に於て卒す。

〔同〕態令啓候。去年以來貴所契約之事、御親父・御舍兄へ申談候爲禮儀、御太刀  
一腰・御馬進入候。猶同名伊豆守・森脇和泉守・境雅樂助可申入候。恐々謹言。

二月十一日

興 經

少輔次郎殿御宿所

〔同〕態令啓候<sup>出候カ</sup>、抑爲養子之御禮儀、御太刀一腰・御馬令進覽候。猶同名伊豆守・森

脇和泉守・境雅樂助可得御意候之條、期後喜候。恐々謹言。

吉川治部少

興 經

天文十六丁未二月十一日

毛利右馬頭殿

御宿所

〔同〕態令啓候。去年以來申談候御舍弟少輔次郎殿、爲養子之禮儀、御太刀一腰・  
御馬令進候。猶同名伊豆守・森脇和泉守・境雅樂助可申入候之條、期後慶候。恐  
恐謹言。

二月十一日

興 經

毛利少輔太郎殿

### 一〇 備後國神邊軍の事

天文十七年の夏、大内義隆、備後國神邊の城主山名宮内少輔忠興、尼子方なるに依つ  
て、之を退治せんとて、陶尾張守隆房を大將として、防長の軍士五十餘人差向けら  
る。藝州の味方を催さるゝに、毛利右馬頭元就・同備中守隆元・吉川少輔次郎元春・小  
早川又四郎隆景・宍戸安藝守元深・同雅樂頭隆家・平賀太郎左衛門尉隆宗相加はり、總  
勢八千餘騎、六月二十日、<sup>或説十日</sup>神邊の城を攻圍む。城中より、足輕を數多出して戰  
はしむ。同廿三日、吉川元春手勢六百餘騎にて、城下の在家を放火せらるゝ所へ、  
城中より杉原左衛門大夫、二百餘にて駈出で、吉川勢と迫合ふ。又城主山名宮内少  
輔は、一千餘騎を率ゐて、密に城の後より兵を下し、森の蔭より、一同に突いて出  
で、元春の旗本へ無二無三に切つて懸れば、餘りに手ひどく駈立てられ、吉川勢少

義隆陶隆  
房をして  
山名忠興  
を攻めし  
む



し引色になる處に、元春自ら槍提げて、名乗つて進まなければ、吉川勢又馬を立直して相戦ひたり。此時山名が家臣杉原播磨守盛重、手を負うて少し退くを見て、今田上野介經高・森脇内藏太夫、槍を入れて突立て、二宮彌五郎等、弓にて採立てける間、忠興忍へず、終に城中へ逃入りぬ。其後又、五口餘騎虫(百カ)、城中より打つて出でけるに、宍戸雅樂頭隆家、手勢七百計りにて行合せて挑み戦ひ、宍戸が郎等江田市助と、山名が隨兵長田左京亮・壇上監物槍を合す。其外宍戸が家人中所少輔四郎などと、比類なく相働きたり。其後互に氣屈して、相引に打入りたり。斯くて平賀太郎左衛門尉隆景、年來山名に遺恨ありしに依つて、此城某一人して攻落すべき旨、頻に望みける故、向城を築きて、平賀を籠め置き、諸軍は開陣せられたり。

〔頭書〕御舊記控

六月十八日・同二十日、神邊固屋口に於て、吉川勢手負註文の中

今田孫四郎倅者 足立木工之允 富永助左衛門 相良小四郎 綿又兵衛尉

同 小者 金法 才若

同 中間 三郎五郎

今田孫四郎は、則ち上野介若名なり。此節迄は、未だ孫四郎といふ。本文には後世人の知り易き爲め、後の□□□云々。虫入

### 一一 毛利元就山口下向の事

毛利元就・同隆元・吉川元春・小早川隆景父子四人、大内義隆へ謁見の爲め、天文十七年八月三日、山口へ下向せらる。熊谷伊豆守・香川左衛門尉・飯田越中守・山縣筑後守並に山田が一族羽仁・已斐以下、相隨つて赴く。義隆、賞翫斜ならず。其後熊谷・香川以下をば、早速皆藝州へ差戻され、元就父子四人は、山口に逗留せらる。義隆、内藤下野守興盛が娘〔頭書〕一説内藤隆春の娘と云々を猶子として、隆元に嫁せんと願はるれば、元就許諾せらる。又義隆の計らひにて、吉川元春と、陶尾張守隆房と兄弟の契盟をなさしめらるゝに依つて、元春、吉光の脇差を陶に引かれければ、陶は、その頃中國無雙と聞ゆる近江黒といふ馬を寄與す。此馬は、江州六角より、大樹義晴公へ獻じけ

毛利元就山口下向の事

元就隆元  
元春隆景  
等山口へ  
發向

吉川元春  
陶隆房兄  
弟の契盟  
をなす



るを、義隆に給はりて、其後陶隆房之を<sup>虫入</sup>□□得て、元春に與へしなり。斯くて元就、山口に於て瘡疾を煩はれて、其年は逗留せられ、翌年天文十八年三月十日、元就・元春・隆景・藝州へ歸られ、隆元は暫く山口に留りて、同年の夏、藝州へ歸城せられたり。

〔頭書〕一説に、今年天文十七年七月、井上黨御成敗と云々。井上一黨先祖代々、吉田ひすはの下に住す。此者先祖より四代計り、代々名を源太郎丸といひける。依つて彼の住みける屋敷を、世に太郎丸と云傳ふと云々。

〔同〕或書に曰く、備後の國侍安田右衛門尉・同國山田の住士渡邊四郎右衛門といふ兩人、吉田へ來りて、山口へ供せん事を乞ふ。元就聞<sup>虫入</sup>□□の者、同列に具し申さん事如何なりと宣ふと雖も、兩人類に<sup>虫入</sup>□て御供仕りたり。

〔同〕隆元山口逗留の中、志道上野介廣好・興禪寺の龍東堂、其外歷々附置かる云云。

### 一一一 神邊の城没落附目黒自殺の事

平賀太郎左衛門尉隆宗、備後國神邊の向城に籠りて、去る天文十七年より、同十九年に至り、三年の間、山名と對陣して、其間度々の追合あり。或時兩城より、足輕を出して打合ひ、山名勢暫く戦つて引きけるを、平賀追縋うて城中へ紛れ入り、古き小屋に火を付けて、其儘駈出づる。山名之を見て、追駈けたり。平賀城へ入る時、兵二人從ひて行きしが、一人は城へは入らず、橋の下に隠れ居たり。臆して留りたるにやと思ふ處に、城兵、平賀を追駈け出づる時、橋の下より差窺<sup>ましのぞ</sup>きて、數多の者の足を薙ぎけるに依つて、敵危みて、追駈け得ず。此者を後に聞けば、坂新五左衛門にてぞありける。其頃浪人して、平賀を頼み居たるとなり。其後天文十九年十月十四日、山名終に力盡きて、城を明渡して、雲州へ落ちんとす。是をば知らず、尼子晴久、目黒新右衛門に五百騎を相添へて、神邊を見繼ぐべき旨命せらる。目黒畏りて、此度若し城を救ふ事を得ずんば、二度當國の土を踏むまじと、誓言して出で



けるが、路次にて山名に行合ひ、互に仔細を語りて、今は勢を率ゐて、駈向ふに及ばずとて、軍兵共を山名に付けて出雲へ返し、我身は神邊へ打越え、平賀へ檢使を乞ひ、腹を切れば、檢使坂新五左衛門、則ち介錯す。其後彼の首を雲州へ送り遣す。目黒が二人の子供は、晴久計りて、目加田の家を續がせられ、目加田采女・同彈正右衛門尉とて、父にも劣らぬ勇士なり。

〔頭書〕山名下城の事、或説に云く、平賀、山名にいつて曰く、御邊と某兩人の爲に、多くの軍士を勞す、我れ心に本意とせず。然れば兩人獨身にして、雌雄を決せん事を欲す。某、足下の矢二筋受くべし。我に中らば、勿論殘卒敗に及ばん。若し御邊射損せば、速に城を明渡すべしと。山名是に應ず。依つて隆宗一騎、自ら陣前に進みて、胸板を敲いて矢坪好む。山名元より精兵、矢坪近く射ると雖も、平賀曾て動せず。笑つて忠興を欺いて曰く、御邊數日の籠城に倦きて、日頃の弓勢衰へて、今の矢、遙に下れり。今一筋の矢、心して射べしといふ。忠興此言を聞きて、今の矢下れりと思ひ、後の矢を放つに、甲の天扁を摺つて、平賀□□<sup>虫入</sup>是に依

つて□□<sup>虫入</sup>約する如く、山名城を明渡すと云々。關西圖記には、山名を杉原と記せり如何。

〔同〕坂新五左衛門事。私曰、或説に、元就、吉田御入城の時、毛利の家人の中坂某、渡邊長門守などは、相合殿に一味して、衆議一決せざる故、坂某は、相合殿生害の後、切腹させられたりとなり。此者新五左衛門が父か。新五左衛門、父の罪科に依つて流浪し、平賀を頼み居たるかと云々。

〔同〕今歲天文十九年七月十三日、毛利家中井上黨悉く御成敗。

〔同〕又一書に曰く、天文十七年七月、井上源五郎就兼・同源藏を始め、其一黨五十餘の□□□□<sup>虫入</sup>と云々。然れども天文十七年六月は、備後神邊御出陣、同八月□□<sup>虫入</sup>山口へ御下向にて、前後御閑暇なし。然□□□□<sup>虫入</sup>十九年といふ説、正義なるかと云々。

### 一三三 陶隆房相良遠江守と不快の事



相良武任  
重用せら  
る

陶相良不  
和

大内義隆の寵臣相良遠江守武任は、元筑前の國怡土郡の浪人なりしが、仔細ありて、大内家に近仕して、山口に居住す。才藝世に勝れたる故、義隆重く用ひられ、何事も渠が計らひに任せらるゝに依つて、諸人、相良を崇敬する事、大内譜第の老臣にも越えたり。義隆、家門繁榮の餘り、酒興遊覽を事として、武業を捨てられ、大内家衰微の基たる事、畢竟相良が所行なりと、陶尾張守之を憎みければ、相良、陶と不和にしては、行末悪しかるべしと思ひ、尾張守が嫡子五郎を婿に取り、親しくならんと、義隆へ内々此旨を申請ひければ、義隆、其由陶に言聞かせらるれば、某が婦には、兼て杉内藤が娘をとこそ存するに、相良は五郎が舅には不足なりと言切つて、中々許容の色なければ、遠江守も不足といひし詞を恨みて、其中彌々不和になる。杉内藤も、相良と不快なれば、陶、杉内藤相議して、武任を討果すべき旨相談す。義隆は、此事をば知らず、天文十九年九月十三日、香積寺に於て、終夜月見の會あり。同十五日は、八幡三の宮へ參詣し、管絃あるべしと、其用意之ある處に、陶隆房此隙を窺ひ、相良虫口館へ夜討に寄すべしと擬しけるを、相良漏聞きて大に驚き、

義隆隆房  
主從不和  
武任逃亡

急ぎ築山へ馳せて、義隆にいひけるは、尾張守、某に恨ありとて勢を揃へ、武任を討つべきに事寄せて、義隆に對し、隱謀を企つる由、内議評定の趣、委しくいひければ、義隆驚き、八幡詣の事をも差止められ、其用意として、山口中の軍士五千餘騎を集めて、築山の四門を堅めさせらる。是よりして義隆主從の中、不和になる。相良遠江守は、私の宿意に依つて、國中騒動に及ぶ事、義隆に對し不忠なりといひて、山口を潜に出で、石州津和野へ落ちけるが、夫より本國筑前國へ下りたり。

#### 一四 陶隆房隱謀の事

陶尾張守、杉内藤等を集めて密談しけるは、義隆、近年相良が佞奸を擧げて、我々が諫を用ひられず、用なき遊興に國費え、その身武道を忘れて、家風しつかい悉皆公家風俗となれり。斯の如くならば、義隆國を亡うしなはん事、必定なるべし。此度相良逐電の事も、義隆の介抱故なるべければ、向後各が身の上に、危難出で來らん事疑なし。此上は大内家、他人の有となさんよりは、義隆を討亡し、其上にて大内家長久の謀を

陶杉内藤  
等の隱謀



廻らすべしと、内談一決して、其後築山に行きて、義隆へいひけるは、相良遠江守事、御下知を蒙らず、國中を除き候事、御意に叶ふまじき段、兼て存當り候と雖も、奸人を其儘差置く事、大内家衰亂の基たるべしと存じ、我々身命を此事に失はん事、元より某が身の役なりと思設けて居候處に、御免を蒙る事、厚恩の至なり。さりながら此儘當地に在住せん事、世の誹如何はしく候間、嫡子五郎を山口に伺候せしめ、某は隱居仕りて、富田へ引籠り申したしと、頻にいひければ、義隆聞かれて、望の儘に許されける所に、冷泉判官隆豊、陶隱居を望む事、曾て安閑無爲の爲にあらず、唯若山の居城に引籠り、心閑に隱謀して、義隆を弑し奉らんと企なり。今度隆房、退隱の御禮に出仕せん間、其時必ず之を誅せらるべし。然らずんば、後大なる禍をなすべしと、強ひて諫言すと雖も、義隆曾て信用せられざれば、隆豊涙を流し、大内家滅亡の時、今に至りぬと思ひ乍ら、力及ばず退出したり。其後陶隆房は、家城富田の若山へ引籠り、豊後の大友左衛門督義鎮へ使を以て、隆房事、相良遠江守が爲に讒詞せられ、義隆の勘氣を受け、殺害の難を免れん爲め、力なく家城

大友義鎮  
陶を援ふ

へ引籠りぬ。此時若し御加勢あるに於ては、義隆を討亡して、御舍弟八郎義長を迎へて、大内家を續がせ申すべき旨言送る。又義隆よりも、大友へ援兵を乞はるゝと雖も、義鎮、終に陶に同心せられたり。毛利元就へも、大内・陶一同に、加勢の事申來る。折節元就の前に、兒玉三郎右衛門侍座しけるに、元就、何方へ與すべきやと尋ねらるれば、兒玉須臾の思案もなく、陶に一味然るべしといひければ、元就笑つて、當家興亡の大事、此度なるに、聊の思慮にも及ばず、假初の申言なりといはれければ、兒玉、是は兼てより、心に量見する所なりといひけり。其後隆元・元春・隆景其外老臣を集めて、此事を評議せられけるに、熊谷伊豆守が曰く、義隆、近年武業を取失ひ、遊樂に耽りて、家人多く之を疎み、却て權勢陶に及ばず、義隆勝利あるべからず。尤も主從矛盾をなすに及んでは、主を助くる事、義に當れりと雖も、其亡びんとするを見て、是に與し、共に亡びて益なし。大内家に對し、重恩の事にもあらず、時の權威に隨つて、一旦麾下に屬せらるゝにてこそあれば、一先づ陶に一味ありて、重ねて義隆の泉下の恨を散せらるゝ謀あるに於ては、當家彌興立あるべしと



元就隆房  
に一味す

いひければ、元就、向まむらに兒玉が申す所、今熊谷が詞と符合して、我心に思慮する所も、此の如くなり、一座の衆議是に決して、陶に一味の返事せらる。其後元就は、陶同心の驗に、平賀新四郎隆保が籠り居ける頭崎の城へ取懸けらる。隆保は、叶はざる迄も城に籠りて、快く一戦し、討死すべき由いひけれども、家人共、當城をば明退き、槌山の菅谷以下と一つになり、合戦あるべしと諫めける故、天文二十年八月廿七日、平賀、頭崎の城を退きて、西條槌山の城に入りて、菅田越中守・同三郎左衛門・大林和泉守・尾和備後守・材間入道等と一つになる。

〔頭書〕陶叛逆の時、杉隼人佐右田將監・青景・鷲津等を語らふとあり。陶が家の子深野彈正康澄・宮川左衛門房勝、隠謀の事甚だ不道なりと、様々諫止すと雖も陶容れず。

### 一五 義隆山口没落附大寧寺に於て自害の事

天文二十年八月、陶尾張守隆房は、大友・毛利を始め、備藝の國人、其外大内家の諸士

隆房義隆  
を攻めんとす

鷲津〔木カ〕・八木・杉青景以下、多く與力しければ、今は山口へ押寄すべしと勢を集め、同廿八日發向と定めたり。其頃山口には、大樹義晴公より上使ありて、珍羞を設け、日夜酒宴のみにて、軍の沙汰にも及ばざる處に、冷泉判官隆豊・天野藤内隆良・佐波新介・黒川近江守等、急に來りて、陶隆房、明日當地へ押入ると聞え候、急ぎ杉内藤等を集められ、防戦の評議あるべし。但し彼の兩人も野心を挾むの聞えもあれば、召に應せざる事も候べし。さあるに於ては、先づ杉内藤を討つて後、陶と一戦然るべき旨申しければ、義隆大に驚き、急ぎ山口中の軍兵を催さるゝに、案の如く杉内藤は、陶に一味して來らず。其外の者共六千餘騎馳集りぬ。黒川近江守・岡部右衛門尉等は、杉内藤等も敵となる上は、味方軍力乏しくして、築山に籠り居て、防戦せん事叶ひ難し。一先づ瀧の法泉寺へ義隆を移し、合戦すべしといひければ、佐波新介、とても叶はざる期に臨んで、築山を落ちられんより、唯一筋に思切つて、爰許に於て敵を引受け合戦して、興亡を試みらるゝ外あるまじと申しけるに、冷泉判官・天野藤内も、此議に同意すと雖も、安富源内・清四郎等、是非とも法泉寺へ落ちらる

義隆山口没落附大寧寺に於て自害の事



義隆山口  
没落法泉  
寺に據る

べし。各、観音寺を固めて防戦せば、敵輒く破ることを得ざる中、石州吉見正頼を頼まるれば、吉見後詰すべし。さあるに於ては、陶山口を引退くか、扱を請ふかなるべしと勧めければ、義隆此議に同じて、急ぎ法泉寺へ落ちらるれば、冷泉・天野等も力及ばず、築山を落ちて、観音寺求聞持堂、其外あたりの山上に陣取りて、押寄する敵を待ち居たり。今迄義隆に従ひたる兵、斯くの如くにては、事行かじと思ひけるか、皆散々に落失せて、纔に残る勢、五百騎計りなり。陶尾張守は、兎角して義隆、九州の地へ渡られなば、功成り難かるべしと、急ぎ山口へ打出で、同廿九日、法泉寺へ押寄せ関を作る。義隆、急ぎ阿川太郎を以て、山の手を固め居たる冷泉判官・黒川近江守・佐波新介・江口五郎が方へ、寺中の勢、落失せて無勢なり。早く是へ來りて、敵を防ぐべき旨いひやられければ、各、法泉へ來り集る。斯くて此阿川は、日來十分持ちたりと自讃すれば、定めて防戦群を抜くべしと思ふ處に、鎧を脱捨て、山傳して逃失せければ、之を見て諸軍士、我れ先にと落行きて、彌々殘卒、一戦の力もなかりければ、義隆、二條前關白尹房公へ、和睦の扱し給ふべき旨頼まれければ、尹房公

隆房法泉  
寺を攻む

義隆大寧  
寺へ奔る

より、法泉寺の住持に、大外記清原良雄を添へて使とし、内藤下野守盛興が方へ、義隆の心としていひやられければ、陶、和平せしめば、義隆、大内家を息新介弘貞に譲り、國中政務の事に於ては、陶・杉・内藤に任すべき旨、委しく演達せらるゝと雖も、陶曾て承引せず。相良・冷泉を始め、義隆方の武士の家、悉く焼拂うて、既に寺中に襲ひ來れば、義隆、此上は力なし、自害すべしといはれければ、清四郎、何卒九州の方へ落行き、豊前・筑前の味方を催され、重ねて此無念を晴さるべしと、頻に諫めければ、子息新介弘貞竝に二條前關白尹房公の御子息三位中將殿を先立て、夜半に法泉寺を落ちて、長門瀬戸崎より船に乗り、九國へ渡らんとせられけるに、運の果にや、悪風にて渡海叶はず。夫より力なく船を戻して、長門國深川の大寧寺に入りて、子息弘貞竝に二條三位中將殿・持明院一忍軒をば、彼寺の住持靈雪和尚を頼みて、和尚に伴ひ、三人の人々は、山中へ逃隠れらる。〔頭書〕異書に、義隆力なく、冷泉判官・鷹大寧寺迄落行かれしと云々。其後敵の寄するを待ちて、九月朔日、義隆、終に自害せられたり。〔頭書〕義隆自製、「うつ人もうたる、人も諸共に如露亦如電、應作如是觀」。義隆四十五歳と云々。冷泉判官隆豊則ち其首を討落して、障子壘を取重ね、

義隆自盡

義隆山口没落附大寧寺に於て自害の事



火を付けられれば、佛殿・方丈・僧堂・寶殿、一字も残らず焼上る。今迄相隨ひし士冷泉判官隆豊・天野藤内隆良・黒川近江守隆像・岡部右衛門尉隆景・禰宜民部丞・太田隱岐守・岡屋左衛門尉等、或は討死、或は自害し、炎の中へ飛入るもありて、思ひくりに死亡せり。

〔頭書〕天野隆良父は、式部大輔元連の次男にして、紀伊守隆重重弟なり。妻は千壽明國の女。實子なきに依り、兄隆重の三男宮内少輔元祐を養子とす。元祐の妻は、養父隆良の女なり。

〔同〕冷泉判官辭世に云、

身より立つ煙も雲も半天にさそひし風の末も残らじ

### 一六 大内新介及び公家人々最期并相良武任自害の事

大内新介弘貞二條三位中將・持明院一忍軒は、靈雪和尚具して、後の深山に隠れ居

弘貞自盡

らるゝ處に、終に搜し出されて、大内弘貞父義隆自害の由を聞き、昨日一所にて死すべしといひけるを、大勢一所に落ちん事叶ひ難き間、隠れ忍ぶべき旨、義隆いはれ、天野藤内等、頻に諫むるに依つて、唯今〔迄脱カ〕遁れ居たる事口惜しとて、首を伸べて討つべき旨いはるれば、此時迄附従ひたる小幡四郎、頓て其首を討落して、我身も則ち自害したり。弘貞は十二歳、小幡は十五歳と聞えし。三位中將殿も自殺せんとせられしを、敵押へて首を切る。持明院一忍軒は、爰をも遁しんとせられしを、敵追駈けて首を取る。三條前左大臣公頼公は、義隆、深川の方へ落行かるゝと聞きて、後を慕ひて行かれけるに、一揆原出向ひて、終に討たれたり。官務伊治は湯田の繩手にて、陶安房守が手の者切殺す。二條尹房公は、法泉寺を出でて鴻の峯を越え、覺雄寺といふ寺へ入られけるを、杉勘解由判官が軍兵行逢ひて、御自害あるべき由いへば、尹房公、吾は陶が怨敵にあらず、何故に自害すべきといはれけるを、邪見放逸の者共、無理く之を殺したり。其外廣橋大納言兼秀卿・右中將藤原良豊朝臣、義隆の諸侍にて、頃年山口に居られけるを、爰彼にて何れも害したり。

二條尹房  
斬らる

大内新介及び公家人々最期并相良武任自害の事



〔頭書〕一書に、中納言元頼卿と左兵衛督とは、一所にありて剃髮染衣して、漸として終に遁れ去り給ふと云々。又一書、中納言基頼、從二位親世等、剃髮逃走す云々。

扱相良遠江守武任は、本國筑前へ下りて、花の尾の城に籠りけるに、陶討手として、野上隱岐守隆忠〔頭書〕野上隆忠或は房忠とありに、三百餘騎を添へて差下す。立花宗像以下是に相加はりて、花の尾へ押寄せたり。城兵叶はず、多く落失せて、殘兵防ぎ戦ふと雖も、城中無勢なれば、防ぐ事能はず、相良武任終に自害す。

相良武任  
自害

### 一七 杉伯耆守自害附左京大夫山口に入る事

陶尾張守は、叛逆の心發りし頃、去年天文十九年の春、人を京都へ上せ、公方義晴公の諱の字を申し給はりて、晴賢と名乗ると雖も、隱謀の中は披露せず、山口出張の時よりして、斯くぞ唱へける。爰に杉伯耆守青景越後守、其向相良と不和にして、兩人、遠江守を失ひたく思ひ乍ら、彼は義隆の寵臣なる故、我が方に叶ひ難く、陶に

隆房晴賢  
と名乗る

杉伯耆守  
自害

近付きて、内々、相良、義隆に隆房が事を様々讒詞する由、告げ知らせたり。陶も始の程は、敢て信せざれども、折に觸れ事に隨ひて、言支へしかば、陶終に相良と隔意せり。其後義隆自害の後、其事皆無實にして、杉、青景が佞口より作す業なりと披露して、陶尾張守、杉伯耆守が罪を責めんとて、三千餘騎を率ゐて、彼宿所大崎へ押寄せれば、伯耆守は宿所を落ちしが、一戦にも及ばず、終に自害したり。青景越後守は、是より以前病死せしが、其家を斷絶す。斯くて陶晴賢、豫て約束の如く、大友左衛門督義鎮の舍弟八郎義長を迎へて、大内家相續させしめん爲め、天文廿一年二月、陶安房守隆信、杉勘解由、飯田石見守等を迎として、豊後へ差下す。八郎義長は、橋爪美濃守、同小太郎、吉弘右衛門大夫を始め、從士五百餘人を連れて、三月朔日、防州多々良濱に著き、同三日山口へ打入らる。頼て義長八郎を改めて、左京大夫と稱せらる。陶晴賢後見して、大内領國の政務を執行ふ。威權最も盛なり。其後陶剃髮して、全蓋と號す。

大友義長  
大内領國  
の政務を  
執行ふ

晴賢全蓋  
と號す



一八 藝州西條槌山城没落の事

大内義隆滅亡の後、其旗下の諸將、陶に従ふ者もあり、又尼子方へ成替る者もあり。其中に毛利元就は、豫て大内家の必滅を計り知りて、毛利家の興亡を鑑み、一旦陶に一味せらるゝと雖も、嫡子隆元、義隆の婿にして、其上先年尼子晴久、吉田出張の時、義隆の扶助を以て、籠城運を開きし事、芳志忘るべきにあらざれば、如何にもして、陶を亡して、義隆の地下の怨を報すべしと、元春隆景に密談せらる。其折しも石州津和野二本松の城主吉見大藏大輔正頼も、元就に同意して、互に時節を窺ふ處に、大内義長竝に陶入道全蓋より、使節を以て元就へ申越しけるは、藝州西條槌山の城に、大内方天野平賀より、菅田越中守・同三郎左衛門・大林和泉守・尾和備後守・材間入道等を籠め置く所に、平賀新四郎隆保、三百餘騎を帥ゐて、頭崎の城より槌山に入り、菅田父子以下と相議し、雲州尼子へ内通するの聞えある間、急ぎ彼表に出張し、之を攻滅さるべき由申來る。

元就晴賢を討つ意あり

元就槌山城を攻む

〔頭書〕異書に曰く、大内より備・藝の押として、藝州西條槌山城に、菅田越中守・尾和備後守・大林和泉守、其外同心の侍都合千四五百籠め置く處に、義隆滅亡の後、陶が下知に隨はず、雲州尼子へ内通すと云々。

元就いなび難くて、嫡子備中守隆元・二男治部少輔元春を大將として、熊谷・天野・香川・飯田・福原・桂・志道・兒玉・粟屋・赤川・井上・口羽以下四千餘騎、槌山表へ差向けらる。天文廿一年九月十一日、隆元・元春、諸勢を率ゐて、槌山の城を取圍まる。菅田以下の將卒、城外へ出でて防戦す。吉田勢・粟屋彌七郎・波多野源兵衛〔頭書〕天文十二年雲州退あり。此に出でたるは、天文十二年討死したる源兵衛の子なるべし。天文十二年より今年同廿一年迄十年なり。・尾崎新五兵衛・赤川源左衛門・桂善左衛門・福原左京吉川勢・二宮木工之助・粟屋伯耆〔頭書〕同市左衛門祖父なり。元春吉川入家の時附屬・山縣木工之助〔頭書〕後越前といふ。大越前是なり。・朝枝藤兵衛〔頭書〕後周防といふ。元春吉川入家の時附屬・佐々木彌十郎〔頭書〕後豊前といふ。・高彌三郎・武永四郎兵衛等、弓槍にて相働けば、菅田三郎左衛門を、元春の手にて射殺し、討取りたり。其外の者共散々に射立てられ討立てられて、皆城中へ逃籠る。寄手にも吉田勢・檜崎市佐など、新庄勢には綿貫兵庫討死す。其外手負百人計りと之を記せり。



〔頭書〕吉川衆二宮・山縣・粟屋・朝枝・綿貫は槍、菅田をば佐々木・高兩人、槍脇の弓にて射殺し、高も手負ひて相果つる。其外手負數十人。但一説には、此時手負ひて相果てたるは、高彌右衛門といふ者なり。此時吉田衆檜崎市佐も、各、同然に相働く。

### 一九 備後國泉合戦の事

天文廿二年、備後國江田旗或作烟の返城主江田入道は、大内家の幕下たしりが、尼子方へ成替るに依つて、義長の命と稱して、陶全臺、使を以て、毛利元就に江田を退治せらるべき由觸遣す。〔頭書〕江田入道、同國山内調略を以て尼子方へ成替なり。是に依つて元就、四千餘騎を率ゐて、備後國へ打越えらる。江田、此由を雲州へ注進しければ、尼子晴久、元就小勢にて他國へ出でたる事、願ふ所なれ。急ぎ江田が後詰して、元就を討亡し、藝州を切隨へて、其後防州へ打入るべしとて、雲伯石作の軍兵二萬餘騎を將ゐて、雲州富田を發せらる。此時を得て、同國涌喜の城主涌喜何某大内を背き、尼子方に一味して、大内よ

晴久元就  
對陣

り涌喜へ加勢として、籠め置きたる者を討果しければ、元就、先づ涌喜を討亡すべしとて、彼城に向はる。之に因つて晴久、涌喜を救ふべしとて、五月二十日、尼子紀伊守國久・同式部大輔・同左衛門大夫を大將として、牛尾遠江守・卯山飛驒守・米原左馬允・櫻井刑部少輔・廣田隱岐守・匹田左衛門尉以下五千餘騎、晴久の本陣に五十餘町先立ちて、同國泉の萩の瀬といふ所へ出張したり。一陣は、尼子式部大輔・卯山飛驒守・米原左馬允・匹田左衛門尉二千餘騎。二陣は、尼子左衛門大夫・牛尾遠江守・櫻井刑部少輔以下一千餘騎にて備へさせ、紀伊守國久は、二千餘騎を從へて、後陣に控へて打つて行く。元就は、吉川元春を先手の大將として、熊谷伊豆守信直・香川左衛門尉光景・飯田七郎右衛門・山田左衛門大夫・福島二郎左衛門・遠藤左京亮等を添へて二千餘騎、萩の瀬の橋を前に當て、備へさせ、自らは隆景相共に二千餘騎にて、少し後の小高き所に控へらる。泉入道父子、所の案内者なれば、先を望みて元春の手に加はる。互の先手、射手を出して、軍始りたる由、晴久の本陣へ告げ來れば、河添美作守・立原備前守・伊前入道・三澤三郎左衛門・松田勘解由・目黒佐渡守已下三千



餘、國久の手へ差添へらる。晴久も先陣の様子に依つて、合戦すべき覺悟なり。斯くて尼子勢、橋の上迄進むを見て、元春下知して、晴久の大勢續かぬ前に、急ぎ押崩すべしと、軍兵を進めらる。元春當年廿四歳、勇氣殊に盛にして、勇み進んで戦はる。折節五月雨に水増して、渡すべき瀬なく、只一筋の橋の上にて迫合ふ處に、尼子勢渡り兼ねて、引色になれば、米原左馬允之を恥しめ、真先に進んで、敵數多討取り、橋を越えんと勇み懸る。藝州勢、既に駢立てらるべく見えし處に、備後國の住人佐々木新右衛門といふ精兵、元春の麾下にありて、米原左馬允を射落して首を取れば、藝州勢是に氣を得、一同に切懸れば、雲州勢、橋の彼方へ颯と引けば、尼子式部大輔自ら槍を提げ、取つて返せと下知しけれども、尼子勢三町計り逃退く。元春は敵大勢なる故、長追を制して引返し、又前の如く、橋を隔て、備へらる。是に於て尼子左衛門大夫、入替りて討つて懸る。元春、豫て今度は敵に橋を渡させ、半途を討つべしと謀られしかば、敵進めどもあへて遮らず、尼子勢を思ふ圖に引受け、元春の下知に隨つて、一同に進み懸れば、尼子勢、忽ち利を失ひて引退く。元春少

し逃ぐるを追うて、又引返し、本の陣所に備へらる。元就父子は、今朝よりの戦に、先陣の人馬、定めて勞せんとして、二千餘騎にて入替らる。尼子方には、川を渡して、今一度快く勝負すべしと、晴久を始め國久父子憤られけれども、洪水にて、其上日暮に及びければ、其日の合戦は止みぬ。明けなば河を渡すべしと、雲州勢手分すと雖も、雨頻に降續き、水彌増りければ、晴久力なく、河向の陣を引拂ひて、釜が棟に陣取らる。元就父子は、志和知に屯して、水の落つるを待たる處に、備後國人等、雲州勢兩度の軍に打負くると雖も、元より大勢にして、而も今度は、先日の恥辱を雪ぐべしと、其勵をなすべければ、味方小勢を以て、重ねての軍は危かるべき間、此所をば先づ引拂はれ然るべき由、勸むと雖も、元就父子是に従はれず。穴戸・熊谷・天野以下を集めて、敵は定めて油斷すべき間、忍を以て其様を窺ひ、夜討すべきと擬せらるる處に、六月五日、晴久、釜の棟を去つて、山内迄打入らる。是に依つて涌喜の城明け退く。

〔頭書〕異書に曰く、備後國侍江田隆貫といふ者、大内の旗下なりしが、同國傍輩の



語らひに因つて、尼子方に成替に依つて、元就退治あるべき由、山口より申來る。江田は畑返といふ城に、己が手勢八百に、雲州よりの加勢彼此都合千餘の勢にて楯籠る。又祝の城とて屬城あり。祝甲斐守・同治部といふ者、籠り居ければ、先づ此の祝を攻破らば、江田は自づと落去すべしとて、元就彼表へ出張して、祝の城へ押寄せらる。甲斐守は、隠れなき勇剛の者なる故、悔り難しとて、豫て合戦の評議ありて、城の西南よりは、吉川・小早川其外宍戸已下、又東北の方よりは、元就父子向はる。寄手、仕寄を附寄せ攻懸れば、城兵も城の外廓に打出でて防ぎ戦ふ。東北の方は、切所なりと雖も、城中の者共は、案内者なる故、是も城外へ突出で、元就の旗本を目懸けて駈寄する。福原・志道を始め、宗徒の諸士等、一手一手の勇兵を進めて、爰を先途と攻戦ふ。敵味方手負討死數々なり。斯く數日、寄手稠しく攻寄せ、城兵多く討死して、殘少なに討ちなされたる費に乗つて、吉川・小早川已下、急に攻寄せ、既に乘崩さんとせられければ、甲斐守自ら出でて、味方を下知し、防ぎ戦ひしが甲斐守・兵部大輔共に、吉川勢に討取られければ、其外の城兵悉く死して、祝の城落去しければ、江田隆貫も畑返の城を明退き、山内へ落行きたり云々。

二〇 祝はふりの城没落の事

尼子晴久、江田が後詰として、數萬騎を帥ゐて打出でたる由、山口へ聞えければ、大内義長、元就へ加勢として、陶入道全蓋を上らせらる。六月十日、全蓋、畑返へ到りける所に、老母病氣の由到來あるに依つて、其日又山口へ立歸る。夫に依つて義長、重ねて内藤下野守・江良丹後守に、六千餘騎相添へて差上せらる。之に依つて同七月廿三日、先づ江田が屬城祝の城を攻めんとて、毛利元就・同隆元・吉川元春・小早川隆景、相從ふ侍には、宍戸・平賀・熊谷・天野・三須・香川・遠藤・入江・山田・飯田以下六千餘騎にて、祝の城へ押寄せらる。城には城主祝甲斐守・同治部大輔はじを先め、久代修理亮よりの加勢、彼此合せて七百五十楯籠り、〔頭書〕此城江田より加番差籠る由。矢間を開きて、散々に射ると雖も、寄手堀を越えて、堀の手へ付く處に、城兵槍・長刀にて、透間なく突落

元就等祝の城を攻む



祝城陥る

し、稠しく射立つれば、寄手叶はず、元の陣へ引退く。粟屋彌七郎只一人残り居て、當城の一番乗と名乗り、塀を越えんとする處を、敵槍にて真中を突通せば、粟屋眞逆に落つる。〔頭書〕粟屋手柄者なる故、三位殿御惜しみの由。元就父子四人、無二に城に乘入らんとせらるゝを見て、諸勢一度に進み懸る。〔頭書〕一説に、此時吉川勢の中、井上神兵衛・佐伯四郎兵衛・二宮八郎左衛門・江田彌二郎討死と云々。平賀太郎左衛門隆宗は、金の鎧を著、五百餘人の先に進み、青竹に鹿の角を結付けて、五十餘人に持たせ、之を打懸けて塀を引崩し、城中へ乗入れば、總勢續いて込入りたり。城兵防ぐに術なくして、祝甲斐守・同治部大輔・向長門守三人、共に元春の手へ討取る。其外名ある者、皆討死し腹を切り、雑兵は散々に逃落ちたり。其日元就の手へ首百七、吉川勢へ百十一、平賀が手へ八十、熊谷七十五、宍戸六十三、天野七十一、香川・飯田・山縣・佐東郡の勢の中へ、首六十五討取りて、都合首員五百餘なり。〔頭書〕此合戦勝利の響に依りて高の城も明退くと云々。此時防州より加勢内藤・江良には、備後勢を加へて一萬餘騎、尼子の押に置かれし故、祝の城へは向はざるなり。其後元就父子・内藤・江良一所に集りて一萬六千餘騎、伊山に陣を居ゑて、對陣せらるれば、江田堪へ兼ねて、十一月十三日、

畑返の城を明けて、山の内へ引退く。〔頭書〕此時江田の通路差塞がる。

〔頭書〕伊山に三家對陣の中、外郡・志川・瀧川の城を攻めんとて、七月廿六日、元就父子四人、彼表へ打出でらる。城主宮入道光音、暫く防戦すと雖も、遂に城を乗取らる。其後江田畑返城を明けて、山内へ引退くと、或書にあり。是に依つて尼子晴久、山内を引拂ひて、雲州へ歸らるれば、畑返の城に、江田丹後守を入置きて、元就は吉田へ歸陣せられ、内藤下野守は、防州へ歸りたり。

## 二一 備中國猿懸城軍の事

天文廿二年、備中國成合の城主三村修理亮家親より、三村五郎兵衛尉を以て、毛利元就へ、今より後、麾下に屬して馳走すべし。然れば同國猿懸の城主穗田治部大輔事、某多年の敵なり。若し御加勢あるに於ては、彼を退治せしむべき旨申越す。元就許容して、則ち二月上旬、父子相共に吉田を發せられ、同十五日元就・隆元は、備中國伊末井原に著陣せられ、吉川元春二千餘騎にて、猿懸表へ打出でらる。三村

元就猿懸城を攻む



修理亮先陣に進みて、一千五百餘騎、猿懸の城下へ押寄せて焼拂ふ。〔頭書〕此時元春、矢かけといふ處に到り、少し高き所に控へられ、吉田衆、吉川衆、少々先手へ加へらる。 穂田治部大輔之を追立つべしとて、人數を二手に分け、城外へ打出づる。同國の侍田治美・志賀・伊達等、穂田に與力して、共に打出で相戦ふ。穂田が軍奉行藤井四郎五郎眞先に進み、稠しく攻懸れば、三村叶はず引退く。吉田勢志道次郎四郎・椿新五左衛門・白井藤次郎・櫻井等、返し合せて討死す。穂田、既に元春の旗本迄攻付くれば、元春二千餘騎を二手に分け、待受けて戦はるゝ處に、井上河内守・同源三郎・同源五郎・同與三右衛門等五十餘騎にて、横矢に射立つれば、穂田終に破り得ず、城中へ退き入りたり。其後穂田終に降を乞ひければ、元就之を許して、三村が舊怨を取扱ひて、兩人の中和解せらる。

〔頭書〕穂田治部少輔は、則ち元就六男、伊豫守元清は、宰相秀元の父なり。但し元清事、治部少輔養子といふ説如何。元龜元年、備中國三村元親を御退治の處、同國穂田の庄式部少輔元祐、三村に與して討死す。其後三村も自殺して、備中國平均するに依りて、彼庄式部少輔が穂田の居城へは、毛利伊豫守元清入城して、

是より穂田治部少輔と稱するの由なり。又治部少輔と稱するは、彼家跡目の心にもあるか。世間古き覺書などにも、元清は、穂田の家を繼ぎ給ふといふ事、間々記せりと云々。

### 二二 尼子晴久播州發向 附 高田合戦の事

天文廿二年、備前・播磨・美作の國人、多く尼子を背くに依りて、之を退治せんとして、尼子修理大夫晴久、出雲・伯耆・隱岐・石見・備後・備中の勢を催し、三月中旬、作州へ發向せらるれば、當國の侍、又多く晴久に屬しぬ。其時備前の浦上帶刀左衛門宗景、一萬餘騎にて、高田表へ出張す。尼子晴久、三萬餘騎にて馳向ひ、稠しく相當らるれば、備前勢戦勞れて、引色になる所に、播磨國の住人宇野刑部入道七百餘騎、横合に打つて懸れば、出雲勢忽ち駈立てられ引退きて、其日の合戦は止みぬ。其後又尼子勢打出でたるに、浦上相懸りにして相戦ふ。其外備前・播磨の住人等、馳向ふと雖も、尼子勢多勢なれば、浦上終に打負け、高田表を引拂ひて、備前國へ引退く。晴久

尼子晴久  
播磨へ進  
發

晴久播磨  
を略す



頓て播磨へ打入り、城十七個所迄、攻抜かるゝ處に、刀田の太子堂に、衆徒多く籠りたるを、尼子思悔りて、卒爾に攻められける故、衆徒忽ち勝利を得たりしかば、播磨の一揆原蜂起し、其上又浦上宗景、多勢にて再び寄せ來るに依りて、尼子晴久、一先づ雲州へ歸りて、重ねて攻上るべしとて、播州を引拂はる。

### 二三 尼子晴久新宮黨を殺す事

新宮黨

尼子紀伊守國久は、晴久の叔父にして、權貴奉祿、尼子家に於て、肩を雙ぶる者なし。新宮谷に居城して、其黨數多く、父子の手勢三千餘なり。國久の嫡子式部大輔、次男左衛門大夫、何れも智勇父に劣らざれば、晴久、軍の度毎に、先陣を頼まれて、敵を破る事數度なり。然るに毛利元就、尼子を退治せんには、先づ新宮黨を亡してこそと思はれければ、謀を以て、先づ國久父子逆意を企て、元就へ心を合する由、街談せさせければ、晴久傳へ聞きて、國久父子に心を置きて、思ひ疑はれける折節、元就、又死罪に當りたる罪人一人、順禮の姿に出立たせ、竊に富田近邊の山路に切捨

元就尼子  
國久等を  
除かんを  
謀る

てさせ、〔頭書〕山佐の山路に切捨て置かせらるゝと云々。其膚に、元就より國久父子への文を結付けさせらる。

其趣は、彌、別心なきの由、其儀に於ては、何卒行を以て、晴久を討果さるべし。其上にて、所領の儀、望に任すべき旨、認めらる。所の者是に見當て、彼文を晴久へ差出しければ、國久父子が逆意、彌、實事なりとて、終に之を殺されたり。〔頭書〕新宮黨成敗の爲め、富田出城の途中にて、式部大輔に男子三人ありしを、兄善四郎、甚四郎は、父同前に生害せられ、三男助四郎は幼少なりしを、乳母人抱きて落ちけるが、成仁して、尼子左衛門尉勝久といひける。

### 二四 毛利元就陶晴賢入道全蓋と不和の事

毛利元就、兒玉若狹守・國司雅樂允兩人を使として、大内義長並陶入道へいはれけるは、江田の旗返〔細イ〕の城は、毛利家一分の行を以て切取り、尼子領分の境目にて、雲州へ働く道筋なれば、彼城を預けらるべき由、言斷はらる。陶、之を許容せずして、豫て江良丹後守を旗返に入れ置きしが、元就をも彼が下知に従はしめんと謀る。是に

晴久國久  
等を殺す

尼子晴久新宮黨を殺す事

毛利元就陶晴賢入道全蓋と不和の事



元就陶晴賢と不和

吉見正頼津和野城に據りて晴賢に反く  
晴賢津和野城を攻む

依つて元就、陶へ不順の色を顯して、其頃豫て内通せし吉見大藏大輔正頼、家城石州津和野の城に籠りて、陶に背くに依りて、元就より二宮隱岐守・伊藤三郎左衛門を加勢として、津和野の城へ差籠めらる。〔頭書〕吉田より軍士六百餘人、二宮・伊藤に付けて、吉見へ加勢ありしと云々。斯くて吉見大藏大輔、大内家に背くに依りて、陶入道全蓋、吉見退治の爲め、大軍を帥ゐて、天文廿三年三月、津和野の城を取圍む。是に依つて元就へも使を以て、出陣あるべき由云送れば、元就兎角の返事に及ばず、其使を追返さる。

〔頭書〕吉見正頼は、大内義興の婿、吉見家は、蒲冠者の苗裔なり。

〔同〕或記に曰く、吉見正頼、家人駒井伊豆といふ者を、修行者の體に出立たせ、密に吉田へ差越し、正頼事、義隆生害の後は、山口へ疎遠仕るに付、義長近日多勢を差向け、其家城を攻崩さるべきとの事に候。當家の廢亡此節に究まる。又隣國の好よしみを以て、援兵少々御合力ありて給はるべき旨、申送りたり。吉田に於ても、此儀段々御内談の上、加勢の事、許容し給ふと云々。

### 二五 元就神領發向の事

元就金山城を陥る

天文廿三年、毛利元就、陶方の城を攻落すべき爲め、父子四人相共に、二千餘騎を從へて、五月十二日、藝州神領邊へ出張せらる。其邊に居ける村田入道・杉生産太郎以下、陶方の者七百餘人、五日市表へ打出づるを、三家押寄せ攻戦はる。飯田七郎右衛門並に熊谷信直が家人末田新右衛門首を取り、其外の者共、敵六十餘人討取れば、殘兵散々に逃失せたり。同十八日、三家、佐東へ移軍せられ、金山の城に籠り居る麻生右衛門尉之重、八木の城の在番栗田肥後守が方へ使を立て、陶と手切の爲め押寄するなり。一急ぎ城を明渡すに於ては、命を助くべし。さなくば即時攻崩し、首を刎ぬべしと言遣られければ、兩城共に、異議に及ばず明渡す。

〔頭書〕佐東金山の城は、元來武田の居城なり。武田家斷絶の後、大内家より、押して城番を入れ置くに依りて、此度兒玉内藏允を以て、城を渡すべき旨宣ふと云云。



〔頭書〕或説、金山城粟田肥後入道、小城に麻生鎮重罷居るとあり。

〔同〕此時兒玉周防守、又一説、兒玉内藏允ともいへり。

仍つて麻生・栗田等をば命を助け、かいたいといふ所迄送り遣り、元就父子四人は、夫より二十日市へ打出で、已斐の城に籠り居る已斐豊後守・同理右衛門・櫻尾の城に楯籠る毛利與三・同河内守・新里式部少輔が方へも、右の如く使を以ていひ遣られければ、是も即ち下城したり。〔頭書〕此時洞雲寺に陣せられ、方々へ使を立てらる。櫻尾の城には、桂能登守を差置かると云々。已斐新里は、元

就に奉仕せんと願ふに依つて、元就許して味方とせられ、毛利與三・同河内守は、防州へ歸さる。〔頭書〕熊谷信直拔を以て、毛利下城、防州へ送下らる。其後元就、元春にいはれけるは、當國大野に、門山

といふ古城あり。防州の封境に近ければ、陶之を取立て、人數を籠め置く事あるべし。再び軍壘とならざるやうに、計らはるべき由、命せらる。是に依つて元春、二十日市より、大野へ到られけるに、案の如く、陶多勢を用ひて、其地に城普請せしむ。元春、則ち其警固の武士並に人夫を追拂ひて、墻壁を悉く擊破りて歸らる。

〔頭書〕或書に曰く、此時草津の城には、羽仁越中守在城して、折節越中は、山口に

在りて留守たり。羽仁は、元就縁者たるに依りて、異議なく城を明けさせ、福原内藏允に、同心二百騎副へて、籠置き給ふと云々。

### 二六 宮川甲斐守藝州に向ふ事附折敷畑合戦の事

陶入道は、吉見正頼が楯籠る津和野の城を、多勢を以て攻圍む。然る處に元就より、加勢として籠め置かれたる二宮隱岐守・伊藤三郎左衛門。城より出でて、高聲にいひけるは、毛利右馬頭元就、當城へ合力して、軍士を籠め置き、其身は藝州神領邊へ打出で、佐東の金山・八木・已斐・櫻尾の城共、悉く攻落し、頓て山口へ押入らるべき間、用心あるべしと呼ばはれば、陶此由を聞き駭く所に、三浦越中守、是は正頼が謀に、斯くいはするなるべし。事實に於ては、藝州の味方より、注進すべきものなりといへば、陶もさもあるべしといひて、心を安んじける處に、江良丹後守より、元就の振舞の様、委しく注進しければ、大内義長・陶入道大に驚き、則ち内藤彈正忠右田左馬助・弘中參河守等を集めて、評議せらる。

晴賢吉見  
正頼の籠  
る津和野  
城を攻る



〔頭書〕二宮隱岐守

筑後守

世稱大筑後一  
永世十四年武田退治の時藝州寺原臺が尾に於て討死

筑後

右京亮  
左京亮

順喜 西國一の基  
室堺三郎兵衛女

春久

土佐  
相合就勝生害の時十五歳、此時  
福方といふ母一所に蟄居す後に  
妙玖様召出され剃髪させ則ち阿  
彌と改名して元就公へ託言して  
給仕せしめらる

就辰

信濃  
室問田和泉女

元經

隱岐  
外祖の名字問田を名乗る

春貞

源三郎  
吉川家に仕へ石州濱田を領す二宮本領なり

元鏡

甚左衛門  
入道心齋

家喜

甚左衛門  
法名徳齋

徳兵衛

改問田

弘中參河守は、先づ吉見と和睦せしめ、元就を退治せば、吉見は自づと手に入るべしといへば、陶、然らば今一度攻めて、敵の強弱に依つて、兎も角も計らふべしとて、城を火急に攻めけれども、吉見能く防ぎて、毎時勝に乗りしかば、さらば毛利勢を押させて、心安く城を攻むべしとて、陶が家人宮川甲斐守に、三千餘騎を添へて

折敷畑合戦

差遣す。五月廿三日、石州より防州へ打越え、山代の一揆の大將甲田丹後を語らひしかば、藝州大田・山里の一揆原も馳加はりて、都合七千餘騎、同晦日、藝州二十日市折敷畑の山下に著く。〔頭書〕一書に、元就折敷畑へ馬を出さる、時、嚴島社人石田六左衛門、卷敷御條差上ぐる。御父子下馬して、頂戴し給ふと云々。翌朝六月初日の東雲に、宮川甲斐守・同清左衛門・同彦三郎・末富源太左衛門等、折敷畑へ打上りて、陣を取れば、山代の一揆大將甲田丹後・嫡子與三郎・赤根・栗林など、四千餘騎にて、同じく陣を取る。元就父子四人は、櫻尾城に居られけるが、敵陣を見て、是は定めて陶入道、石州津和野の城を攻亡して、是迄出でたるなるべし。後詰の勢加はらざる中、急ぎ挫くべしとて、則ち打出で、手分をせらる。元春は、折敷畑の北の尾より、隆景は、地の御前の方七つ尾の南の道より、攻上らる。元就・隆元は本道筋より、宍戸・福原・桂志道・口羽・赤川・渡邊・兒玉以下を従へて攻上らる。元就、坂新五左衛門・坪井將監等に、敵に懸つて偽り逃げば、敵勝に乗つて北ぐるを追ふ時、味方一同に攻め合せて、討破るべしと下知せらるれば、坂・坪井、其命に従ひて、敵に懸つて、少し引色に見すれば、案の如く、敵勝に乗りて攻懸る。元春・隆景、南北より攻



寄せらる。宮川は、山の半腹に下し合せて、手痛く防戦す。其外甲田・赤根・栗林以下七千餘、眞逆に打下す。宮川清左衛門、吉川勢に向つて防戦する處に、手を負ひて少し疼む處を、元春、一際味方を勇めて、下知せらるれば、熊谷伊豆守・同嫡子兵庫助・天野紀伊守・香川左衛門尉・飯田七郎右衛門・山縣筑後守・福島三郎左衛門等を先として、藝州の國人等、我先にと攻上る。敵は七千餘、而も嵩<sup>かさ</sup>より防ぎ戦ひ、味方は三千餘騎にして、山坂に向ひ相戦へば、叶ひ難く見ゆると雖も、元就父子、頻に進んで攻上らるれば、甲田が一族、末富の者共、多く討たれ、宮川勢少し立足になる處を、三家透さず攻上らるれば、防州勢、終に押立てられ、山上へ退き登る。大將宮川甲斐守取つて返し、度々戦ふと雖も、返し合する味方なければ、山路を傳ひて退きけるを、熊谷伊豆守が家人末田新右衛門追駈けて、之を討取りたり。總勢も津田・友田・麻原邊迄逃げけるを、追討して討取る。首數都て七百五十餘なり。翌六月二日、元就、草津の城に兒玉周防守、櫻尾に桂能登守、仁保の島の城に香川左衛門尉を籠め置きて、三家は、佐東の金山迄打入らるゝ處に、町野入道・同相模守を大將とし

元就勝軍

て、折敷畑にて討洩らされたる者共、神領表へ馳集り、一千餘騎にて打出で、明石といふ所に陣取りたり。元就、敵敗軍の後、小勢にて、戦を望みて打出でたるは、皆死を一途に思切つたるなるべし、悔るべきにあらずとて、備を定め、先陣吉川治部少輔元春・熊谷伊豆守を伴うて、本道より押寄せ、相戦はるれば、小早川勢其外宍戸安藝守・天野紀伊守は、脇道より横合に切つて懸れば、町野以下、終に叶はず逃行くを、追討にして、首七十餘討取りたり。同六日、三家、佐東へ開陣せらる。

〔頭書〕異書に曰く、元就、二十日市に陣を居る、御手段之ある所に、山口勢、山里・河内・倉重迄取續け、多勢にて、石打・大野・小瀧に陣取る由聞き給ひ、先づ山里・河内・倉重邊へ打出でたる勢の多少、陣取の趣、物見すべしとて、宍戸安藝守に福原一手相加はり、廿五日の夜半に、二十日市を打立つ處に、小瀧・大野に陣取りたる山口勢、廿五日巳の刻計りに、二十日市より西、折敷畑・七ツ尾といふ所へ打出でたり。元就の本陣とは、中間二十四五町なり。元就則ち宍戸・福原を呼返し、各、評定之有りと云々。又曰く、宍戸・福原は、是も七ツ尾の北より、旗本左右の先坂新五



左衛門・熊谷信直、後備は桂・兒玉、旗本には口羽・大野、其外近習衆、櫻尾城には、志道・國司・赤川・粟屋に五百騎附けて、殘し置かるゝと云々。

〔頭書〕六月朔日午の刻計り取懸らる云々。

〔同〕元就、此時坪井を召して、敵に懸つて矢二筋・三筋射懸けば、敵定めて討留めんとて、駈け來るべし。其〔時脱カ〕叶はず引退く體にて、早々逃歸るべしと、諸軍の中にて仰付けらる。兩人畏りて打出づる。敵に逢ひて逃げよとの御下知には、御請の申様もあるべきか。此將監は、懸れと御下知ある時は、何時にても一番に懸り。逃げよとの御〔下知カ〕には、人虫口へ逃げ申すべきぞといひて、駈出でたりと云云。兩人敵合二三十間計りにて、坂就良坪井就光と名乗り、一陣に進める武者二人、兩人して射落せば、敵討取らんとて、懸り來る。其處にて兩人、後をも見ずして逃歸りたりと云々。其後又取つて返し、敵四五人突伏せたりとなり。

〔同〕宮川をば、一説に、吉田・相合催使討取る云々。

〔同〕又或説には、元就近習小川助左衛門・熊谷が内末田新右衛門、兩人して討取

る。其外佐東の者共山縣・福井・飯田・福島・豊島等、何れも分捕したりとなり。此時味方にも、田中五郎兵衛討死すと云々。

〔同〕或説に曰く、或軍學師の曰く、軍法に箭入・旗掛といふ事あり。古老の物語に、毛利元就公、折敷畑の合戦に、箭入を仰付けたる由、妙謀奇計の事なりと云云。

### 二七 長安城明退く事井大田懸の橋合戦の事

同六月二十日、元就、石州長安の城主長安入道、陶方なるに依つて、之を退治せしめんとて、元春を大將として、熊谷伊豆守信直・天野紀伊守隆重以下、二千餘騎差向けらるれば、長安入道降參して、城を明渡し、其後長安は、益田越中守を頼み居たり。七月二日、元春、同國大塚の光明寺へ、陣を移さるゝ處に、大田邊の一揆、小坂宮内といふ者、大將として二千餘人、懸の橋を前に當て、陣を取る。元春より、家臣今田上野介經高・二宮木工助〔頭書〕佐森脇大藏大輔〔頭書〕越後事か。越後嫡子を差向けらる。此

元就長安  
城を陥る



橋、廣さ一尺に足らぬ小橋なれば、渡り兼ねて、橋際に大勢集ひける處を、一揆原、  
 鏃を揃へて矢を放つ。森脇大藏大輔、橋を一番に走り渡れば、二宮も續いて切つて  
 懸る。今田上野介、兩人を討たすなと、軍士を勇めて、續いて渡れば、小坂宮内、  
 一支は支へけれども、後軍より崩れて逃行けば、小坂も方なく引退きたり。斯くて  
 元就は、此次ついでに、一揆原の根を斷つべしとて、父子相共に、吉和・山里に打出でらるれ  
 ば、一揆原、防州勢に相加はりて、險隘の地に屯したり。〔頭書〕此時元就父子は、  
 みのち迄出張の由なり。七月十  
 四日、元春、先陣に進みて押寄せらる。兒玉四郎右衛門・桂善左衛門・福原宗右衛門・井  
 上民部・坂新五左衛門・新庄勢には二宮木工助・森脇市郎右衛門・朝枝因幡・山縣四郎  
 右衛門〔頭書〕山縣四郎右衛門春貫云々。筑後守元光の子、初  
 め木工允といふ。山縣市右衛門・同判右衛門等父なり。以下拔駈して攻懸る。一揆原も楯  
 を突並べて、暫は防ぎ戦ひけれども、終に打負け退散しけるを、追詰めて首二百餘  
 級討取りたり。其後一揆は静まりぬ。

### 二八 野間隆實降參の事

元就保木  
城を圍む

備後國保木の城主野間常陸介隆實は、大内方として、手勢八百餘にて籠り居ける  
 に、山口より加勢として、羽仁中務・小幡左衛門尉に、四百餘人を添へて、籠め置き  
 けるに依つて、之を攻亡すべしとて、元就父子四人三千餘騎にて、九月五日、保木の  
 城を圍まる。小早川勢一番に、天神山へ乗入れれば、吉川勢は、羽仁・小幡が籠りたる  
 出城でしちの新丸へ切入り、小早川の臣井上又右衛門・吉川の臣森脇市郎右衛門、天神山  
 新丸にて、一番に乗込み、何れも一番首を取る。元就の旗本には、赤川左京亮・同源  
 左衛門・粟屋彌四郎・兒玉四郎兵衛・志道源藏・桂善左衛門等、比類なく働きたり。總勢  
 押續き攻入らんとする處に、城主隆實は、熊谷伊豆守信直が堵たるに依つて、熊谷、  
 其命を乞ひて、降參せしめたり。羽仁・小幡をば方便たひかりて誅せらる。此日討取る首  
 員二百餘なり、夫よりして備藝の兵、多く元就の幕下に屬したり。其後藝州佐西  
 表に、陶方の軍士、多く陣取りたる由、注進あるに依つて、元就父子四人、二千餘騎  
 を率ゐて、十月三日、佐西へ出張せらる。然れども敵早速退散して、三石邊に纒殘  
 り居るを、熊谷伊豆守に命じて討たせらる。熊谷馳合ひて相戦ひ、三十七人討取り

保木開城

備藝元就  
に歸す



たり。

〔頭書〕或書に曰く、吉田より海田・保木・高山といふ城迄、行程十里計りなり。吉田より六七里過ぎて、加阿川といふ大河あり。陸地をば温科ぬいしなといふ。野間勢虫入□□品へ差向ひ、防がんとす。元就案の外、佐東へ向ひ給ふ。之に依つて野間、俄に軍を返して、西の方へ差向くる。元就又夜に入りて、軍士虫入□□分虫入□□り温科を経て、東西より押寄せらる。野間又、西の方へ向ひたる人數を、急に引取らんとす。其間に元就先手攻め寄せ、城に乗入り、本丸と砦の間を取切り戦ふに依つて、城中防ぐ術を失ふと云々。

〔同〕吉川・小早川の手へ、一首數十級討取り、吉川衆小坂藤五郎討死。兩殿天神山に陣取らる。城近き故、元春の陣屋へ矢來りて、横道藤兵衛手を負ふ。

〔同〕隆實、其後吉田三入に罷居る由。野間家中の者共をば、山下の寺へ下し討果さる。羽仁・小幡以下をば、山口へ送り下すべしとて、藝府町にて人質を取返し、調議相圖にて、兩川衆を以て、悉く討果さる。

### 二九 諸處在番并陶入道江良丹後守を殺す事

弘治元年、元就より、石州津和野の城へ加勢として、籠め置かれたる二宮隱岐守・伊藤三郎左衛門歸り來る。吉見大藏大輔が使、密に相伴ふ。使の辭ことばに、城中糧盡くる折節、陶入道より、伊加賀民部を以て、和平の儀申入るゝに依つて、後の計策をなさんが爲め、偽りて和睦したる由申演ぶ。元就、使に對面して返されたり。陶入道全蓋は、元就を押へしめんが爲め、防州錦見の龜屋の城に、弘中參河守を籠め、同所琥珀院に、江良丹後守を置き、藝州友田の高森の城には、武田刑部少輔信實に、防長の勢八百餘騎相添へて籠め置く。是に依つて元就も、藝州狼山に向城を築いて、進藤豊後守を在番せしめ、其手當とせらる。其後江良丹後守は、陶方に於て、肝要の者なる故、元就、之を亡さまはしく、内々謀を廻めぐらして、江良が手跡を近習の者に書似せさせ、元就へ内通の文言に、消息一通認めさせ、龜尾の城の近邊、關所の法橋橋に、之を落し置かせらるれば、所の者拾ひ得て、弘中參河守に見せければ、弘中見

元就の謀

諸處在番并陶入道江良丹後守を殺す事



に陥り晴  
討つ江良を

て、江良が手跡に紛れなきに依つて、此旨山口へ注進しければ、陶則ち弘中參河守に命じて、江良を討果させたり。

〔頭書〕或説に、津和野の城を、大内勢大軍にて取巻き、正頼難儀に及ぶ由、二宮伊藤より注進するに依りて、元就、又坂新五左衛門・中村次郎左衛門に、軍〔兵カ〕六百付けて遣さるゝ處に、其内に和睦調ひ、正頼が使に、道にて行逢ひ、兩人も此所より引返したりと〔云カ〕説あり。

〔同〕吉見、此時二宮伊藤を、藝州みのち迄送り付くる。

〔同〕或説、江良丹後守、元就の武威を見て、兎角元就の存分に任せられ、和睦あるべき由、全蓋に勸む。陶、扱は丹後守、毛利家へ内通にての事たるべしと思ひて、琥珀院にて、切腹させたと云々。

〔同〕或書に曰く、元就、陶を討亡されんに、味方少勢なれば、方便の謀を以てせんと思はけるに、江良丹後守、智謀長けたる者なれば、渠、陶が軍下〔虫入〕に□□□妨をなすべしと思はれければ、彼者を何卒討亡さんと、種々工夫を凝らされける處に、

陶、元就へ間諜の爲め、宮川善左衛門といふ者を、偽りて勘當し、山口を追出しければ、宮川、吉田に來りて、奉公せん事を願ふ。元就、其謀を察し、殊に懇に近習に差置き召仕はれ、宮川妻子を、吉田へ連越さん爲め、暫時の暇を乞ふ時、江良豫て元就へ内通するに付、密謀の趣に書簡を認め、此使に、江良へ届くべき言云合め、其後宮川へ難役を言付け、領掌し兼ねたるを序にして、暇を出されければ、宮川、直に山口に歸り、江良が内通の事を、陶に披露し、右の書簡をも見せければ、陶、之を信じて、江良を殺害せしとあり。

〔同〕又曰く、宮川、吉田へ來りし時、此者親善左衛門、先年尼子出張の時、大内義隆後詰として發向して、元就運を開かれし時、善左衛門深野と〔虫入〕討死したり。毛利家の爲に戦死したる其方なれば、隔なく召置かるべき由、宣ひ聞かせられ、〔虫近カ〕習に奉仕せしめられたりと、一書に之あり。

### 三〇 元就嚴島城を築く事



元就嚴島  
に城を築

同年、陶入道全蓋、防・長・豊・筑四箇國の勢を催して、藝州へ發向するの由聞えければ、毛利元就・嫡子備中守隆元・二男吉川治部少輔元春・三男小早川左衛門佐隆景、密に評議せられしは、敵軍を討るに、二三萬騎に餘るべし。味方は纔に三千餘なれば、平場の合戦に於ては、勝利を得難し。嚴島に城を作りて、陶を方便たひかりて呼び引渡し、有無に興亡を決すべしとて、五月下旬より、嚴島有の浦に城を築かる。其心を知らず、諸臣共は之を怪み、難する者もあり。普請最中、六月八日、敵船三艘寄せ來る。

浦兵部丞飯田七郎右衛門、警固船を押出して、敵船の將桑原掃部助を、飯田七郎右衛門討取れば、其餘の船、利を失うて逃去す。

〔頭書〕或説、隆景渡海普請調へられ、番衆・兵糧等仕置言付けられ、歸らる云々。斯く

て城成就せしかば、元就命じて、已斐豊後守・同五郎兵衛・新里掃部助を大將として、垣田・伊藤・片岡以下、其外元春より、樋口彦兵衛・佐伯源左衛門兩人を籠め置き、都て城兵三百餘人なり。其後元就は、嚴島に城を築きし事、今に於ては後悔なり。陶先づ彼城を攻取らば、味方敗亡必定ならんと、常々いひ私語さしやかれけるを、陶が内通の者、山口へ馳行きて、此旨を告知すれば、全蓋悦びて、藝州へ發向せば、先づ嚴島の城を攻落すべしと覺悟したり。

### 三三 仁保島合戦の事

同年七月、陶入道、先づ嚴島・仁保二十日市邊の城の様體を見計らふべしとて、家人三浦越中守に、兵四百餘騎相添へ、船數艘にて、彼邊へ差遣す。三浦、草津二十日市の沖を漕廻り、巡見して、仁保島へ船を寄せて打上る。此處には香川左衛門尉光景在番しけるが、城兵二百餘人、出向ひて防戦す。城中の兵、聊か利を失ふ處に、香川左衛門尉、敵一人突伏せ、家人宗像三郎左衛門も、同じく一人突倒しければ、城兵是に力を得て、一文字に攻懸つて、戦闘時を移す處に、日既に暮に及び、其上寄手多く手を負ひぬれば、三浦船に取乗りて漕退きたり。

〔頭書〕光景家人芥川七郎次郎、槍下にて討死。

〔同〕三浦越中守事、先祖三浦介時高、將軍義教公、鎌倉持氏と矛盾起りし時、時高、心變りして、持氏に背き、鎌倉中を放火し、持氏の子息賢王義久を生捕り、不義の弓



を引き、無道の卑怯に誇りし故、關東の武士、皆唾を吐き悪まざる者なし。既に追放の謀を廻らしければ、先祖大介義明が譽名をも、腐くさしぬる事無念なりと、前非を悔いて、時高は終に自害し失せぬ。其子新介元久、京都に漂泊し、牢浪の身となる。渠れ逆人の子虫入□□□□も、一度將軍家に對しては、忠烈ありし者の子孫なれば、無下に見捨てら虫入□□事にもあらずとて、大内左京大夫持世に預けらる。持世、他事なく憐み、周防國仁保庄を宛行ひ、在京は無益と制しければ、後仁虫□名字を引替へ、夫より彼庄を領し繼ぎて、代々大内家に給仕すと云々。

〔頭書〕但仁保家、三浦の嫡流にして、越中事も、其庶流なるかと云々。

### 三三二 陶入道嚴島渡海并合戦の事

陶尾張守晴賢入道全蓋は、毛利元就を退治せんとして、弘治元年九月五日、防州山口を打立つ。相従ふ侍には、大和伊豆守興武・陶安房守隆信・杉民部大輔重光・弘中參河守隆兼・同中務大輔隆助・宮左衛門尉・間田掃部助・重見因幡守・羽仁越中守・同將監・三

晴賢嚴島を攻む

浦越中守以下虫入□萬餘騎、同國岩國に到りて、永興寺に陣を取りて、軍議評定す。陶入道は、先づ嚴島へ渡りて、元就が、さしも地の利を得たりと思ひて、築きし城を攻取らんとひければ、弘中參河守が曰く、先づ二十日市の櫻尾・草津の城を攻落し、夫より吉田へ發向然るべし。元就小勢なる故、死地に於て、安否を一戦に決せん爲め、嚴島の城をば築きしものなりと、再三いひけれども、陶入道承引せず。九月十六日、七百餘艘の兵船に取乗りて、終に嚴島に渡海す。〔頭書〕此時警固大將守賀島十郎左衛門尉。弘中參河守は、全蓋淺智にして、元就の謀の中に陥らんと知り乍ら、力及ばず、二日後れて渡海したり。陶入道は、塔の岡に本陣を居ゑて、三浦越中守等に、有の浦の城を攻めさすれば、三浦手勢二百餘人にて、最初に仕寄を付けて、押寄すれば、大和伊豆守・羽仁越中守、次第に陣を寄せ、備堅固に構へたり。城兵遁るべき方なければ、死を一途に定めて防戦す。此時迄は、鐵炮世あつたれに周からず、寄手には六七挺もありて、放ち懸けしかば、是に城中迷惑して、此由吉田へ注進ありければ、毛利元就、嫡子備中守隆元・二男吉川治部少輔元春・三男小早川左衛門佐隆景、其外國侍には熊谷伊豆

陶入道嚴島渡海并合戦の事



守信直・同嫡子兵庫助・同左馬助・同右近大夫・同兵部少輔・天野紀伊守隆重父子・阿曾  
 沼豊後守・三須筑前守・出羽中務・飯田七郎右衛門・遠藤左京亮〔桑方〕・葦原藤左衛門・香川左  
 衛門尉・同淡路守・同左馬助・山田出雲守・同左衛門大夫・山縣筑後守・福島三郎左衛門・  
 竝に毛利家譜第の侍福島左近將監志道上野介・口羽下野守・兒玉三郎右衛門・粟屋掃  
 部助・同縫殿允・同右京亮・渡邊太郎左衛門・同飛驒守・赤川十郎左衛門・同右京亮・國司〔左方〕  
 以下、都合三千五百餘騎を率ゐて、九月下旬、嚴島の向地の御前の火立岩に陣を取  
 らる。

〔頭書〕熊谷

兵庫助隆直。左馬助直清。左近大夫廣直。兵部少輔隆經。此部三須筑前守養子なり。

阿曾沼豊後守廣秀。

三須筑前守房清。一書に出羽忠熙とあり。

〔同〕又佐東の内、小身の衆には、山縣福井・福島飯田・桑原・豊島、彼是四千餘にて相從ふとあり。

此時宍戸安藝守隆家に、吉田の留守を預けらるゝに依つて、深瀬彈正を、元就に従はしむ。陶大勢なれば、勝敗如何と、諸軍思ひ煩ふ處に、熊谷伊豆守、嚴島の神主に賄して、此度の合戦、毛利家勝利を得べき由、靈夢を蒙りたりと告げ來るべしと、竊に頼みたれば、神主、頓て元就の陣に來りて、教の如くいひければ、諸軍士、之を聞きて勇み合へり。此時伊豫國の能島掃部助武吉〔頭書〕關西關記に吉久とあり。來島通康、此兩島、船軍に術を得たれば、味方に屬せしむる様にと、元就、隆景に命せらるれば、隆景、則ち家人有田加賀守を遣して、之を招かる。陶入道も同じく文を以て、加勢を乞ふと雖も、兩島、毛利家へ與すべしと評議して、村上右近大夫・因島新藏人兩人、相共に數十艘の兵船に乗りて、有田一同に漕ぎ來る。兩陣之を見て、何方へ船を寄すべきやと、目も放たざる處に、終に兩島、二十日市の沖に碇を下したれば、藝陽勢悦び合へり。

〔頭書〕異書に曰く、船手には、豫州の能島・來島、ほうろく火箭を、敵船數艘へ打入れ、海上を漕廻り、煽割數百人、之が爲に打殺さる云々。